鳥取県埋蔵文化財センター調査報告 20

一般国道９号（名和淀江道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書ＸＶ

鳥取県西伯郡大山町

CHA BATA ROKU TAN DA

茶畑六反田遺跡Ⅲ
（4・5区）

２００７

鳥取県埋蔵文化財センター
国土交通省　倉吉河川国道事務所

1．土坑12遺物出土状況（東から）

2．竪穴住居2完掘（北から）

巻頭図版2

1．掘立柱建物5（東から）

2．中世耕作痕（東から）

序

一般国道９号名和淀江道路の改築に伴う発掘調査は、平成 12 年度から行われ、平成 18 年度末時点で遺跡数は 18 遺跡に及んでいます。

この発掘調査は、平成 17 年度から鳥取県直営の事業となり、鳥取県埋蔵文化財センターが担当することとなりました。

そのうち､大山町にある茶畑六反田遺跡（４・５区）では､弥生時代と平安時代の集落跡、中世から近世にかけての耕作の跡などを検出するに至り、この地域の歴史を解明するための貴重な資料を確認することができました。

また、埋蔵文化財センターでは、発掘調査により明らかとなった遺跡や出土品を活用し、その普及啓発に努めることも重要な業務としております。

茶畑六反田遺跡でも、現地説明会を開催し、多くの方々にその素晴らしさを実感していただきました。

本書はその調査結果を報告書としてまとめたものです。この報告書が、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財が郷土の誇りとなることを期待しております。

本書をまとめるにあたり、国土交通省倉吉河川国道事務所、地元関係者の方々には、一方ならぬ御指導、御協力をいただきました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成 19 年 12 月

鳥取県埋蔵文化財センター

所　長　久保　穣二朗

序　　文

一般国道９号は、起点の京都府京都市から山口県下関市にいたる、総延長約 691㎞の幹線道路であり、西日本日本海沿岸地域の産業・経済活動の大動脈として、地域住民の生活と密着し大きな役割を果たしています。

このうち、国土交通省倉吉河川国道事務所は、東伯郡湯梨浜町から米子市（鳥取―島根県境）までの 92.3㎞を管轄しており、時代の要請に沿った各種の道路整備事業を実施しているところです。

名和淀江道路は、西伯郡大山町から米子市淀江町にかけての、国道９号の渋滞緩和、荒天時の交通障害の解消、また、災害時の緊急輸送の代替道路確保、などを目的として計画された一般国道９号のバイパス（自動車専用道路）であり、鋭意事業に着手しているところです。

このルートには、多数の埋蔵文化財包蔵地がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第 94 条の規定に基づき、鳥取県教育委員会教育長に通知した結果、事前に発掘調査を実施し、記録保存を行うこととなりました。

平成 17・18 年度は、「門前上屋敷遺跡」、「門前鎮守山城跡」、「門前第２遺跡」、「茶畑六反田遺跡」の４遺跡について鳥取県埋蔵文化財センターと発掘調査の委託契約を締結し、発掘調査が行われました。

本書は、上記の「茶畑六反田遺跡（４・５区）」の調査成果をまとめたものです。この貴重な記録が、文化財に対する認識と理解を深めるため、ならびに、教育及び学術研究のために広く活用されることを願うと同時に、国土交通省の道路事業が、文化財保護に深い関心を持ち、記録保存に努力していることを御理解いただければ幸いと存じます。

事前の協議をはじめ、現地での調査から報告書の編集にいたるまで御尽力いただいた鳥取県埋蔵文化財センターの関係者に対して、心から感謝申し上げます。

平成 19 年 12 月

国土交通省　倉吉河川国道事務所

所　長　　飛田　敏行

例　　言

1　本書は、国土交通省中国地方整備局倉吉河川国道事務所の委託により、鳥取県埋蔵文化財センターが、一般国道９号（名和淀江道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査として、平成 17･18 年度に行った茶畑六反田遺跡（４・５区）の発掘調査報告書である。

2　本報告書に収載した茶畑六反田遺跡の所在地は、鳥取県西伯郡大山町茶畑字片吹 360 － 1 他３筆である。調査面積は、延べ計 12,706㎡である。

3　本報告書で示す標高は、４級基準点Ｓ２の 55.448 ｍを基点とする標高値を使用した。方位は、公共座標北を示す。なお、磁北は座標北に対し約６°10′西偏、真北は約 20′東偏する。Ｘ：、Ｙ：の数値は世界測地系に準拠した公共座標第Ｖ系の座標値である。

4　本報告書に記載の地形図は、大山町作成の「大山町全図 10・11」（1/2,500）、「大山町都市計画図２」（1/5,000）の一部を使用した。

5　本報告にあたり、調査前基準点測量及び方眼杭打設、自然科学分析を業者委託した。

6　本報告にあたり、現地での測量及び実測は調査員が行った。遺構図の浄書及び出土遺物の実測並びに浄書は、埋蔵文化財センター及び埋蔵文化財センター調査第二係（名和調査事務所）で行った。遺物写真撮影は埋蔵文化財センターで行った。

7　本報告書に使用した遺構・遺物写真は、調査員が撮影した。

8　本報告書の執筆は、調査員がそれぞれ分担して行い、執筆者名を文末に記載した。編集は野口がおこなった。

9　出土遺物、図面、写真等は、鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。

10　現地調査及び報告書作成に当たって、下記の方々に御協力いただいた。

　茶畑集落　大山町教育委員会（敬称略）

凡　　例

1　遺物ネーミング時に用いた当遺跡の略号は、「CRT」である。

2　本報告書における遺構略号は、次のように表した。

　Ｐ：柱穴・ピット

3　本報告書における実測図は、下記の縮尺で掲載した。

　1　遺構図 － 竪穴建物：1/80、掘立柱建物：1/80、柵： 1/80、土坑：1/40、溝：1/40・1/100・1/200、波板状凹凸遺構：1/40・1/80、耕作痕：1/200、Ｐ（柱穴・ピット）：1/20・　1/40、遺物出土状況：1/20・1/40

　2　遺物実測図 － 土器・土製品：1/2・1/4、石製品：2/3・1/4・1/8、鉄器：1/3、銭貨：1/2

4　遺構図における表示は、特に説明がない限り以下のとおりとした。

　：貼床、柱抜取り痕跡　：地山　：焼土面、柱痕跡　：炭化物範囲

　本文中における遺物記号は次のように表した。

　Ｓ：石製品、Ｆ：鉄製品、Ｃ：銭貨

　土器実測図のうち、縄文土器、弥生土器、土師器、中世陶磁器、近世陶磁器は断面白抜き、須恵器は断面黒塗り、古代施釉陶器は断面網掛けで表した。

　遺物実測図中における記号は、以下のとおりとした。

　→：ケズリの方向（砂粒の動き）　：擦面・砥面　：赤色塗彩、敲打痕

　：黒色処理・漆・黒色付着物・被熱範囲・炭化物　：擦面・砥面

5　出土遺物観察表の法量記載における数値は、表記の部位の最大値を表し、※は推定復元値、△は残存値を示す。

6　文章中で触れた土器型式名及び年代観は、下記の文献を参考にした。

【参考文献】

小林達雄 1989『縄文土器大観１～４』小学館

清水真一 1992「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』正岡睦夫・松本岩雄編　木耳社 P.355 ～ 412

牧本哲雄 1999「古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡Ⅷ　園第 6 遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書 61　P.151 ～ 160

田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店　P.34 ～ 72

巽淳一郎 1983「古代窯業生産の展開―西日本を中心にしてー」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所　Ｐ .659 ～ 685

山下峰司 1995「Ⅲ土器・陶磁器　４．灰釉陶器・山茶碗」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　真陽社　Ｐ .279 ～ 286

八峠　興 1998「山陰における中世土器の変遷について」『中近世土器の基礎研究ＸⅢ』

八峠　興 2000「山陰における平安時代の土器・陶磁器について」『中近世土器の基礎研究ＸＶ』

上田秀夫 1982「14 ～ 16 世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究 No. ２』

目　　次

序
序文
例言
凡例
第１章　調査の経緯
　第１節　調査に至る経緯 ……（牧本）1
　第２節　調査の経過 ……（牧本）2
　第３節　調査体制 ……（牧本）4
第２章　位置と環境
　第１節　地理的環境 ……（牧本）5
　第２節　歴史的環境 ……（牧本）6
第３章　４区の調査
　第１節　遺跡の立地と層序 ……（野口）9
　第２節　第１遺構面の調査 ……（野口･森本）12
　第３節　第２遺構面の調査 ……（野口･森本）18
　第４節　第３遺構面の調査 ……（野口･森本）24
　第５節　第４遺構面の調査 ……（野口･森本）37
　第６節　第５遺構面の調査 ……（野口･森本）51
　第７節　第６遺構面の調査 ……（野口･森本）68
　第８節　第７遺構面の調査 ……（野口･森本）96
第４章　５区の調査
　第１節　調査の概要 ……（野口）107
　第２節　Ⅰ層の調査 ……（野口）108
　第３節　Ⅱ層の調査 ……（野口）108
　第４節　Ⅲ層の調査 ……（野口）108
　第５節　Ⅳ層の調査 ……（野口・小川）110
　第６節　Ⅴ層の調査 ……（小川）111
第５章　自然科学分析の成果
　第１節　放射性炭素年代測定 ……（株式会社　パレオラボ）112
　第２節　茶畑六反田遺跡４区竪穴住居跡出土炭化材の樹種同定 ……（株式会社　パレオラボ）116
第６章　まとめ ……（野口・森本）118
遺物観察表
写真図版
報告書抄録

挿 図 目 次

第１図　茶畑六反田遺跡位置図 …… 1
第２図　大山町位置図 …… 5
第３図　大山町主要遺跡位置図 …… 7
第４図　４区概略図 …… 9
第５図　４区土層断面図①・② …… 10・11
第６図　４区第１遺構面遺構配置図 …… 13
第７図　土坑１ …… 14
第８図　土坑１出土遺物 …… 14
第９図　溝１出土遺物 …… 14
第10図　溝１ …… 14
第11図　溝２ …… 15
第12図　溝３ …… 15
第13図　遺構外出土遺物 …… 16
第14図　遺構外出土遺物 …… 17
第15図　４区第２遺構面遺構配置図 …… 18
第16図　土坑２ …… 19
第17図　土坑３ …… 20
第18図　溝４ …… 20
第19図　溝４出土遺物 …… 20
第20図　溝５ …… 21
第21図　溝５出土遺物 …… 21
第22図　溝５出土遺物 …… 22
第23図　溝６ …… 22
第24図　遺構外出土遺物 …… 23
第25図　灰褐色土出土遺物 …… 23
第26図　４区第３遺構面遺構配置図 …… 24
第27図　土坑４出土遺物 …… 25
第28図　土坑４ …… 25
第29図　土坑５ …… 25
第30図　溝８出土遺物 …… 25
第31図　溝７出土遺物 …… 25
第32図　溝７・８ …… 26
第33図　溝９ …… 27
第34図　溝10 …… 27
第35図　溝11 …… 28
第36図　溝11出土遺物 …… 28
第37図　溝12・13断面図 …… 29
第38図　溝12出土遺物 …… 29
第39図　溝13出土遺物 …… 29
第40図　溝12・13 …… 29
第41図　近世耕作痕土層断面図 …… 30
第42図　近世耕作痕出土遺物 …… 30
第43図　近世耕作痕出土遺物 …… 30
第44図　近世耕作痕 …… 31・32
第45図　遺構外出土遺物 …… 35
第46図　遺構外出土遺物 …… 36
第47図　４区第４遺構面遺構配置図 …… 37
第48図　掘立柱建物１・柵１ …… 38
第49図　掘立柱建物２ …… 39
第50図　掘立柱建物２Ｐ２柱痕跡出土遺物　39
第51図　掘立柱建物２出土遺物 …… 39
第52図　溝14～18・21・22・Ｐ12 …… 40
第53図　溝15出土遺物 …… 40
第54図　溝17出土遺物 …… 40
第55図　溝21出土遺物 …… 40
第56図　溝19 …… 41
第57図　溝20 …… 42
第58図　溝20出土遺物 …… 42
第59図　溝23 …… 42
第60図　中世耕作痕 …… 43・44
第61図　中世耕作痕土層断面図 …… 47
第62図　中世耕作痕出土遺物 …… 47
第63図　Ｐ３出土遺物 …… 47
第64図　遺構外出土遺物 …… 48
第65図　遺構外出土遺物 …… 48
第66図　遺構外出土遺物 …… 49
第67図　遺構外出土遺物 …… 50
第68図　遺構外出土遺物 …… 50
第69図　４区第５遺構面遺構配置図 …… 51
第70図　掘立柱建物３ …… 52
第71図　掘立柱建物３出土遺物 …… 53
第72図　掘立柱建物３出土遺物 …… 53
第73図　掘立柱建物４ …… 54
第74図　掘立柱建物４出土遺物 …… 55
第75図　土坑６出土遺物 …… 55
第76図　土坑６ …… 55
第77図　Ｐ20 …… 56
第78図　Ｐ24 …… 56
第79図　整地層上面検出ピット出土遺物 … 56
第80図　整地層出土遺物 …… 56
第81図　掘立柱建物５・
　Ｐ11遺物出土状況図 …… 57
第82図　掘立柱建物５Ｐ10出土遺物 …… 58
第83図　掘立柱建物５Ｐ11出土遺物 …… 58

第84図　柵２出土遺物 …… 58
第85図　柵２ …… 58
第86図　柵３ …… 59
第87図　土坑７ …… 59
第88図　柵３出土遺物 …… 59
第89図　土坑７出土遺物 …… 59
第90図　溝24 …… 60
第91図　溝24出土遺物 …… 60
第92図　溝25出土遺物 …… 60
第93図　溝27出土遺物 …… 60
第94図　溝25 …… 60
第95図　溝26 …… 60
第96図　溝27 …… 60
第97図　溝28出土遺物 …… 61
第98図　溝33出土遺物 …… 61
第99図　溝28・33 …… 61
第100図　溝29 …… 62
第101図　溝30 …… 62
第102図　溝32 …… 62
第103図　溝31 …… 62
第104図　溝34 …… 63
第105図　溝34出土遺物 …… 63
第106図　波板状凹凸遺構 …… 64
第107図　波板状凹凸遺構出土遺物 …… 64
第108図　波板状凹凸遺構土層断面図 …… 64
第109図　古代耕作痕 …… 65
第110図　古代耕作痕出土遺物 …… 66
第111図　Ｐ59 …… 66
第112図　Ｐ62 …… 66
第113図　遺構外出土遺物 …… 67
第114図　遺構外出土遺物 …… 67
第115図　４区第６遺構面遺構配置図 …… 68
第116図　Ⅵ層上面土器出土状況図 …… 69
第117図　竪穴住居１ …… 70
第118図　竪穴住居１出土遺物 …… 70
第119図　竪穴住居１遺物出土状況図 …… 71
第120図　竪穴住居２ …… 72
第121図　竪穴住居２遺物出土状況図 …… 73
第122図　竪穴住居２出土遺物 …… 73
第123図　掘立柱建物６ …… 74
第124図　土坑８出土遺物 …… 74
第125図　土坑８ …… 74
第126図　土坑９ …… 74
第127図　土坑10 …… 74
第128図　土坑11 …… 75
第129図　土坑11出土遺物 …… 76
第130図　土坑12 …… 77
第131図　土坑12出土遺物 …… 78
第132図　土坑12出土遺物 …… 79
第133図　土坑13 …… 80
第134図　土坑13出土遺物 …… 80
第135図　土坑13出土遺物 …… 81
第136図　土坑14 …… 82
第137図　土坑14出土遺物 …… 83
第138図　土坑15 …… 84
第139図　土坑16・遺物出土状況図 …… 84
第140図　土坑16出土遺物 …… 84
第141図　土坑17 …… 85
第142図　土坑17出土遺物 …… 85
第143図　土坑17出土遺物 …… 85
第144図　土坑18 …… 86
第145図　溝35 …… 86
第146図　溝36・37 …… 87
第147図　溝38 …… 88
第148図　溝39・Ｐ88 …… 88
第149図　溝40出土遺物 …… 88
第150図　溝40 …… 88
第151図　Ⅵ層上面検出ピット出土遺物 …… 89
第152図　Ｐ97 …… 89
第153図　Ｐ114 …… 89
第154図　Ｐ115 …… 89
第155図　Ｐ114出土遺物 …… 89
第156図　Ｐ162出土遺物 …… 89
第157図　遺構外出土遺物 …… 90
第158図　遺構外出土遺物 …… 91
第159図　遺構外出土遺物 …… 92
第160図　遺構外出土遺物 …… 93
第161図　遺構外出土遺物 …… 94
第162図　遺構外出土遺物 …… 94
第163図　４区第７遺構面遺構配置図 …… 96
第164図　竪穴住居３ …… 97
第165図　竪穴住居３遺物出土状況図 …… 98
第166図　竪穴住居３出土遺物 …… 98
第167図　竪穴住居３出土遺物 …… 98
第168図　竪穴住居４ …… 99
第169図　土坑19 …… 100
第170図　土坑20 …… 100
第171図　土坑21 …… 100

第172図　土坑19出土遺物 …… 100
第173図　土坑22 …… 101
第174図　土坑23 …… 101
第175図　土坑24 …… 101
第176図　溝41 …… 102
第177図　溝42 …… 102
第178図　柵４ …… 103
第179図　柵５ …… 103
第180図　表土・調査区内出土遺物 …… 103
第181図　５区土層断面図 …… 107
第182図　Ⅰ層上面平面図 …… 108
第183図　Ⅱ層上面平面図 …… 108
第184図　Ⅲ層上面平面図 …… 109
第185図　Ⅳ層上面平面図 …… 109
第186図　溝64 …… 109
第187図　溝65 …… 110
第188図　溝66～68 …… 110
第189図　Ⅴ層上面平面図 …… 111
第190図　５区出土遺物 …… 111
第191図　暦年較正の結果 …… 115
第192図　４区Ⅳ層除去後検出ピット平面図 120

挿表目次

表１　第１遺構面ピット一覧表 …… 13
表２　第４遺構面ピット一覧表 …… 37
表３　掘立柱建物１柱間距離…… 38
表４　掘立柱建物２柱間距離…… 39
表５　掘立柱建物３柱間距離…… 53
表６　掘立柱建物４柱間距離…… 54
表７　掘立柱建物５柱間距離…… 58
表８　整地層上面・
　第５遺構面ピット一覧表 …… 67
表９　掘立柱建物６柱間距離…… 74
表10　第６遺構面ピット一覧表 …… 95
表11　第７遺構面ピット一覧表 … 104～106
表12　５区ピット一覧表 …… 111
表13　測定試料及び処理 …… 112
表14　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果
…… 113
表15　茶畑六反田遺跡４区樹種同定結果一覧
…… 116
表16　土器・土製品観察表 …… 124～134
表17　石器観察表 …… 135
表18　金属器観察表 …… 136～138

図版目次

巻頭図版１　１．土坑12遺物出土状況（東から）
　２．竪穴住居２完掘（北から）
巻頭図版２　１．掘立柱建物５（東から）
　２．中世耕作痕（東から）
図版１　空撮（北から）
図版２　１．土坑１完掘（南から）
　２．溝１完掘（東から）
　３．溝１完掘（東から）
　４．溝２完掘（南東から）
　５．溝３完掘（南東から）
　６．土坑２完掘（南東から）
図版３　１．土坑３完掘（北東から）
　２．溝４完掘（南東から）
　３．土坑４完掘（南西から）
　４．土坑５礫出土状況（東から）
　５．溝７完掘（北西から）
　６．溝７土層断面（東から）
図版４　１．溝９完掘（東から）
　２．溝11完掘（東から）
　３．近世耕作痕完掘（北西から）
　４．近世耕作痕検出（北西から）
　５．近世耕作痕検出（南東から）
　６．近世耕作痕完掘（南東から）
図版５　１．掘立柱建物１・柵１完掘（北西から）
　２．掘立柱建物２完掘（東から）
　３．溝14・15完掘（東から）
図版６　１．溝19完掘（北西から）
　２．溝20遺物出土状況（東から）
　３．溝21完掘（東から）
　４．溝23完掘（南西から）
　５．掘立柱建物３完掘（西から）
図版７　１．土坑６完掘（北から）
　２．掘立柱建物５Ｐ11遺物出土状況（東から）
　３．堀立柱建物５完掘（東から）

図版８　１.土坑７完掘(北から)
２.溝24完掘(南西から)
３.溝28･33完掘(南から)
４.溝29完掘(南から)
５.溝30完掘(東から)
６.溝31土層断面(北東から)
図版９　１.波板状凹凸遺構完掘(南から)
２.波板状凹凸遺構検出(南から)
３.古代耕作痕完掘(北から)
４.古代耕作痕検出(北から)
図版10　１.竪穴住居１完掘(東から)
２.竪穴住居１遺物出土状況(東から)
３.竪穴住居１土層断面(南西から)
図版11　１.竪穴住居２焼土検出状況(北西から)
２.竪穴住居２炭化材出土状況(北から)
３.掘立柱建物６完掘(北西から)
図版12　１.土坑８完掘(南西から)
２.土坑10完掘(南から)
３.土坑11遺物出土状況(北から)
４.土坑11土層断面(東から)
図版13　１.土坑12遺物出土状況(東から)
２.土坑12遺物出土状況(北東から)
３.土坑12完掘(北東から)
図版14　１.土坑13遺物出土状況(東から)
２.土坑14遺物出土状況(北東から)
図版15　１.土坑15完掘(南東から)
２.土坑16完掘(北西から)
３.土坑17遺物出土状況(北から)
４.土坑18完掘(南西から)
５.溝35完掘(東から)
６.溝36･37完掘(北西から)
図版16　１.溝38完掘(東から)
２.溝40完掘(北から)
３.竪穴住居４完掘(東から)
図版17　１.竪穴住居３完掘(南から)
２.竪穴住居３遺物出土状況(北から)
３.竪穴住居３貼床除去後(南から)
図版18　１.土坑19完掘(北から)
２.土坑20完掘(南東から)
３.土坑22完掘(南東から)
４.土坑23完掘(南西から)
５.土坑24完掘(東から)
６.溝41･42完掘(南から)
図版19　Ⅰ層出土遺物他
図版20　１.第１・２遺構面検出遺構出土遺物
２.Ⅱ層･灰褐色土出土遺物他
図版21　第３遺構面検出遺構出土遺物他
図版22　１.Ⅰ層出土遺物
２.溝11出土遺物
３.Ⅲ層出土遺物
４.Ⅲ層出土遺物
５.Ⅳ層出土遺物
６.Ⅳ層出土遺物
７.Ⅳ層出土遺物
８.Ⅳ層出土遺物
９.溝20出土遺物
図版23　１.Ⅲ層出土遺物他
２.古代耕作痕出土遺物他
図版24　Ⅳ層出土遺物他
図版25　中世耕作痕出土遺物他
図版26　１.第４遺構面検出遺構出土遺物
２.Ⅳ･Ⅴ層出土遺物
図版27　Ⅳ～Ⅵ層出土遺物
図版28　１.Ⅳ･Ⅴ層出土遺物
２.Ⅳ･Ⅴ層出土遺物
３.Ⅳ･Ⅴ層出土遺物
４.Ⅳ･Ⅴ層出土遺物
５.Ⅳ･Ⅴ層出土遺物
６.Ⅳ･Ⅴ層出土遺物
図版29　１.Ⅳ･Ⅴ層出土遺物
２.Ⅳ･Ⅴ層出土遺物
３.Ⅳ･Ⅴ層出土遺物
４.整地層出土遺物
５.整地層上面検出遺構･整地層出土遺物
図版30　掘立柱建物３・４出土遺物
図版31　１.掘立柱建物３出土遺物
２.古代耕作痕出土遺物
３.Ⅴ層出土遺物
４.Ⅴ層出土遺物
５.第５遺構面検出遺構出土遺物他
図版32　第５遺構面検出溝出土遺物他
図版33　１.Ⅴ･Ⅵ層出土遺物他
２.竪穴住居１出土遺物
３.竪穴住居１出土遺物
４.竪穴住居１出土遺物
５.竪穴住居３出土遺物
図版34　１.竪穴住居２・３、土坑17･19出土遺物
２.土坑11出土遺物

３.土坑11出土遺物
４.土坑11出土遺物
図版35　第６遺構面検出遺構出土遺物他
図版36　１.土坑12出土遺物
２.土坑12出土遺物
３.土坑12出土遺物
４.土坑12出土遺物
５.土坑12出土遺物
６.土坑12出土遺物
７.土坑12出土遺物
８.土坑12出土遺物
図版37　１.土坑12出土遺物
２.土坑12出土遺物
３.土坑12出土遺物
４.土坑13出土遺物
５.土坑13出土遺物
６.土坑13出土遺物
７.土坑13出土遺物
８.土坑13出土遺物
図版38　土坑13出土遺物
図版39　１.土坑14出土遺物
２.土坑14出土遺物
３.土坑14出土遺物
４.土坑16出土遺物
５.土坑17出土遺物
６.Ｐ114出土遺物
７.Ⅵ層出土遺物
８.Ⅵ層出土遺物
図版40　１.Ⅵ層出土遺物
２.Ⅵ層出土遺物
３.Ⅵ層出土遺物
４.Ⅵ層出土遺物
５.Ⅵ層出土遺物
６.Ⅵ層上面出土遺物
７.Ⅵ層出土遺物
８.Ⅵ層出土遺物
図版41　１.Ⅵ層出土遺物
２.Ⅵ層出土遺物
３.Ⅵ層出土遺物
４.Ⅵ層出土遺物
５.Ⅵ層出土遺物
６.Ⅵ層出土遺物
７.Ⅵ層上面出土遺物
８.Ⅵ層上面出土遺物
図版42　１.Ⅵ層出土遺物
２.Ⅵ層出土遺物
３.Ⅵ層出土遺物
４.Ⅵ層出土遺物
５.Ⅵ層出土遺物
６.Ⅵ層出土遺物
７.Ⅵ層上面出土遺物
図版43　Ⅵ層上面・Ⅵ層出土遺物他
図版44　１.調査区内出土石器
２.調査区内出土石器
図版45　１.調査区内出土石器
２.調査区内出土石器
図版46　１.調査区内遺構出土鉄関連遺物
２.整地層出土鉄関連遺物
３.調査区内出土土製品
図版47　１.表土出土遺物他
２.調査区内出土ヘラ書き土器
図版48　１.調査区内出土黒色処理土器
２.調査区内出土古代施釉陶器
図版49　炭化材顕微鏡写真
図版50　炭化材顕微鏡写真

第1章　調査の経緯

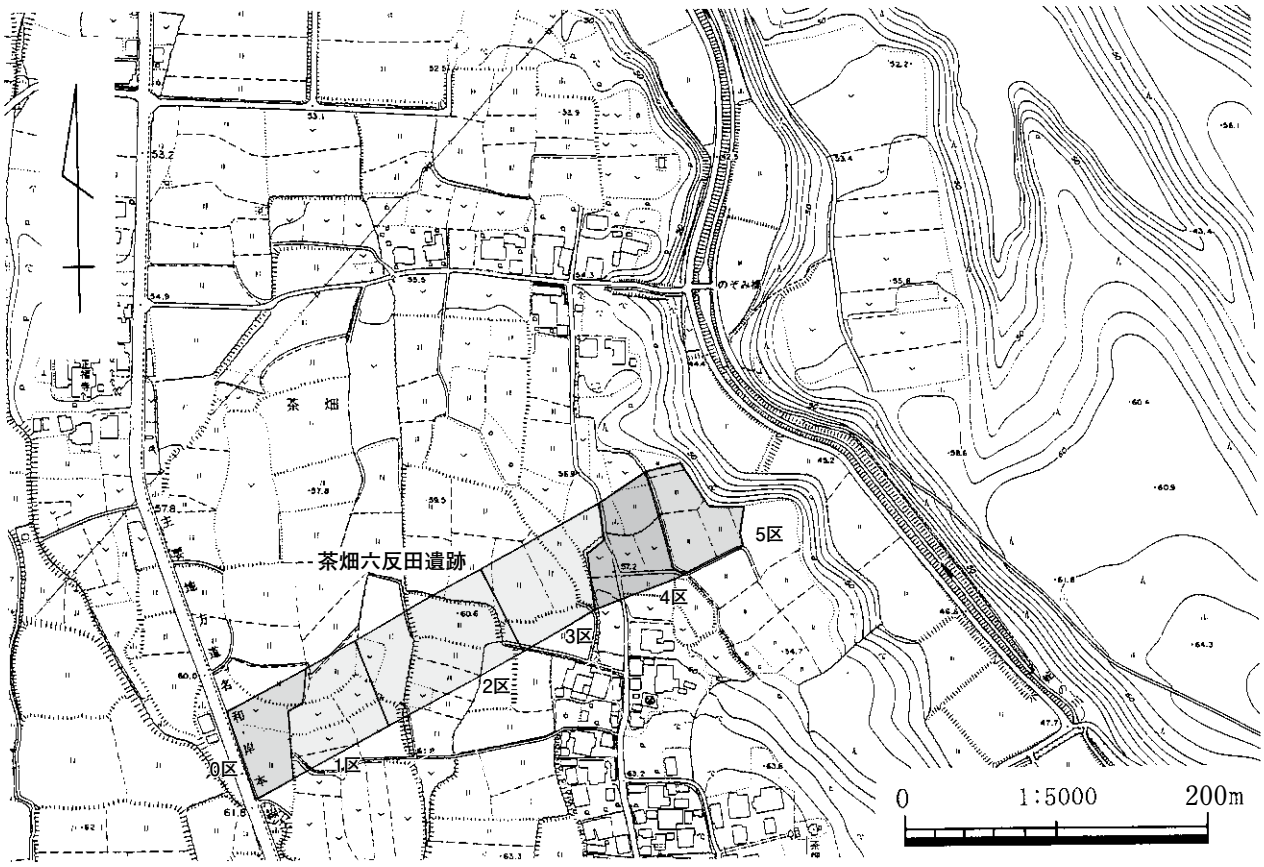
第１節　調査に至る経緯

本発掘調査は、平成17・18年度に一般国道９号名和淀江道路の改築に伴い行った、西伯郡大山町茶畑地内の工事予定地に存在する、周知の埋蔵文化財包蔵地である茶畑六反田遺跡の記録保存を目的としたものである。

山陰地方では、一般国道９号の交通混雑緩和、荒天時の交通障害解消、災害時の緊急輸送の代替道路確保及び将来の国土幹線道路整備として、山陰自動車道の整備事業が進められ、鳥取県西部地域では、米子道路、名和淀江道路が自動車専用道路として計画、施工されている。

このうち大山町（旧大山町・名和町）を通る名和淀江道路の計画地内及び隣接地には、多数の周知の遺跡があり、建設に先立って計画地内の遺跡並びに遺跡の範囲を確認する必要性が生じた。このため、平成２年度から大山町、名和町各教育委員会（いずれも当時）によって、国庫補助事業として逐次試掘・確認調査が行われた。

その結果を受け、文化財保護法に基づく手続きを踏まえ、平成12年度から平成16年度にかけて、（財）鳥取県教育文化財団が調査主体となり、安原溝尻遺跡など17箇所の遺跡の発掘調査を行い、各報告書が刊行された。



第1図　茶畑六反田遺跡位置図

茶畑六反田遺跡は、旧名和町教育委員会が平成10年度に国庫補助事業として試掘調査を行い、遺構及び遺物を確認したものである。その結果を受け、平成14･16年度には、（財）鳥取県教育文化財団が、本線盛土部分・ボックスカルバート及び側道部分（０～３・５区）を調査し、報告書を刊行している。

平成17年４月からは、県組織の改組があり国土交通省関連事業については、鳥取県埋蔵文化財センターが調査主体となり、発掘調査を行うこととなった。

平成17年度は、盛土部分（４区）が対象であったが、用地買収の遅れから買収部分の４区北東部分のみの調査となった。その後､買収が終了したことから３月末まで､残り部分を調査することになった。国土交通省中国地方整備局倉吉河川国道事務所は、文化財保護法第94条に基づく埋蔵文化財発掘の通知を行った上、鳥取県教育委員会教育長の指示により、鳥取県埋蔵文化財センターが発掘調査を担当着手し、文化財保護法第99条に基づく埋蔵文化財発掘調査の報告を行った。

平成18年度は、引き続き４区の本線盛土部分及び側道部分が調査対象であったが、５区南側の側道部分も追加となった。国土交通省中国地方整備局倉吉河川国道事務所は、文化財保護法第94条に基づく埋蔵文化財発掘の通知を行った上、鳥取県教育委員会教育長の指示により、鳥取県埋蔵文化財センターが発掘調査を担当着手し、文化財保護法第99条に基づく埋蔵文化財発掘調査の報告を行った。

【参考文献】

名和町教育委員会2000『名和町内遺跡分布調査報告書』名和町埋蔵文化財発掘調査報告書第26集
名和町教育委員会2004『名和町内遺跡発掘調査報告書』名和町文化財調査報告書第33集
大山町教育委員会1990『大山町内遺跡発掘調査報告書　安原所在遺跡・平第２遺跡』大山町埋蔵文化財調査報告書10
鳥取県教育文化財団2002『茶畑六反田遺跡　押平弘法堂遺跡　富岡播磨洞遺跡　安原溝尻遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書77
鳥取県教育文化財団2004『茶畑六反田遺跡（０・５区)』鳥取県教育文化財団調査報告書94

第２節　調査の経過

（1）調査区の名称と調査方法

平成17年度茶畑六反田遺跡の調査地は、（財）鳥取県教育文化財団の調査に引き続き順に便宜的に名称を付したものである。現況では４区は水田及び畑地である。

調査に先立ち、２回に亘って事前に世界測地系公共座標に載る基準点及び方眼杭の設置を業者委託し、調査区内に10ｍ方眼の基準杭を設定し、グリッドを設けた。その結果、東西軸は北からＣ～Ｊ、南北軸は東から２～６とした。グリッド名は、東西南北軸交点の北東側杭の名称をとって呼称することとし、座標はＣ３杭（X: － 56790ｍ、Y: － 77230ｍ)、Ｉ６杭（X: － 56850ｍ 、Y: － 77260ｍ）などとなった。　標高値は、４級基準点Ｓ２の55.448ｍを使用した。

検出した遺構・遺物の記録には、平板、光波トランシット及び自動レベルを用い、簡易遣り方測量を行った。現地での写真撮影は35㎜判及びブロニー（６×７）判カメラにより地上又は写真用ヤグラ上から行った。また、遺物写真撮影は平成18年度に行い、ブロニー（６×７）判及び４×５判カメラを用いた。いずれも白黒ネガフィルム並びにカラーポジフィルムを使用した。

（2）調査の経過（平成 17 年度）

茶畑六反田遺跡の調査は、買収が終了していた４区北東区から着手し、10 月４・５日に重機による表土剥ぎ作業、10 月 11 日から平成 18 年２月 24 日にかけて人力による検出作業を行った。その後、買収が終了したため、調査区内を南北に走る町道の西側部分を引き続き３月 31 日まで調査を行った。その結果、近世の溝、土坑、中世の耕作痕、平安時代の堀立柱建物、柵列、波板状凹凸遺構、耕作痕、溝、弥生時代中期の竪穴住居、柵列、土坑等を検出した。調査面積は、平面積 600㎡に遺構面が６面あり、延べ 3600㎡となった。

いずれの調査区も、排土は道路用地内に仮置きした後国土交通省によって場外搬出した。

（3）調査の経過（平成 18 年度）

平成18年度は、盛土及び側道部分にあたる４区町道西側部分の残り及び町道東側部分並びに５区南側道部分が調査対象となった。表土剥ぎ作業については、既に平成17年３月９日・10日にかけて行った。４月５日に発掘作業員オリエンテーション及び人権研修を行い、４月６日から11月22日にかけて作業を行った。途中、町道下にも遺構面が存在することが判明し、遺存状態は悪かったが、耕作痕等を検出した。検出作業の結果、中近世の溝、耕作痕、平安時代の掘立柱建物、古墳時代の竪穴住居、弥生時代中期の竪穴住居、土坑、掘立柱建物などを検出した。調査面積は、平面積2471㎡に遺構面が５から７面あり、延べ面積9106㎡となった。

茶畑六反田遺跡　調査日誌抄

平成17年度

10月３日	方眼測量打ち合わせ
10月11日	オリエンテーション
10月12日	検出作業、基準点・方眼測量
10月21日	溝１完掘、第１遺構面調査終了
11月21日	溝３完掘写真撮影、耕作痕検出
12月16日	第２遺構面完掘写真
12月28日	中世遺物包含層掘り下げ終了
１月６日	古代遺構面検出作業
１月18日	第３遺構面完掘写真
１月26日	波板状凹凸遺構検出
２月15日	第５遺構面地形測量終了
２月16日	第６遺構面検出作業。落とし穴検出
２月22日	竪穴住居４完掘
２月24日	４区北東区調査終了
２月27日	町道西側部分調査開始
３月31日	平成17年度調査終了

平成18年度

４月５日	作業員オリエンテーション・人権研修
４月６日	町道東側検出作業開始
４月12日	町道西側調査区第３遺構面耕作痕実測終了
４月14日	町道西Ⅲ層上面耕作痕
４月20日	町道西Ⅵ層上面耕作痕完掘
４月28日	町道西区調査終了
５月19日	町道下トレンチ調査。遺構面の存在確認
５月31日	町道東耕作痕完掘写真
６月12日	町道下調査開始
６月16日	町道東掘立柱建物３完掘
７月13日	町道下耕作痕掘り下げ、町道東調査区土坑15完掘、掘立柱建物４・５検出
８月３日	作業員オリエンテーション・人権研修
８月７日	町道東土坑17遺物出土状況写真
８月24日	町道東土坑16完掘
９月８日	町道下調査終了
９月28日	町道東竪穴住居１・２遺物取り上げ
10月16日	町道東竪穴住居２完掘。５区側道部分耕作痕検出
10月20日	町道東竪穴住居３掘り下げ
10月22日	茶畑地区住民対象の現地説明会　17名参加
11月９日	掘立柱建物７掘り下げ
11月17日	現地調査終了
11月22日	現場機材撤収、搬出
11月～３月	報告書作成作業

第３節　調査体制

下記の体制で発掘調査・報告書作成を行った。

○平成 17 年度

鳥取県埋蔵文化財センター

所　　長　　田中　弘道

次　　長　　戸井　　歩（兼総務係長）

総　務　係

副　主　幹　　福田　高之

発掘事業室

室　　長　　加藤　隆昭（兼調整係長）

調　整　係

文化財主事　　八峠　　興

調査第二係（名和調査事務所）

係　　長　　牧本　哲雄

文化財主事　　恩田　智則、野口　良也

○平成 18 年度

鳥取県埋蔵文化財センター

所　　長　　久保　穰二朗

次　　長　　戸井　　歩（兼総務係長）

総　務　係

副　主　幹　　福田　高之

発掘事業室

室　　長　　加藤　隆昭（兼調整係長）

調　整　係

文化財主事　　濵　　隆造

調査第二係（名和調査事務所）

係　　長　　牧本　哲雄

文化財主事　　森本　倫弘、野口　良也

発掘調査員　　小川　愛美

第２章　位置と環境

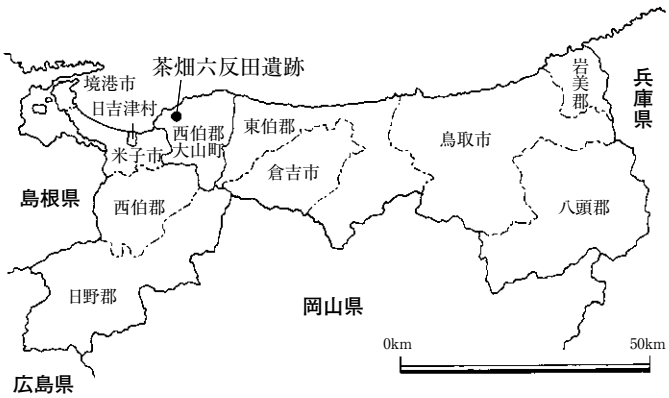
第１節　地理的環境

茶畑六反田遺跡が所在する大山町は、平成 17 年３月 28 日に旧中山町、旧名和町、旧大山町が合併して誕生した町である。この町名は、中国地方最高峰であり鳥取県のシンボル的な存在でもある「大山」が所在することに由来する。当町は鳥取県西部、西伯郡の東部を占める位置にあり、県庁所在地の鳥取市からは西へ約 80㎞、県西部中核都市の米子市からは東へ約 20㎞の位置にある。町域は、南端の大山（1,709 m）を頂点に、船上山（615 m）から金屋付近の日本海に至る線を東辺とし、西辺は大山を頂点に下槙原・孝麗山（751 m）を結び保田付近の日本海に至る、南北に細長く不整逆三角状に広がる形を呈す。東西約 15㎞、南北約 20㎞、総面積は約 189.8㎢を測り、人口は約 18,800 人（平成 18 年末）の農畜産業・観光を主な産業にする町である。

本町の地勢は、大山山系から放射状に流れる小河川により開削並びに侵食され残った、手指状に走る台地上の尾根と急峻な小渓谷が繰り返す火山性台地と、甲川、下市川、真子川、名和川、阿弥陀川流域に発達した平野部からなる。平野部は、肥沃な黒ボク地帯で、特に阿弥陀川流域は県内でも屈指の広さとなる扇状地を形成している。台地は、御来屋砂礫層上に主に大山火山灰土の堆積したもので、海岸線付近まで延びている。町内には、前述の大山山麓に源流を発する河川の他、大小計 12 本の川が日本海に注いでいる。

日本海に面した地域では、御崎港、御来屋港を中心に沿岸漁業が盛んで、ヒラメ・ハマチ・タイ・アジなどの水揚げがあり、特にウニ・板ワカメは特産品になっている。町域北側から中部域は、農業を中心とした第１次産業が盛んである。低地では水田、台地上ではブロッコリー、スイカ、果樹などの栽培が盛んである。旧名和地域は台地上にあるという特性から、多数の溜め池が形成され、農業用水として利用されている。町域南側は、高原を利用した畜産が盛んであるとともに、国立公園にも指定されている他、大山寺・大神山神社などの著名な文化財もある。また、冬季には多くのスキー客で賑わっており、四季を通じて自然豊かな景勝地を求めて多くの観光客が訪れる県内でも屈指の観光地になっている。

町内の遺跡は、主に丘陵及び台地上に営まれている。茶畑六反田遺跡は、茶畑集落に隣接する標高 55 m前後の台地上に立地している。東側には蛇の川が北流している。（牧本）



第２図　大山町位置図

第２節　歴史的環境

旧石器時代　鳥取県内では旧石器時代の遺構を伴う遺跡は発見されていないが、近年大山山麓では発掘調査によって、後期旧石器遺物が確認されるようになった。門前第２遺跡（西畝地区）では、AT火山灰層以下（25,000年以前）で黒曜石製ナイフ形石器･黒曜石剥片を含む石器群が確認されている。名和小谷遺跡では、出土層位は不明であるが黒曜石製国府型ナイフ形石器が出土している。

縄文時代　当該地域は、広大な大山山麓にあり、県内においてもこの時期の遺跡が多数存在する地域となっている。退休寺、羽田井、上大山、陣構、坊領、荘田などでは、草創期と考えられる有茎尖頭器が見つかっているが､いずれも層位的には確認されていない。早期では､門前第２遺跡（菖蒲田地区）で押型文土器とともに10基の配石群が検出されている他、遺構は伴わないが赤坂後ロ山遺跡、退休寺飛渡り遺跡、古御堂金蔵ヶ平遺跡、上大山第１遺跡、角塚遺跡、高田第４遺跡、蛇居谷遺跡、大道原遺跡､塚田遺跡､蔵岡第１遺跡などで押型文､茶畑山道遺跡で撚糸文土器が出土している。前期では、石器工房と推定される下市築地ノ峯東通第２遺跡、名和乙ヶ谷遺跡で玦状耳飾が出土している。中期では、貯蔵穴が確認された細工塚遺跡などがある。後期では、南川遺跡で石組炉を備えた住居跡、晩期では、大塚第３遺跡で住居跡が見つかっている。その他、落し穴が八重第３遺跡、小松谷遺跡、下甲抜堤、赤坂後ロ山遺跡など多数の遺跡で検出されており、狩猟場として丘陵・微高地縁辺部が利用された様子が窺われる。

弥生時代　この時期本格的に稲作を中心とした社会が形成される。前期には米子市目久美遺跡で水田が確認されているが、この地域では、当該期の稲作関連遺構は発見されていない。前期の遺構は少なく、大塚岩田遺跡で環濠の可能性のある溝が検出されている他、樋口第１遺跡、三谷遺跡、上野第１・２遺跡、塚田遺跡、大道原遺跡などで土器が出土している。

中期になると遺跡数が増え、集落遺跡として細工塚遺跡、退休寺遺跡、退休寺飛渡り遺跡、殿河内落合遺跡、押平弘法堂遺跡、門前上屋敷遺跡等が挙げられる。また、茶畑山道遺跡、茶畑第１遺跡では独立棟持柱を備える大型掘立柱建物、分銅形土製品、搬入土器を含む集落が検出され、当該地域の拠点的な集落と考えられている。

後期には、退休寺遺跡、八重第３遺跡、大塚塚根遺跡、押平尾無遺跡、茶畑第２遺跡、茶畑六反田遺跡、茶畑山道遺跡、茶畑第１遺跡、東高田遺跡など丘陵上に集落遺跡が多数造営されるようになる。その中で国史跡妻木晩田遺跡は、弥生時代中期以降約170haからなる複数の丘陵上に、夥しい数の住居・倉庫、首長墓である四隅突出型墳丘墓、環濠などが作られるなど、集落研究にとって重要な遺跡である。当該期には、松尾頭地区において、首長居宅と考えられる竪穴住居と近接して祭殿と考えられる二面庇の高床建物も確認されている。終末期には、首長墓である徳楽墳丘墓、松尾頭１・２号墓が築造されている。

古墳時代　古墳時代に入ると大型前方後円墳が各地に出現する。当該地域では、各時期において前方後円墳は確認されていない。前期では、小規模な方墳が茶畑第１遺跡で確認されているにすぎない。

当該地域の古墳は､ほとんどが中期から後期にかけてのものであるが､中期のもののうち､高塚古墳、ハンボ塚古墳は、葺石・埴輪などの外表施設を持つ大型円墳で、首長墳の内容を持つ。後期になると御崎古墳群、束積古墳群、三谷古墳群、高田古墳群、門前古墳群、豊成古墳群、坪田古墳群、富長山村古墳群、蔵岡古墳群、宮内古墳群、平古墳群などが形成されている。このうち、御崎古墳群では塊

第３図　大山町主要遺跡位置図

番号	遺跡名								
1	名和中畝遺跡	17	富岡播磨洞遺跡	33	門前古墳群	49	蔵岡第１遺跡	65	大道原遺跡
2	名和小谷遺跡	18	安原溝尻遺跡	34	富長山村古墳群	50	中高遺跡	66	妻木晩田遺跡
3	名和衣装谷遺跡	19	福岡遺跡	35	茶畑古墳群	51	平古墳群	67	今津岸ノ上遺跡
4	名和乙ヶ谷遺跡	20	井手胯遺跡	36	高田古墳群	52	宮内古墳群	68	晩田遺跡
5	名和飛田遺跡	21	龍光寺堀遺跡	37	茶畑第２遺跡	53	徳楽方墳	69	下楚利遺跡・宮廻遺跡
6	門前上屋敷遺跡	22	栃原窯跡	38	東高田遺跡	54	源平山古墳群	70	瓶山古墳群
7	門前鎮守山城跡	23	角塚遺跡	39	原３号墳	55	長田古墳群	71	向山古墳群
8	門前第２遺跡	24	上大山第１遺跡	40	茶畑山道遺跡	56	客尾山古墳群	72	上淀廃寺
9	古御堂新林遺跡	25	長者原遺跡	41	荒田遺跡	57	清原遺跡	73	彼岸田遺跡
10	古御堂金蔵ヶ平遺跡	26	ハンボ塚古墳	42	富長城跡	58	上野遺跡群	74	小枝山古墳群
11	古御堂笹尾山遺跡	27	門前礎石群	43	文殊領屋敷遺跡	59	国信遺跡	75	城山古墳群
12	押平尾無遺跡	28	南川遺跡	44	古御堂遺跡	60	唐王遺跡	76	四十九谷横穴墓群
13	茶畑第１遺跡	29	高田原廃寺	45	大塚塚根遺跡	61	新田原遺跡	77	稲吉角田遺跡
14	茶畑六反田遺跡	30	高田第４遺跡	46	大塚岩田遺跡	62	塚田遺跡	78	中西尾古墳群
15	押平弘法堂遺跡	31	高田第10遺跡	47	大塚第３遺跡	63	荘田古墳群	79	鮒ヶ口遺跡
16	妻木法大神遺跡	32	坪田古墳群	48	大塚屋敷遺跡	64	原畑遺跡	80	河原田遺跡

石を用いた箱式石棺を有し、鳥取県中部地域に特徴的に見られる壺形埴輪が出土しており、他地域との関連が窺われる。また、岩屋堂古墳、長野２号墳、岩屋平古墳、三谷 16 号墳、束積 11 号墳、高田 26 号墳、茶畑 12 号墳、豊成 28 号墳、蔵岡古墳群、宮内１・２号墳、平 24 号墳など内部主体に切石積み横穴式石室を持つものが、米子市淀江町域まで広がっており、同一文化圏を形成している。また、高田 25 号墳は、横穴式石室内に家形石棺を内包する。当該域は、豊成横穴墓群など横穴墓群も形成されており、古墳築造集団より下位に位置付けられる葬制も混在する地域である。

この時代の集落は、依然丘陵上に営まれる傾向が強く、前期の茶畑第１遺跡、中期から後期の押平尾無遺跡、古御堂笹尾山遺跡、中畝遺跡、仁王堂遺跡がある。低地部では大塚塚根遺跡などがある。

奈良～平安時代　７世紀後半以降、山陰地方で仏教文化受容の痕跡が認められる。現在県内では 22 ヵ所の古代寺院が見つかっており、当該地域では高田原廃寺がある。ここでは、乱石積基壇や溝状遺構が検出され、上淀廃寺式の単弁十二葉蓮華文軒丸瓦が出土している。その他、名和神社付近が、『延喜式』に記載された古代山陰道の和奈駅（奈和の誤記か）として推定されているが、明確にはなっていない。また、阿弥陀川河口付近の大塚屋敷遺跡では、倉庫群と考えられる掘立柱建物群が見つかっている。栃原窯跡は須恵器窯と考えられているが、上寺谷遺跡の製鉄炉やその周辺での鉄滓表採事例などから、炭窯の可能性も指摘されている。細工塚遺跡では、大型の掘立柱建物群が検出され、平安時代には、官衙関連の遺構や有力層の建物が検出されている。長者原遺跡では礎石建物、区画溝、大量の炭化米がみつかっており、正倉と推定されている。名和衣装谷遺跡では２棟の大型掘立柱建物や鉄滓、緑釉・灰釉陶器が見つかっており、郡司層の居宅又は郡衙下部の鉄生産に関わる遺構と考えられている。茶畑六反田遺跡では、条里区画の一部と見られる溝が検出され、緑釉陶器や墨書土器が出土している。名和乙ヶ谷遺跡では、道路状遺構が検出されている。また、大山寺は、密教隆盛とともに信仰の中心的な役割を果たし、地方豪族に並ぶ僧兵勢力を有すようになる。平安時代末期には末法思想が広まる中、和鏡８枚などを含む壹宮経塚が作られている。

中世　律令体制の崩壊とともに封建制社会が形成される。門前上屋敷遺跡では、屋敷地を区画すると考えられる大溝、交易品としての青白磁が検出されている他大規模な造成が認められ、居館又は寺院跡の指摘もある。門前礎石群は、青白磁・染付などの出土から中世以降の礎石建物と考えられる。その他、旧名和町域には、名和長年をはじめとする名和氏一族に関わるとされる旧跡が各所に見られる。その他、箆津豊後守敦忠の居城とされる岩井垣城、天守山城、香原山城、松尾城などの他、富長城、長野城、末吉城、福尾城など日本海沿岸部にも多く砦跡が築かれている。

近世　寛永９（1632）年に池田光仲が鳥取藩主となり、因伯は幕末まで池田氏の治世となる。この時代、御来屋は伯耆街道の宿駅、藩の運上米の積出港として重要な位置を占めた。　（牧本）

【参考文献】

名和町誌編纂委員会編　1978『名和町誌』
鳥取県埋蔵文化財センター　1986『鳥取県の古墳』
鳥取県埋蔵文化財センター　1988『旧石器・縄文時代の鳥取県』
鳥取県埋蔵文化財センター　1989『歴史時代の鳥取県』
内藤正中・真田廣幸・日置粂左ヱ門著　1997『県史 31　鳥取県の歴史』（株）山川出版社
鳥取県教育委員会　2004『鳥取県中世城館分布調査報告書』第２集（伯耆編）
発掘調査報告書類については割愛させていただいた。

第３章　４区の調査

第１節　遺跡の立地と層序

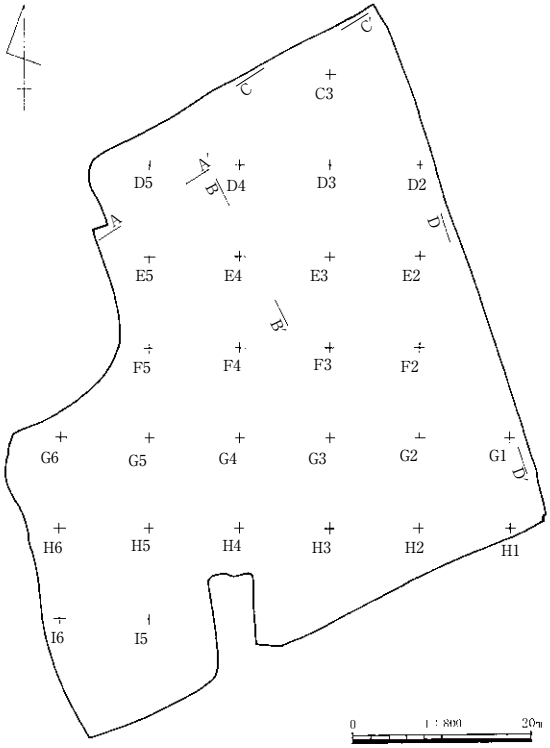
茶畑六反田遺跡は西に阿弥陀川、東に蛇の川に挟まれた大山北西麓の台地上に位置する。台地は北西方向に緩く傾斜した地形になっており、調査地の現況は、地形を利用した棚田や段々畑が営まれている。

茶畑六反田遺跡４区では、表土下に７面の遺構検出面が確認された。これらの遺構面は、いずれも調査区西側から東側にむかって緩やかに傾斜した地形である。ただし、調査区西側には町道が敷設されており、その下は上下水道等の埋設に伴う撹乱を受けている状況であった。また、ほぼこの町道を境に現在の耕作による削平の高さが変わっていることから、近世遺構面など上位に位置する遺構面においては部分的に段差がみられる。

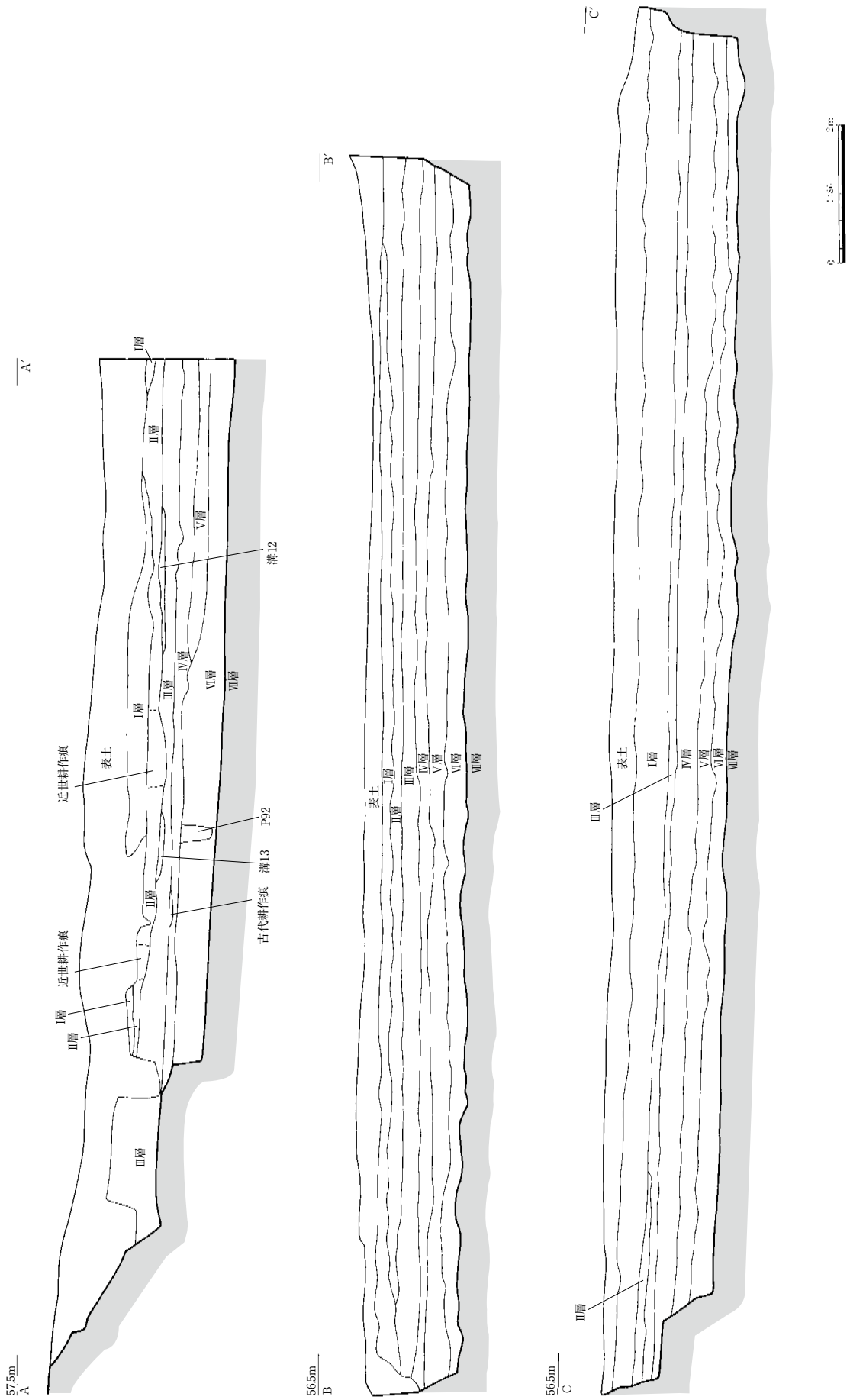
調査区内で確認された主要土層は以下のとおりであるが、平成12・13年度調査、15年度調査、そして本調査と、調査年次によって確認される土層、及び遺構確認面の数が異なることから、ここでは既調査の土層堆積状況との対応関係も確認したい。ただし、本調査区の西側に位置する０～３区までの土層堆積状況との対応関係は、隣接する３区では表土下は、撹乱を受け地山面が検出される状況であるほか、３区と４区を境に土層堆積の状況が異なることから、関係性が認められる部分のみ触れることとし、ここでは４区東側に隣接する５区との対応関係の確認を中心に述べる。

Ⅰ層：灰赤褐色土。調査区西側、及び町道付近を除き、ほぼ調査区全体に堆積する。下位に位置するⅡ層・Ⅲ層を撹拌したと思われる土層で、キメは粗い。また、Ⅲ層上面において灰赤褐色土を埋土に持つ耕作痕が確認されたことから、耕作土であったと考えられる。層中には酸化鉄、５㎜ほどの小礫を多く含まれる。包含遺物は、上層に近世、下層に古代のものが集中するが、下層にはわずかに近世の遺物も含まれる。なお、本地層は５区調査報告におけるⅡ層と対応するものである。

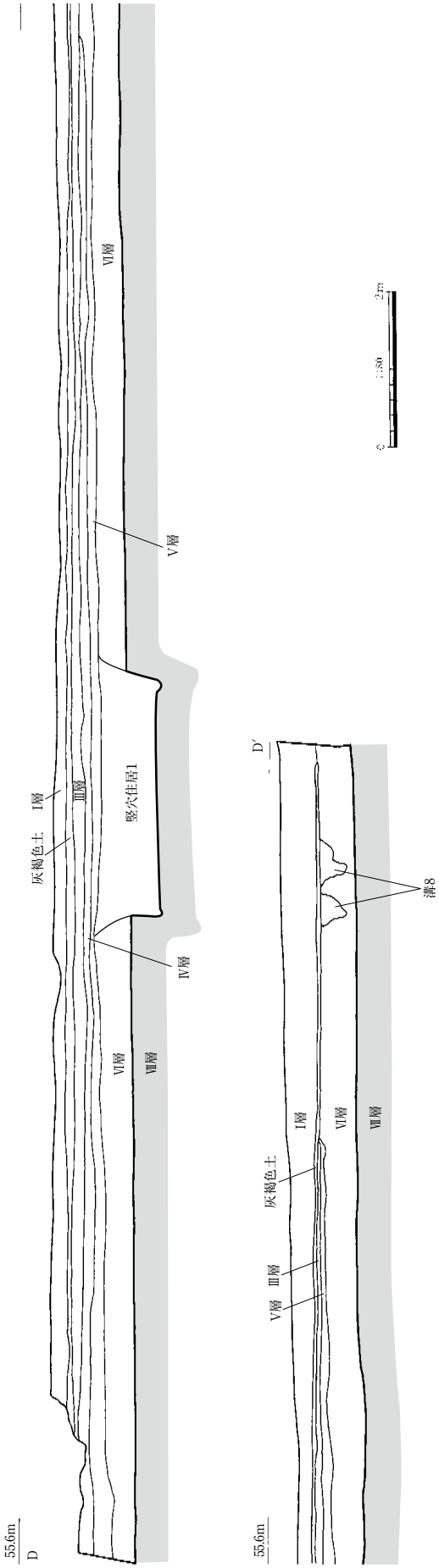
Ⅱ層：褐色土。調査区西側、北側に部分的に堆積する。下位に位置するⅢ層を撹拌したと思われる土層で、キメは粗い。層中にはⅠ層と同じく酸化鉄、５㎜ほどの小礫が含まれるが、Ⅰ層に比べ、その量は少ない。包含する遺物は中世後半のものが多いが、後述するように、調査区西側で検出された畦状の高まりをⅠ層と共有することから、近世の耕作土と思われる。本地層は、堆積



第４図　４区概略図



第５図　４区土層断面図①



第５図　４区土層断面図②

範囲が狭いことから、５区では確認されていない。

Ⅲ層：暗褐色土。調査区北東側は全体的に、西側は部分的に堆積する。キメはやや粗い。包含する遺物には４区で古代・中世のものを中心とするが、隣接する５区（平成 18 年度調査）では、15 世紀後半から 16 世紀ころのものと思われる青磁が出土することから、室町時代後半ころの土層と思われる。本土層下面でも暗褐色土を埋土にもつ耕作痕が確認されることから、本土層も耕作土であったと思われる。本地層は５区調査報告におけるⅢ層と対応するものである。

Ⅳ層：黒色土。色調は下位に位置するⅤ層に比べ、やや灰色がかる。キメはやや細かいが、１cmほどの小礫が含まれる。調査区北東側を中心に堆積する。包含遺物には古代全般のものが見られる。本地層は５区調査報告におけるⅣ層に対応するものである。

Ⅴ層：黒色土。キメは細かく、１cmほどの小礫が含まれる。調査区北東側を中心に堆積する。包含遺物には平安前期のものが見られる。本地層は５区においては確認されていない。

Ⅵ層：黒色土。色調は上位に位置するⅤ層に比べ明るい。キメは細かく、含まれる小礫の量は多い。現代の耕作による削平を受けた、調査区南側の一部を除いて、ほぼ調査区の全体に堆積する土層である。包含遺物には、ほぼ弥生時代中期中葉～後葉の土器がみられ、本土層上面では、古墳時代前期末ころの竪穴住居や弥生時代中期中葉～後葉の土坑が確認される。本地層は５区調査報告におけるⅢ層、１～３区調査報告の③層と対応するものである。なお、本地層については、１～３区調査報告において、周辺遺跡で平安時代の遺構が確認されることから、時期が特定されない地層とされたが、上述したように黒色土は幾層かに分層され、それぞれの帰属時期も明らかとなった。

Ⅶ層：明褐色土。漸移層である。確認される遺構には竪穴住居、土坑、溝、ピットなどが見られるが、埋土に黒色土が認められることなどら、その多くは上位に位置するⅥ層上面での検出漏れの遺構であると思われる。ただし、Ⅵ－Ⅶ層間にも遺構面がある可能性も高い。（野口）

第２節　第１遺構面の調査

表土直下で確認された遺構面である（第６図）。調査区西側、及び町道付近を除き、ほぼ調査区全体に堆積する。現況範囲での高低差は、東西で２ｍと西から東側に向かい、傾斜した地形である。前述したとおり、ベースとなる灰赤褐色土（Ⅰ層）は近世以降の耕作土であり、検出遺構は少ないが、調査区南西側においては下層に位置する暗褐色土（Ⅲ層）を畦状に掘り残した箇所が確認された。

（野口）

土坑１（第７・８図、図版２）

Ｃ３グリッド西側で確認された長軸 85cm、短軸 75cm、深さ 15cmを測る土坑で、平面形は隅丸の方形を呈する。確認面が近世耕作土であるⅠ層であることから、近世以降の土坑であるが、埋土には灰赤褐色土（Ⅰ層）が含まれず、締まりもなかったことから近年の遺構の可能性もある。出土遺物には近世陶器と思われる脚部細片が見られた。

本遺構の時期は確認層位などから近世以降と判断される。（野口）

溝１（第９・10 図、図版２・３）

Ｄ２、Ｅ２～４グリッドに位置する。Ｉ層上面において溝状遺構を検出した。本遺構は弧状に湾曲し、東側は北東－南西方向に軸をとり、西側は北西－南東方向に軸をとる。同一面の北側約４ｍには溝３を検出している。本遺構中央部は、現代の用水路に破壊される。西端は調査区外に延びるため全長は

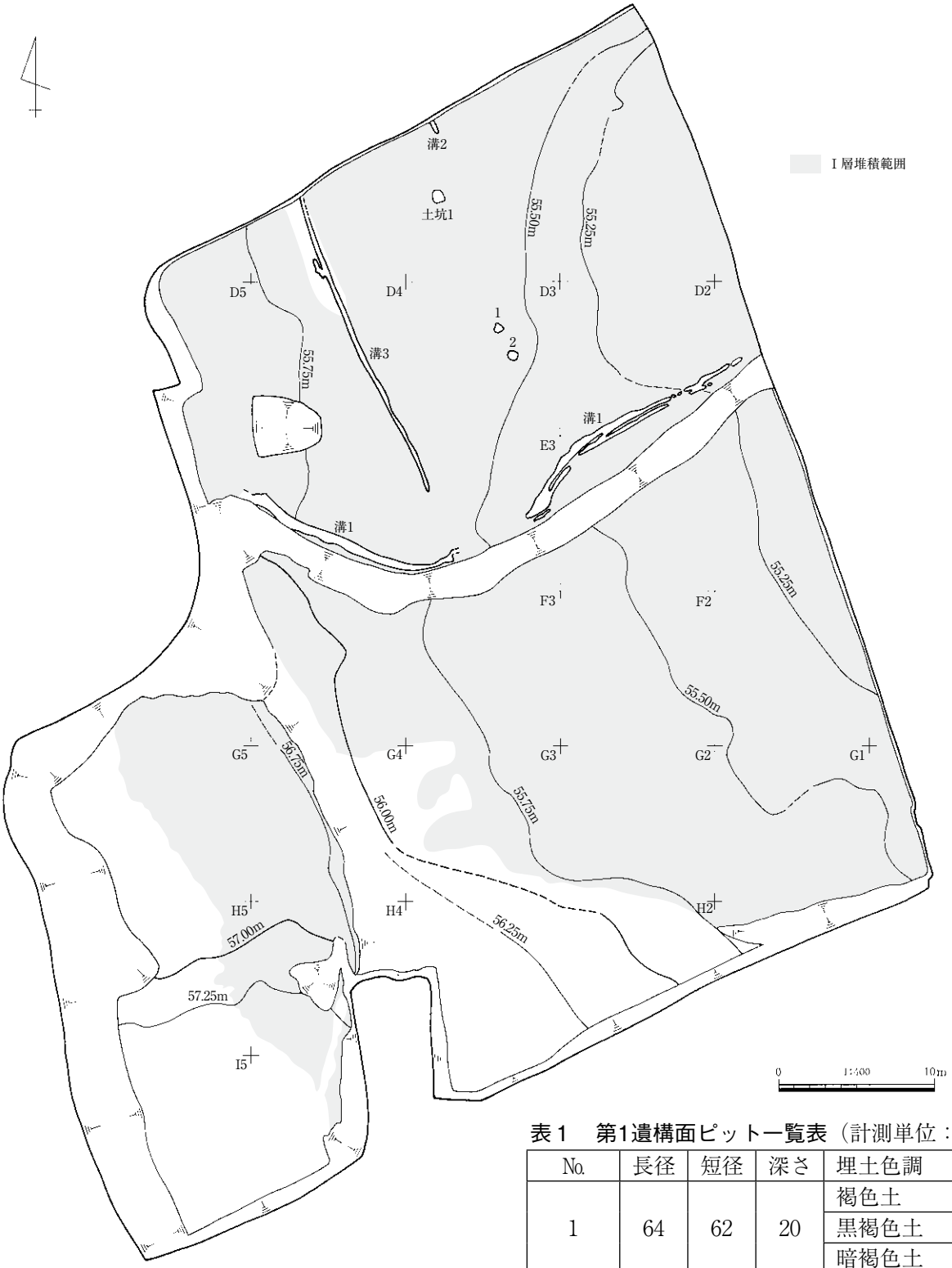
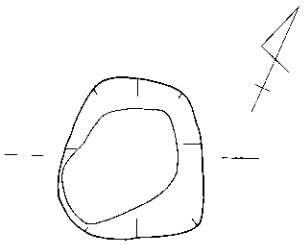
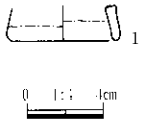


表１　第1遺構面ピット一覧表（計測単位：cm）

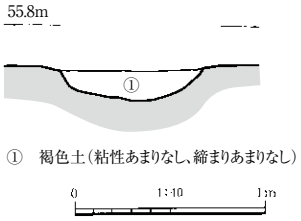
No.	長径	短径	深さ	埋土色調
1	64	62	20	褐色土
				黒褐色土
				暗褐色土
2	78	74	23	褐色土

第６図　４区第１遺構面遺構配置図

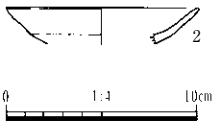




第８図　土坑１出土遺物

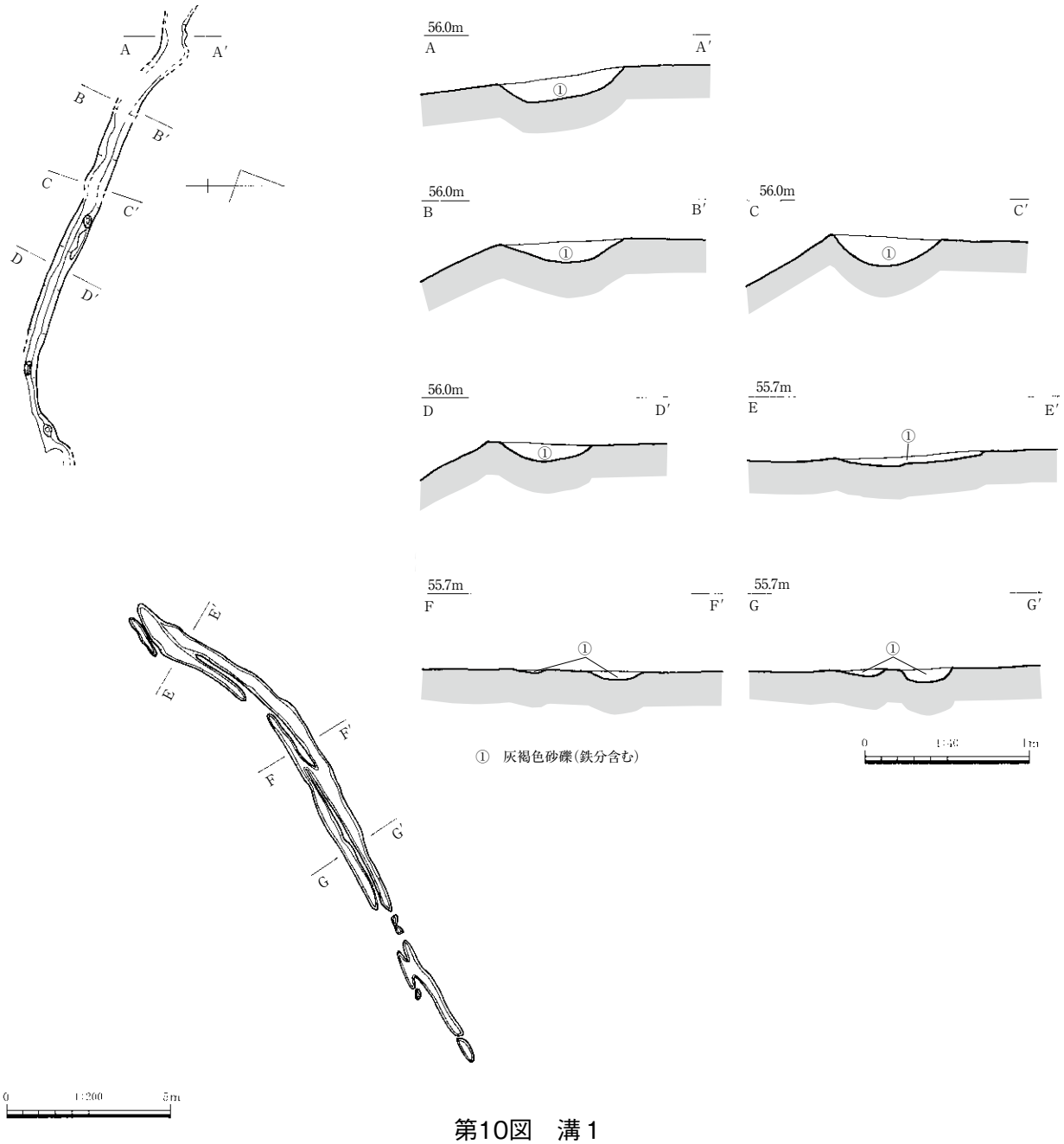


第７図　土坑１



第９図　溝１出土遺物

不明だが、現在の用水路により破壊された部分も含め、検出した長さは約 37.7 mである。検出面での幅は 21 ～ 94cm、検出面からの深さは西端 12cm、東端１cmを測る。底面の標高は西端 55.67 m、東端 55.09 mであり、東西の比高差は 58cmである。断面形はＵ字または逆台形状を呈し、底面には淵状の浅い窪みが部分的にみられる。埋土は灰褐色の砂礫が堆積し、鉄分を含む。埋土の堆積状況から判断して、溝内は流水の環境下におかれていた可能性が高い。埋土中より、内外面とも施釉された唐津焼の陶器皿２が出土している。



第10図　溝１

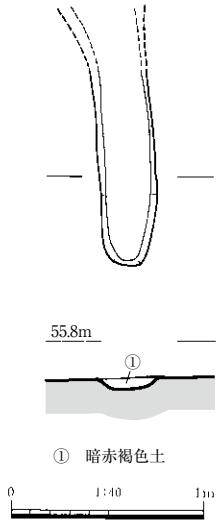
本遺構の時期は確認層位、出土遺物から近世以降と判断される。　（森本）

溝2（第 11 図、図版2）

調査区北側、Ｂ・Ｃ３グリッドにかけて検出した溝状遺構である。北側は調査区外に伸びるが、確認された範囲では、南東から北西方向に走向し、長さ 1.36 ｍ、幅 30 ～ 45㎝、深さ約５㎝を測る。埋土は灰赤褐色土で、確認面であるＩ層に近い色調であったが、埋土中には酸化鉄が多く含まれていたため、若干明るい。

本遺構の時期であるが、確認される層位から近世以降である。また性格については、確認される形状が、後述する本遺跡で確認される耕作痕に近似し、本遺跡が中世～現代まで耕作地として繰り返し利用されていたことから、本遺構も耕作痕とも考えられるが、確認面であるＩ層上面では他に同様の遺構は確認されていない。

（野口）

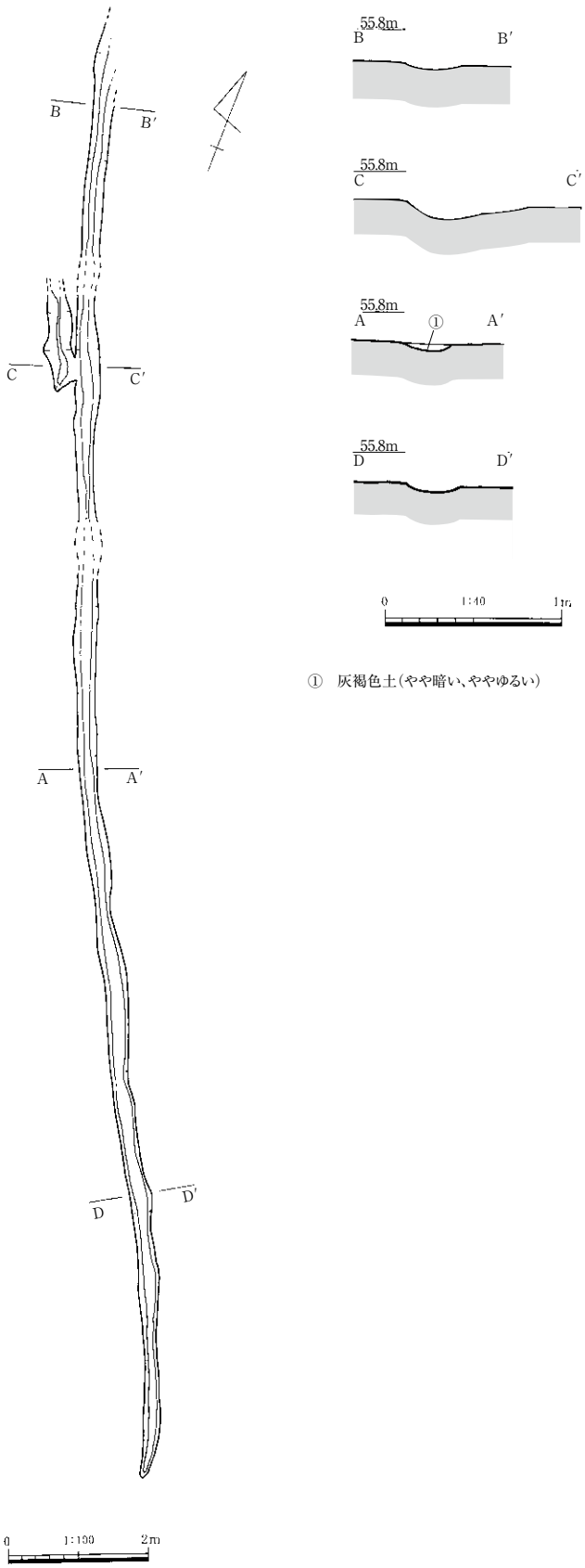


第11図　溝２

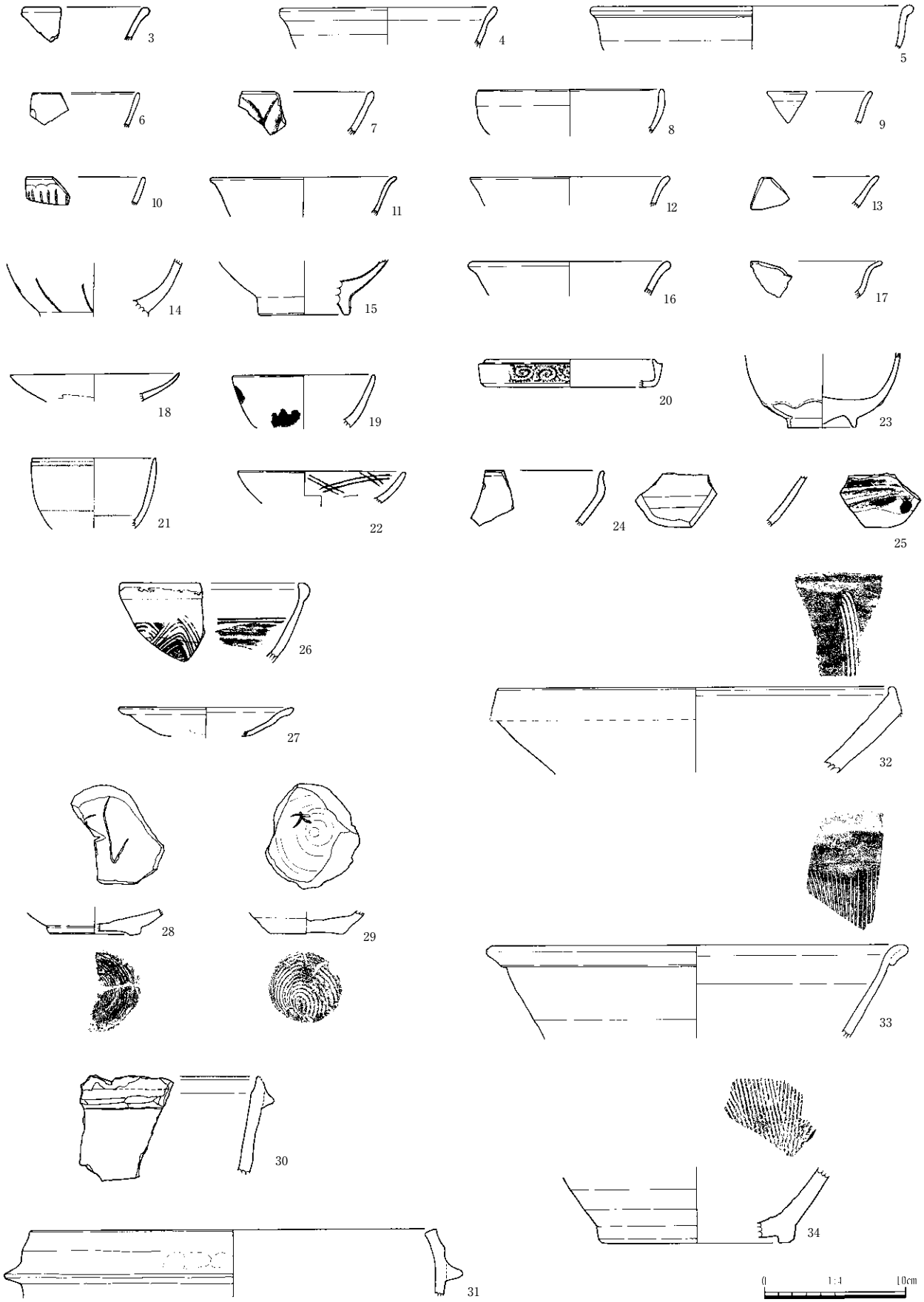
溝3（第 12 図、図版2）

Ｃ・Ｄ４、Ｅ３グリッドに位置する。Ｉ層上面において検出した直線的な溝状遺構である。同一面の南側約４ｍには溝１を検出している。主軸は 24° 西偏し、全長は約 20.8 ｍにおよぶ。検出面での幅は 18 ～ 36㎝、検出面からの深さは北端３㎝、南端１㎝を測る。底面の標高は北端約 55.56 ｍ、南端約 55.60 ｍであり、南北の比高差は約４㎝である。断面形は浅い皿状を呈す。埋土は灰褐色土であり、砂粒は混入しない。溝内から遺物は出土していない。

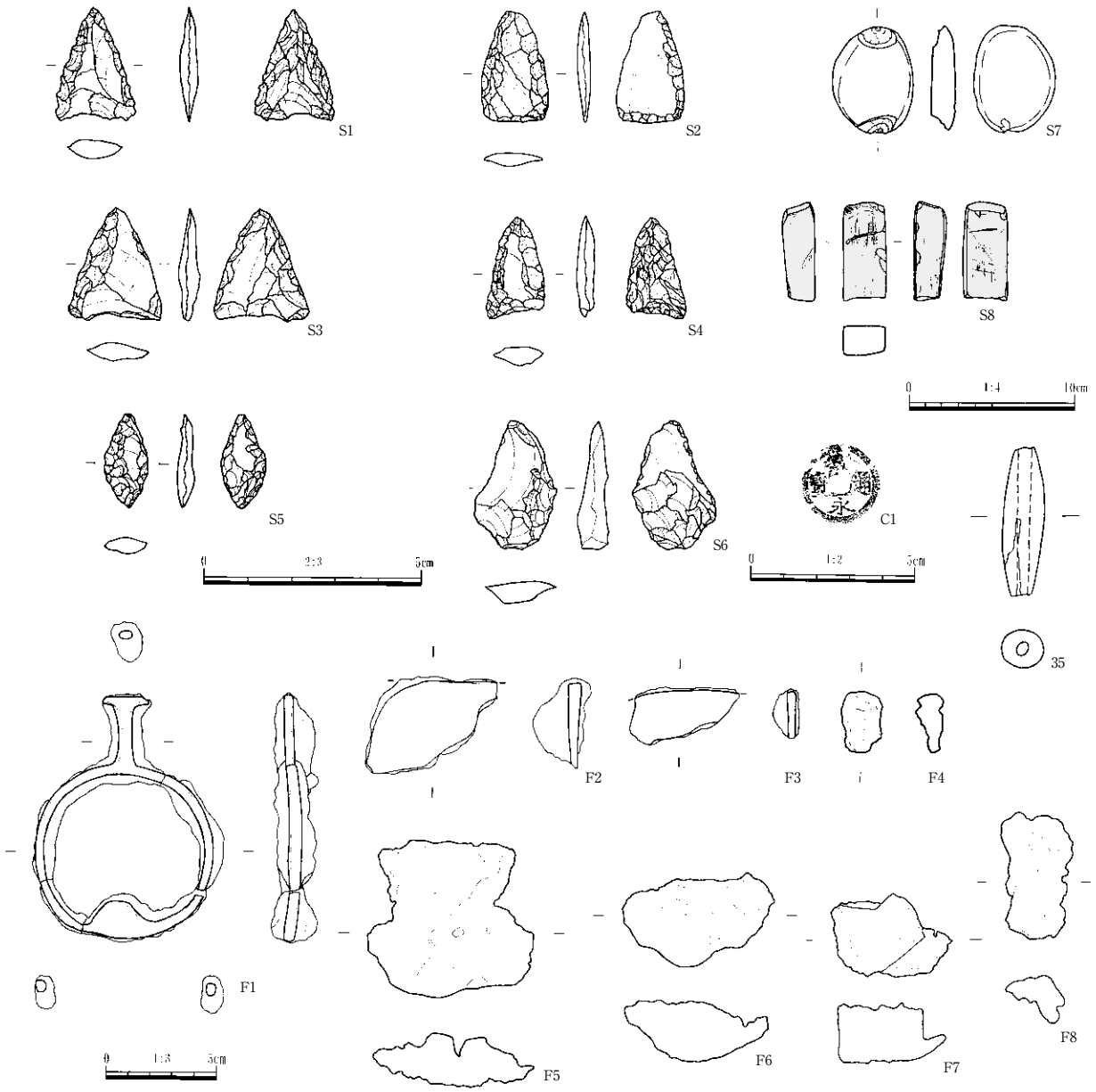
本遺構は検出した遺構面より判断し、近世以降に掘削されたものである。



第12図　溝３



第13図　遺構外出土遺物



第14図　遺構外出土遺物

なお、水路と思われる溝１と直交する位置関係にあることから、耕作地などを区画する溝などである可能性も考えられる。（森本）

遺構外出土遺物（第 13・14 図）

第１遺構面であるⅠ層は近世の遺物包含層であり、青磁を中心に中世から近世の陶磁器類が多く出土する（第 13 図）。そのほかにはヘラ書き土器 28、29 がみられた。ヘラ書き土器はいずれも、底部に回転糸切り痕を残す平安時代後期の土師器で、その内面底部にヘラ書きが施される。28 は「フ」状のヘラ書きの下にさらにヘラ書きがされるが、欠損のため「フ」以外は不明である。29 は「大」状にヘラ書きがされる。

また、本土層に年代的に伴わないものが大半であるが、第 14 図の石製品、土製品、金属製品などもみられる。（野口）

第３節　第２遺構面の調査

本遺構面である褐色土（Ⅱ層）は調査区西側、北側に部分的にその堆積を確認するが、後世の耕作（耕作土：Ⅰ層）によるため遺存状況は良くない。また、その遺存状況の悪さからも確認される遺構は少

第15図　４区第２遺構面遺構配置図

調査区南西側畦

調査区西側畦

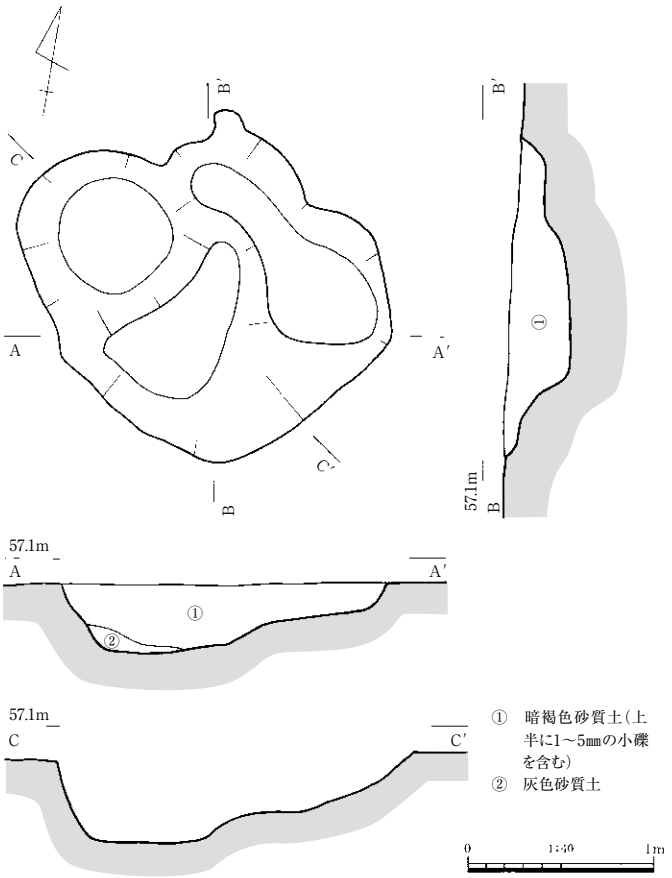
ない。本土層においては調査区西側、及び南西側で畦状の高まりが確認された。西側のものについてはⅡ層と同様の土によって高まりが作られ、その南側は畦状の高まりに沿うように若干掘り窪ませている。また、南西側のものについては、Ⅰ層除去後に認められるものであり、Ⅰ層同様、Ⅲ層を掘り残した畦に規制された遺存状況を見せる。このことから、Ⅱ層はⅠ層以前の耕作土であったと考えられ、両者は同じ畦を共有することから、その帰属時期は、極めて近いものであったと考えられる。なお、本土層上面では、本来上層に位置するⅠ層に伴う耕作痕が確認されたと思われるが、色調にわずかな差がある以外は、極めて類似した土であったため、その確認はできなかった。

また、調査区東側では、上記のⅡ層とは異なる灰褐色土の堆積が認められた。確認された範囲では南南東から北北西に向かう直線状の落ち込みがあり、その落ち込み内に灰褐色土は薄く堆積する状況であった。この灰褐色土中から本土層の堆積時期を示す遺物は認められなかったが、Ⅰ層とⅢ層間に位置することから15世紀後半～近世間の堆積が考えられる。（野口）

土坑2（第16図、図版2）

Ｈ４グリッドのほぼ中央に位置する長軸約1.9ｍ、短軸約1.6ｍ、深さ44cmの土坑で、平面形は不整形である。第１遺構面であるⅠ層を除去後に検出した。埋土には暗褐色土、灰色土の２層が認められ、いずれの層にも砂が含まれる。

本遺構は、確認面であるⅡ層が近世耕作土であり、同じく近世耕作土であるⅠ層に覆われることから、近世の時期である。（野口）



第16図　土坑２

土坑3（第 17 図、図版3）

Ｈ４グリッドの北西側で確認した、径およそ 78㎝、深さ 14㎝を測る平面円形の土坑である。埋土は上層に位置する灰赤褐色土（Ⅰ層）の単層である。このことから確認面を第２遺構面であるⅡ層上面としたが、Ⅰ層中もしくは上面を確認面とする土坑であったと思われる。

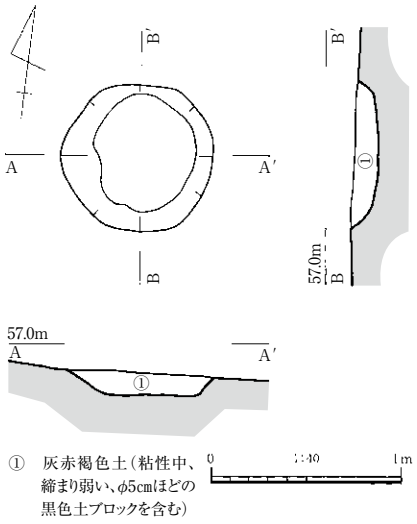
本遺構の時期は、上述の理由からⅠ層形成以降の時期、近世の時期が考えられる。　（野口）

溝4（第 18・19 図、図版3）

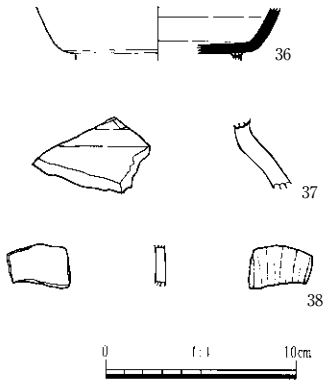
Ｅ３・４グリッドに位置する。Ⅰ層除去後、Ⅱ層上面において検出した。同一面に検出した溝５と重複する。本遺構中央部は北西－南東方向に軸をとり、西側は北側に屈曲し、東側は北側にゆるやかに湾曲する。検出した長さは約 15.6 ｍである。検出面での幅は 32 ～ 57㎝、検出面からの深さは西側 43㎝、東側 31㎝を測る。底面の標高は西側 55.16 ｍ、東側 55.06 ｍであり、東西の比高差は 10㎝である。断面形はＵ字状を呈し、埋土は灰褐色の砂礫またはシルトが堆積する。埋土の堆積状況から判断して、溝内は流水の環境下におかれていた可能性が高い。

出土遺物には須恵器高台坏 36、陶器甕 37 のほか、青磁碗 38 がみられる。

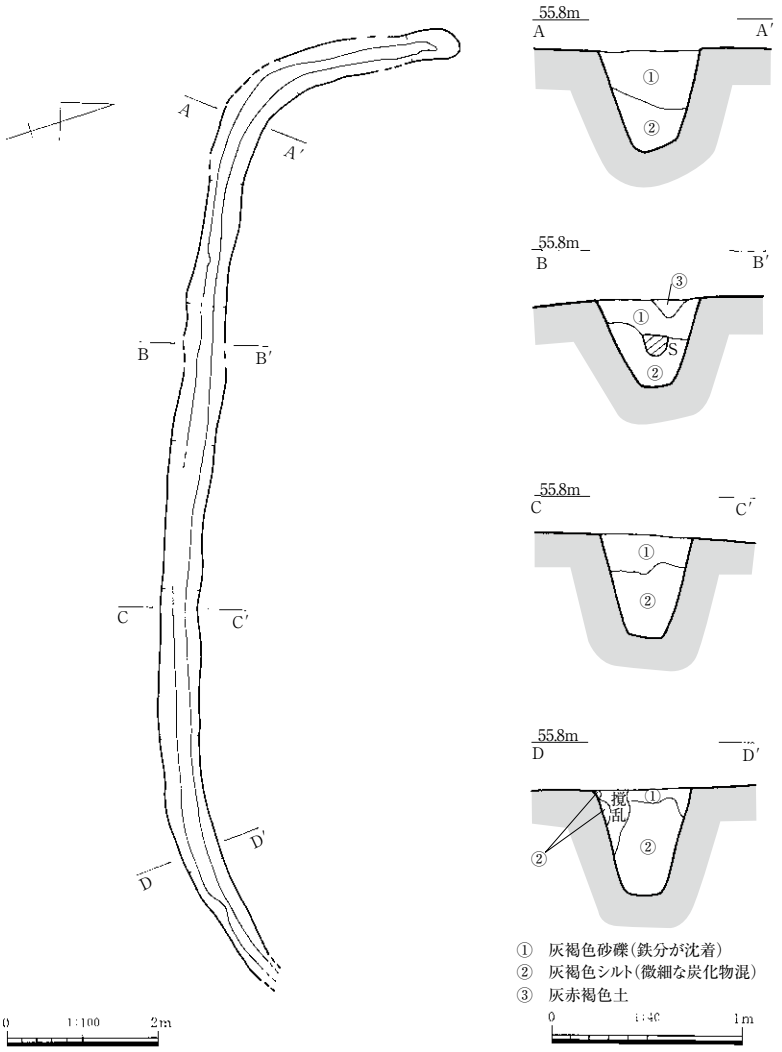
本遺構の時期は出土遺物の年代観とは異なるものの、検出した遺構面より近世以降に掘削されたも



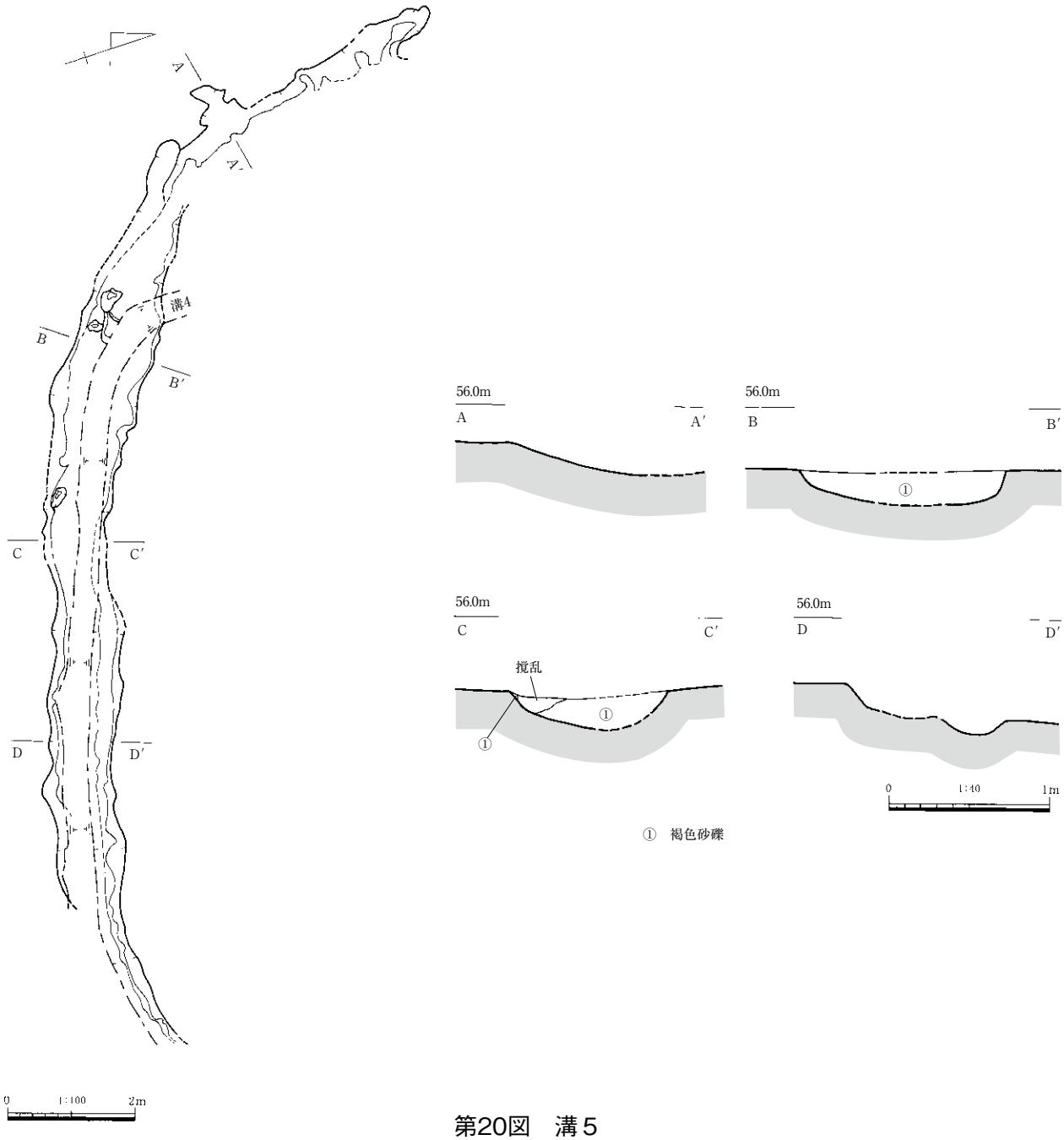
第17図　土坑３



第19図　溝４出土遺物



第18図　溝４

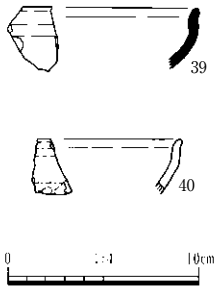


第20図　溝５

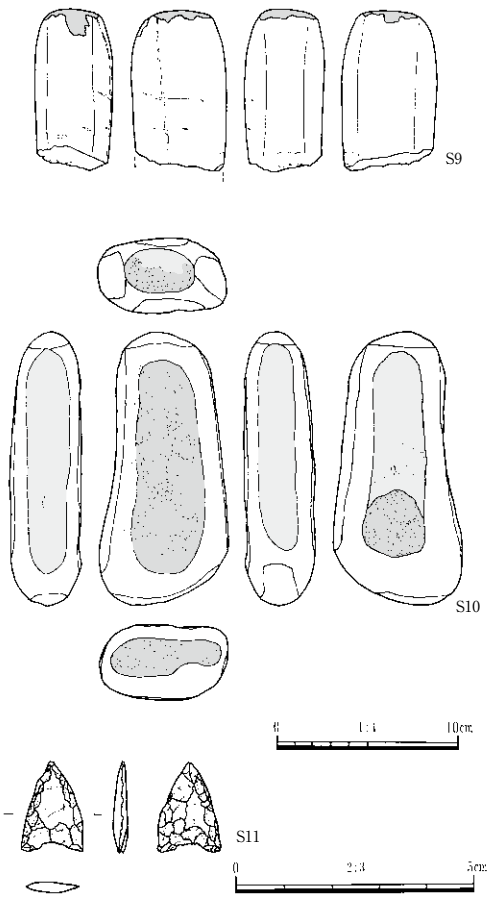
のと考えられる。　（森本）

溝5（第 20 ～ 22 図）

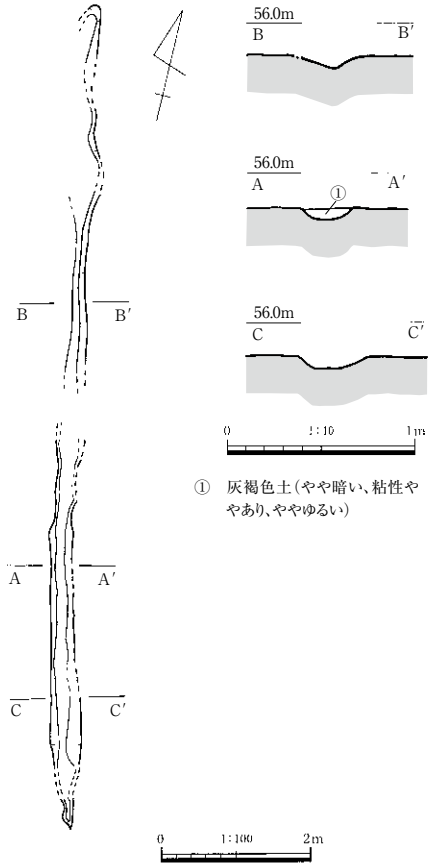
Ｅ３・４グリッドに位置する。Ⅰ層除去後、Ⅱ層上面において検出した。同一面に検出した溝４と重複し、溝４により掘削されている。本遺構中央部は北西－南東方向に軸をとり、両端は北側にゆるやかに湾曲する。検出した長さは約 19.05 ｍである。検出面での幅は約 62 ～ 142㎝、検出面からの深さは西側約６㎝、東側約５㎝を測る。底面の標高は西側約 55.58 ｍ、東側約 55.41 ｍであり、東西の比高差は約 17㎝である。断面形は概ね浅い皿状を呈し、底面には浅い淵



第21図　溝５出土遺物



第22図　溝５出土遺物



第23図　溝６

状の窪みが部分的にみられる。また、Ｄ－Ｄ′ライン周辺は北側が溝状にやや深くなる。埋土は褐色の砂礫であり、堆積状況から溝内は流水の環境下におかれていた可能性が高い。

埋土中より土器及び石器が出土している。39 は須恵器坏口縁部、40 は陶器の碗である。Ｓ９は石錘であり、石斧の基部を転用したものと思われる。

本遺構は、確認層位より近世の時期が考えられる。

（森本）

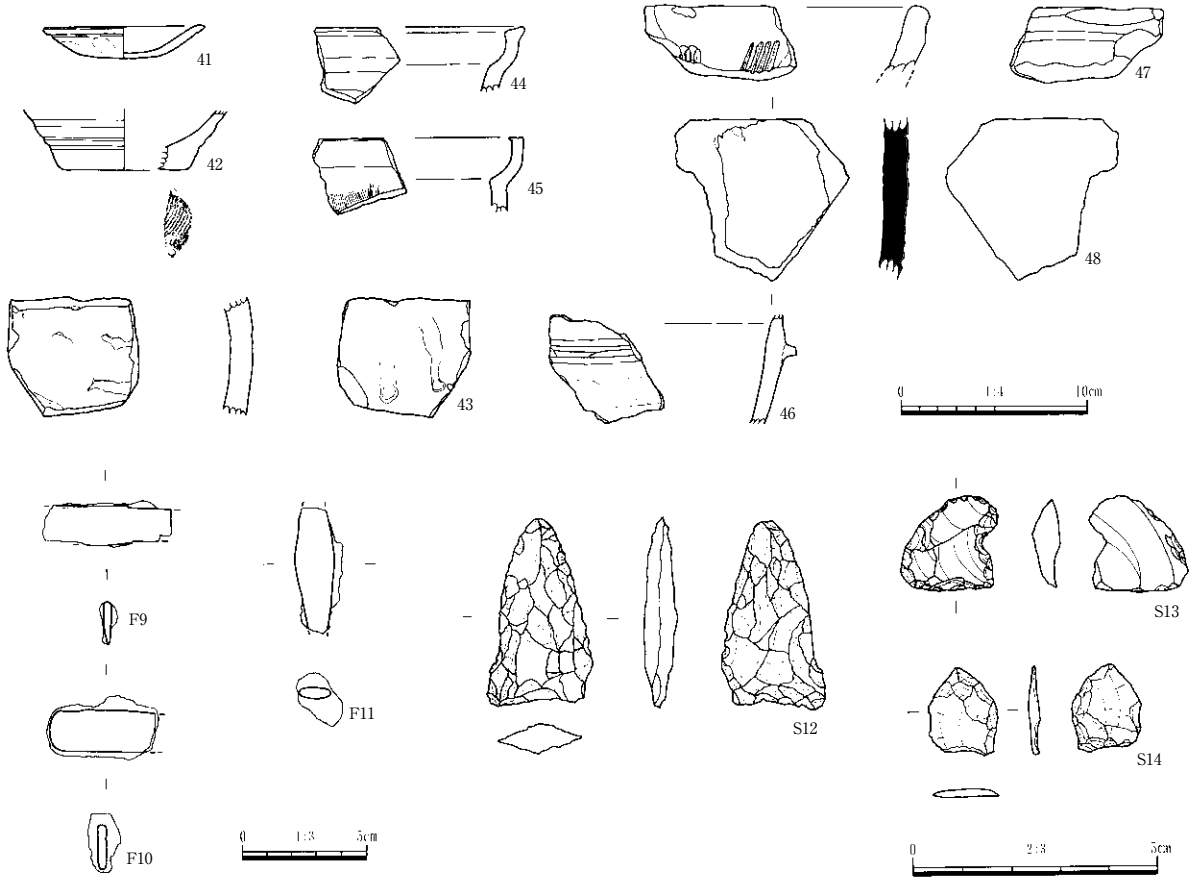
溝6（第 23 図）

Ｃ５グリッドに位置する。Ｉ層除去後、南側はⅡ層上面、北側はⅢ層上面において検出した。直線的な溝であるが、Ｃ－Ｃ′ライン部分では分岐している。主軸は 12° 西偏し、全長は約 11.0 ｍにおよぶ。検出面での幅は 25 ～ 41㎝、検出面からの深さは北端４㎝、南端２㎝を測る。底面の標高は北端 55.76 ｍ、南端 55.75 ｍであり、南北で比高差は認められない。断面形は概ね浅い皿状を呈す。埋土は灰褐色土であり、砂粒は混入しない。溝内から遺物は出土していない。

なお、本遺構東側 50㎝の位置には、近世耕作地の区画と思われるＩ層の落ち込みを確認している。本遺構とは近接した位置関係にあり、ほぼ同じ主軸をとることから、関連性がうかがわれる。（森本）

遺構外出土遺物（第 24 図）

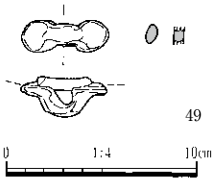
第２遺構面を形成するⅡ層は、その堆積範囲が他の地層に比べ狭いことから、包蔵する遺物の量は他の地層に比べ少ないが、土器には古代から近世までの遺物がみられ、41 の京都系のカワラケなどもみられる。このほか鉄製品Ｆ９～ 11 は、いずれも鍛造品であるが、Ｆ９は刀子の刃部～茎部の破片で片関である。Ｆ 10、11 はそれぞれ板状、棒状を呈するが、いずれも刀子の破片になる可能性がある。また、本地層に年代的に伴わないが、Ｓ 12 ～ 14 の石器もみられる。（野口）



第24図　遺構外出土遺物

灰褐色土内出土遺物（第 25 図）

調査区東側に堆積する灰褐色土中に包蔵される遺物はわずかであり、図化に耐えうるものは 49 のみであった。49 は表面に暗オリーブ色の褐釉がかけられた褐釉陶器の破片で、壺の肩部に付く耳の破片である。（野口）



第25図
灰褐色土出土遺物

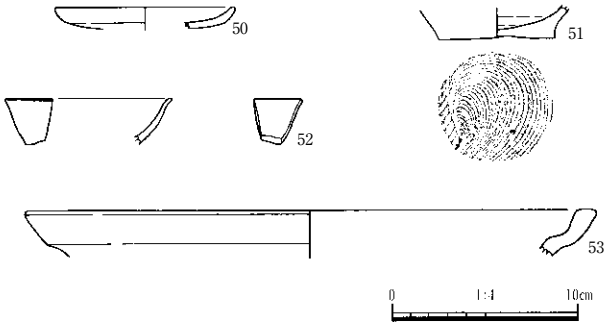
灰褐色土堆積状況

灰褐色土除去後

第４節　第３遺構面の調査

調査区北東側に広く、西側に部分的に堆積するⅢ層上面を確認面とする。現況範囲での高低差は、東西でおよそ２ｍと西から東に向かい、傾斜した地形である。本土層上面では、土坑、溝等の遺構が

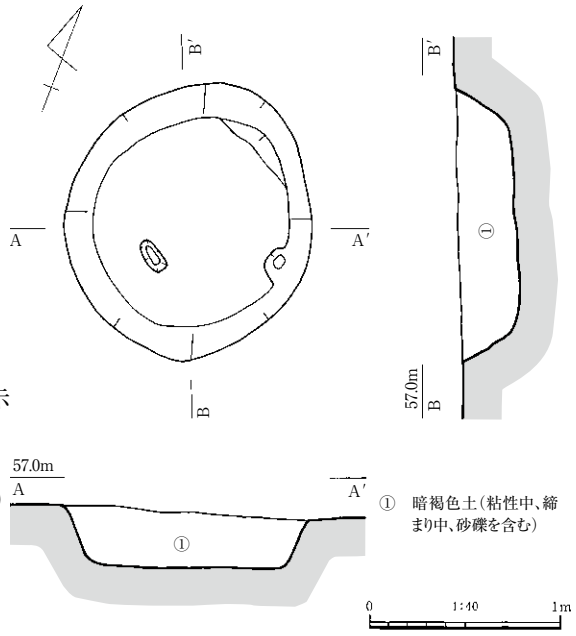
第26図　４区第３遺構面遺構配置図



第27図　土坑４出土遺物

確認されるほか、断続的にではあるが広い範囲で灰赤褐色土（Ⅰ層）を埋土とする耕作痕が検出された。

（野口）



第28図　土坑４

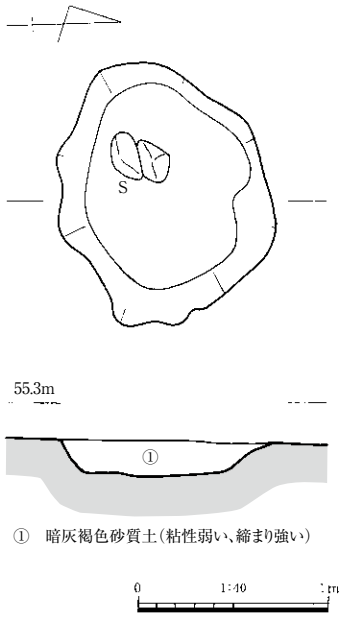
土坑4（第 27・28 図、図版3）

Ｇ５グリッド南東側に位置する。長径 1.4 m、短径 1.3 m、深さ 31㎝を測る平面楕円形の土坑である。埋土は暗褐色土の単層である。出土遺物には、土師器皿 50、土師器坏 51、青磁 52、土師質鍋 53 が見られた。

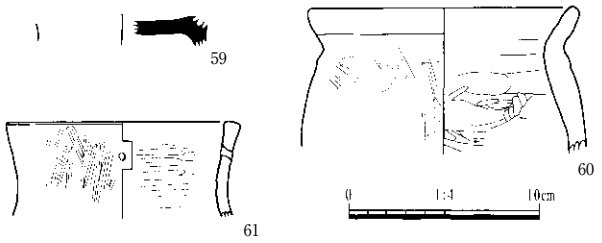
本遺構は、確認層位であるⅢ層に近似する埋土をもつことから、室町時代後半から近世包含層堆積前の時期が考えられる。　（野口）

土坑5（第 29 図、図版3）

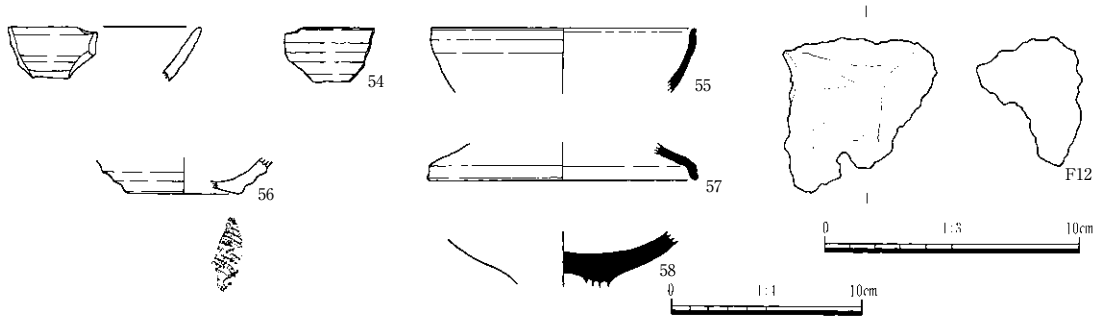
Ｅ２グリッド南西隅で検出した、平面がやや歪な楕



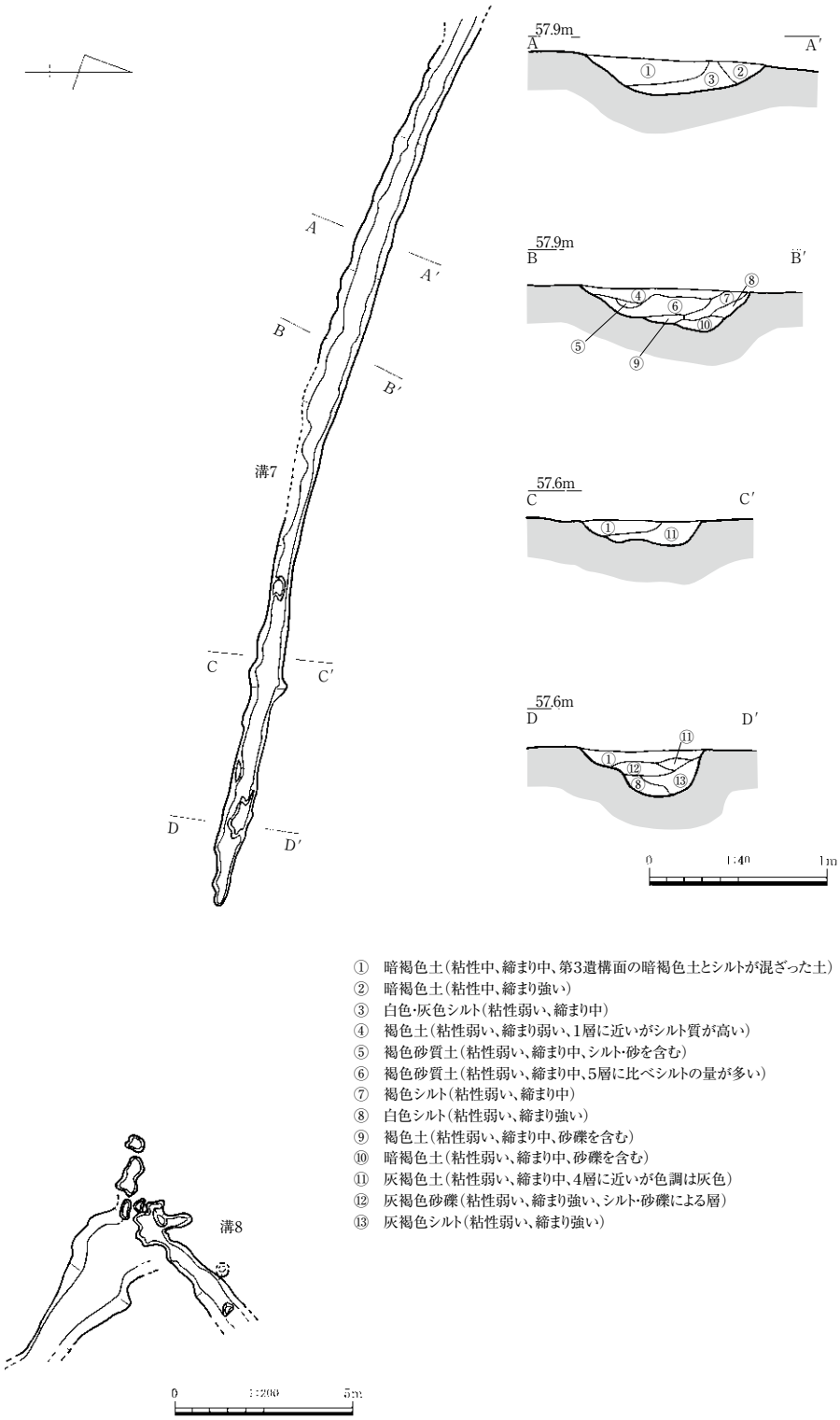
第29図　土坑５



第30図　溝８出土遺物



第31図　溝７出土遺物



第32図　溝７・８

円形を呈する土坑である。長径1.4ｍ、短径1.1ｍ、深さ20㎝を測る。埋土は川砂と思われる目の粗い砂を主とする暗灰褐色砂質土で、埋土中には25㎝ほどの自然礫も２点出土した。

本遺構の時期は、確認面であるⅢ層の年代から、室町時代後半から近世までの範囲が考えられる。本遺構の性格の詳細は明らかでないが、埋土が川砂と思われる目の粗い砂を含んだ暗灰褐色砂質土であることを考えると、本遺構から１ｍほど南側に位置する溝11と関連した遺構である可能性がある。（野口）

溝７・８（第30～32図、図版3）

溝７は調査区中央、Ｆ４～Ｇ２グリッドの範囲に位置する東西方向に伸びる溝状遺構である。確認される範囲では長さ26ｍ、幅90㎝を測るが、西側は町道下の上下水道埋設に伴う撹乱等を受ける。深さは検出面から約25㎝を測り、遺構底面の標高は西側で55.7ｍ、東側で55.2ｍと西から東に向かい傾斜する。本遺構は機能していた際、流水があったものと思われ、埋土にはシルトや砂礫を中心とした土が堆積する。また、溝７の東側７ｍほどの位置には、平面「く」の字状を呈する溝８が存するが、溝８は溝７の延長線状に位置することや、シルトや砂礫を中心とする埋土をもつことなどから、本来は同じ溝であった可能性が高い。

出土遺物には54～61の弥生、奈良・平安時代の土器、椀形鍛冶滓が見られるが、本遺構は確認される層位から室町時代後半から近世までの範囲が考えられる。（野口）

溝９（第 33 図、図版４）

溝７の南側に位置する東西方向に伸びる溝である。東側では溝７により掘削を受け、確認される範囲で長さ 19 m、幅 80cm、深さ 15cmを測る。遺構底面の標高は西側で 55.82 m、東側で 55.47 mと西から東に向かい傾斜する。埋土にはシルトや砂を中心とした土が堆積する。

本遺構は確認される層位から室町時代後半から近世までの範囲が考えられるが、溝７と西側部分で隣接し、東側部分で重複することや埋土も類似することなどから、溝７掘削前に機能していた同じ性格の溝であったと思われる。（野口）

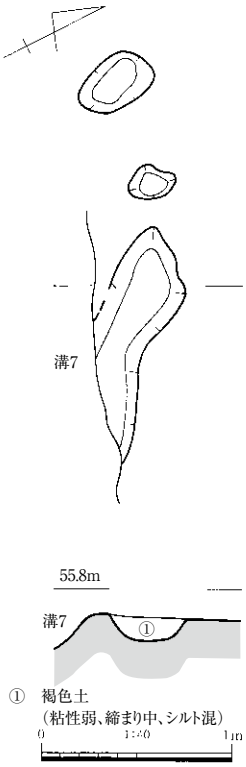
溝 10（第 34 図）

溝７の北側に位置する北西から南東方向に走向する溝であるが、溝、及びピット状の掘りこみが点在する状況であり、遺存状態は極めて良くない。また、南東部分でも溝７により掘削を受ける。確認される範囲で、長さ 2.2 m、幅 36cm、深さ 13cmを測り、埋土にはシルトを含んだ褐色土が堆積する。本遺構も溝９と同様、溝７と北西側部分で隣接し、南東側部分で重複することや埋土も類似することなどから、溝７掘削前に機能していた同じ性格の溝であったと思われる。

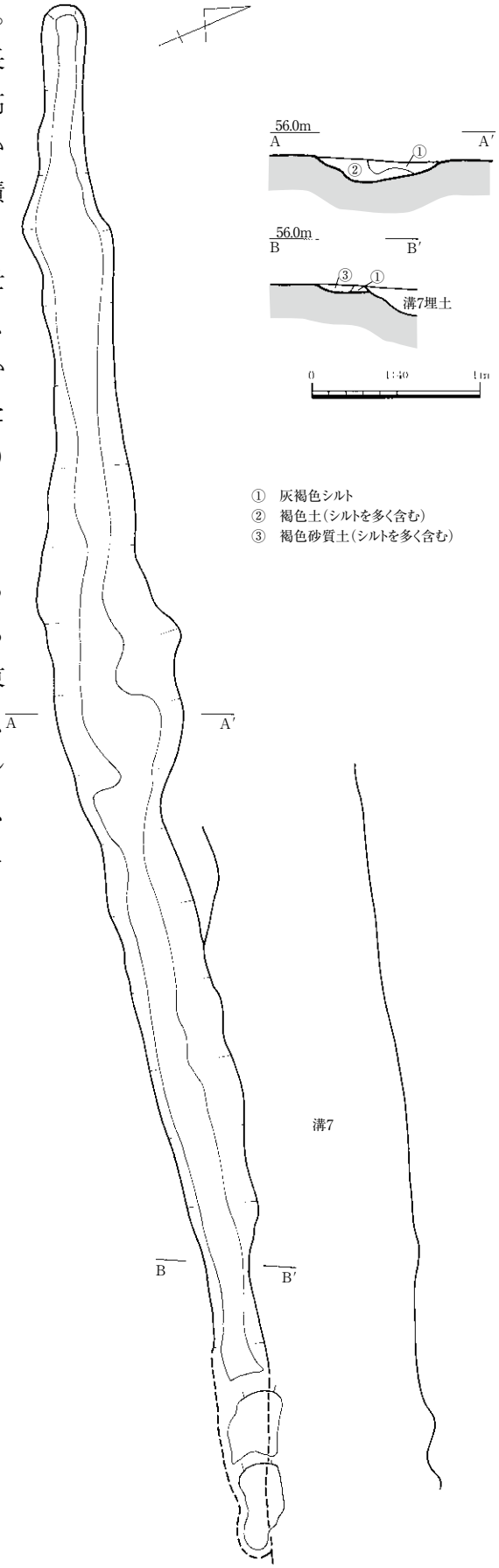
本遺構の時期は、確認層位より室町時代後半から近世までの範囲が考えられるが、溝７・８や９と近い時期のものであったと考えられる。（野口）

溝 11（第 35・36 図、図版4）

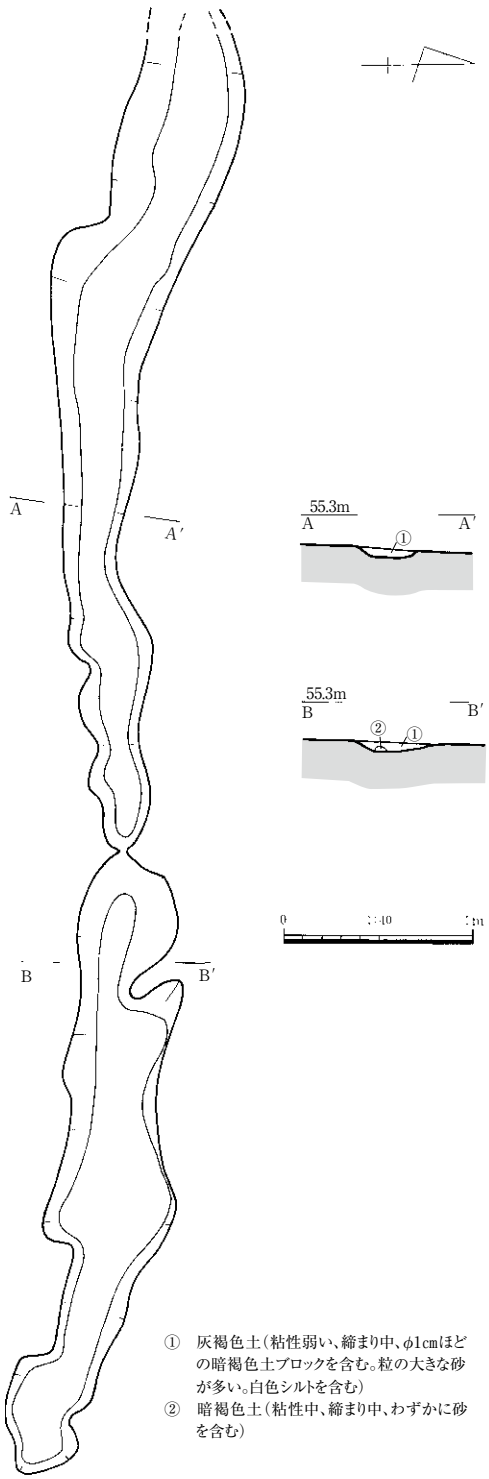
Ｆ２グリッド北側で確認された。ほぼ東西方向に走向する、長さ 7.9 m、幅 28 ～ 70cm、深さおよそ６cmを測る溝である。確認面の状況では、中央部分がわずかに接するのみで、２本の溝



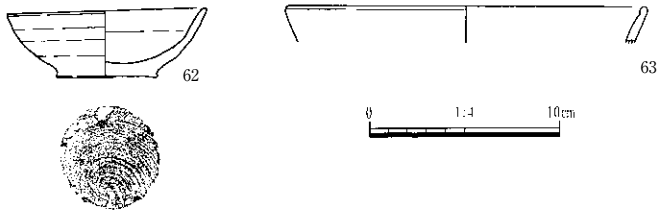
第34図　溝10



第33図　溝９



第35図　溝11



第36図　溝11出土遺物

が連結した形状である。確認面の地形と同様、西から東にかけてわずかではあるが傾斜する。

埋土には灰褐色土、暗褐色土の２層が見られるが、暗褐色土は部分的に堆積するのみで、大半は灰褐色土が堆積する状況である。両層には川砂が認められるが、さらに灰褐色土中には白色のシルトが混ざる。

本遺構の機能としては、埋土に川砂やシルトが含まれることから、流水を目的とした溝であったと考えられる。周辺では、北側に土坑５が位置し、川砂を含むなど埋土に共通性を見せるほか、約８ｍ南側に位置する溝７、９、10とは埋土が類似することや、その走向も平行するなど関連したものであった可能性がある。

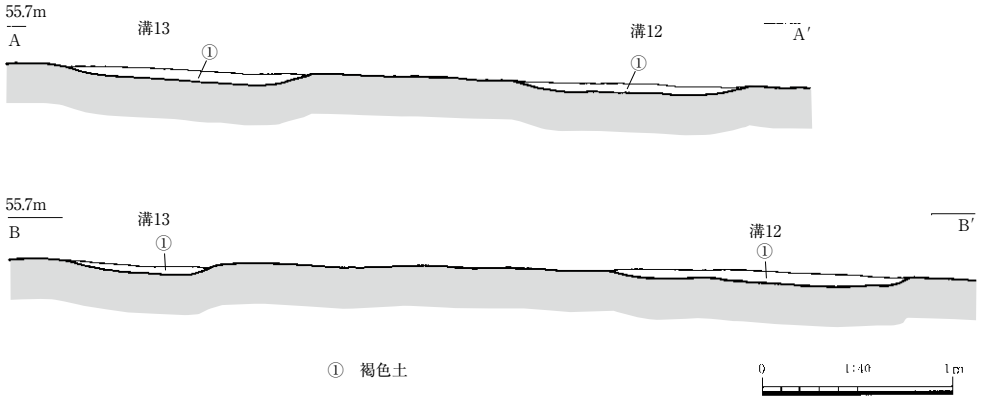
出土遺物には土師器坏62、63が見られる。63は細片であるため不明な部分が多いが、62は回転ナデによる調整が施され、底部には回転糸切り痕を残す。その特徴から10世紀ころのものと思われる。

本遺構の時期は、確認層位より室町時代後半から近世までの範囲が考えられる。（野口）

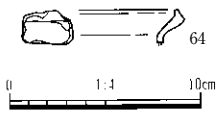
溝 12（第 37・38・40 図）

Ｃ４・５、Ｄ４・５グリッドに位置する。褐色土除去後、Ⅲ層上面において検出した。本遺構 1.1 ｍ西側には同一面に検出した溝 13 が存在する。平面形は不整形であり、主軸は 14° 西偏する。検出した範囲の長さは 7.1 ｍ、検出面での幅は 29 ～ 200㎝、検出面からの深さは南北両端とも３㎝を測る。底面の標高は南北両端ともに 55.37 ｍであり、南北の比高差は認められない。断面形は浅い皿状を呈す。埋土は褐色土が堆積し、砂粒は混入しない。堆積状況から判断し、水路である可能性は低いと思われる。埋土中より、弥生土器甕 64 が出土しているが、本遺構検出面から判断し、64 は混入遺物である

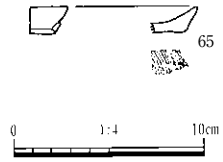
本遺構は確認される層位より、室町時代後半以降の時期が考えられるが、埋土に上層に位置する褐色土（Ⅱ層）がみられることから、近世の溝であった可能性が高い。（森本）



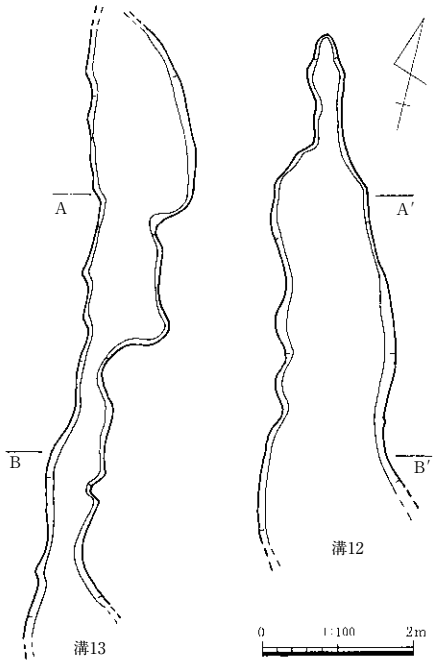
第37図　溝12・13断面図



第38図
溝12出土遺物



第39図
溝13出土遺物



第40図　溝12・13

溝 13（第 37・39・40 図）

Ｃ・Ｄ５グリッドに位置する。Ⅱ層除去後、Ⅲ層上面において溝状遺構を検出した。本遺構 1.1 ｍ東側には同一面で検出した溝 12 が存在する。平面形は不整形であり、主軸は６°西偏する。北側は調査区外に延びるため全長は不明だが、検出した範囲の長さは 8.1 ｍ、検出面での幅は 32 ～ 136㎝、検出面からの深さは南北両端ともに３㎝を測る。底面の標高は南側 55.40 ｍ、北側 55.46 ｍであり、南北の比高差は６㎝である。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は褐色土が堆積し、砂粒などは混入しない。堆積状況から判断し、水路である可能性は低いと思われる。

埋土中より、土師器皿 65 が出土している。65 は内外面ともに回転ナデ調整され、底部外面には回転糸切りによる切り離し痕跡が残る。

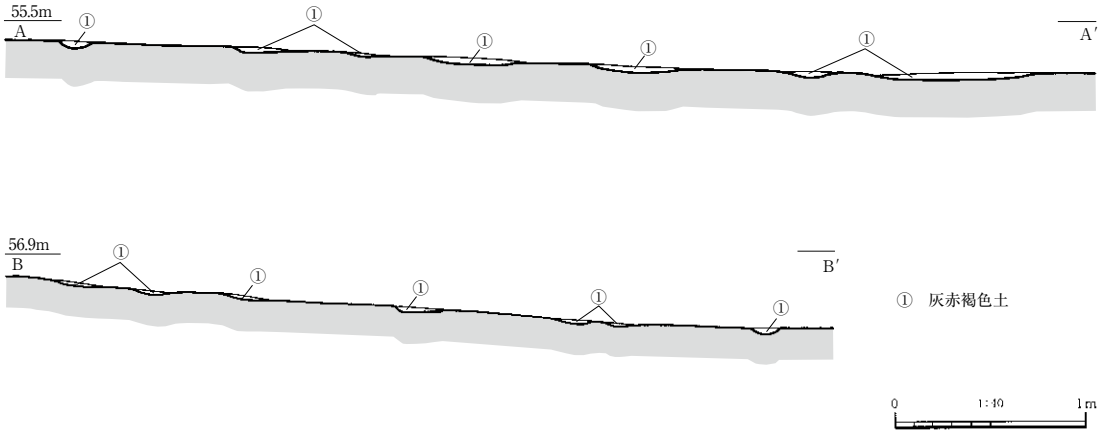
本遺構の時期は出土遺物の年代観とは異なるものの、検出した遺構面より 15 世紀以降に掘削されたものと考えられる。

なお、溝 12、13 はほぼ平行しており、近接した位置関係にある。遺構の形態、規模も似ており、埋土の色調も近似していることから､関連性がうかがわれる。（森本）

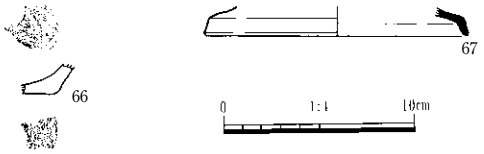
近世耕作痕（第 41 ～ 44 図、図版4）

茶畑六反田遺跡では、Ⅰ層除去後、第３遺構面であるⅢ層上面を主に、調査区のほぼ全域に点在する耕作痕が認められた。これらの多くは平行した幾条もの細い溝として確認されたが、なかには平面形が円形、楕円形、不整形として認められるものも存する。また、幅は 15 ～ 30㎝のものが大半を占めるが、50㎝と広いものも認められ、長さも最長 12.4 ｍ～最短で 10㎝とまちまちであった。深さはいずれも１～ 11㎝と浅いものであった。埋土は後述する南側の一部を除いて、第１遺構面を形成する灰赤褐色土（Ⅰ層）を埋土とすることから、近世耕作時の耕作痕と考えられる。

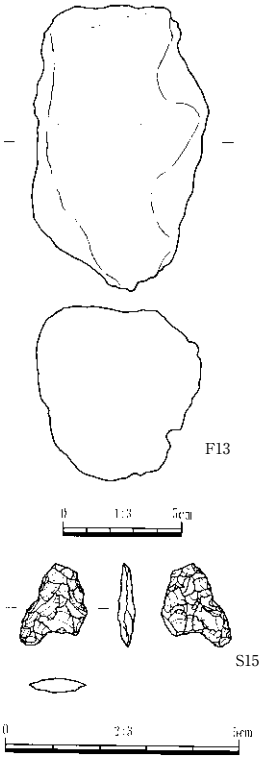
さて、第３遺構面で確認された多くの耕作痕は南東から北西方向に伸びる。主軸はＮ－ 35°－ Ｗである。これは茶畑六反田遺跡４区のⅠ層除去後の等高線と平行するものである。うち調査区南側の



第41図　近世耕作痕土層断面図



第42図　近世耕作痕出土遺物



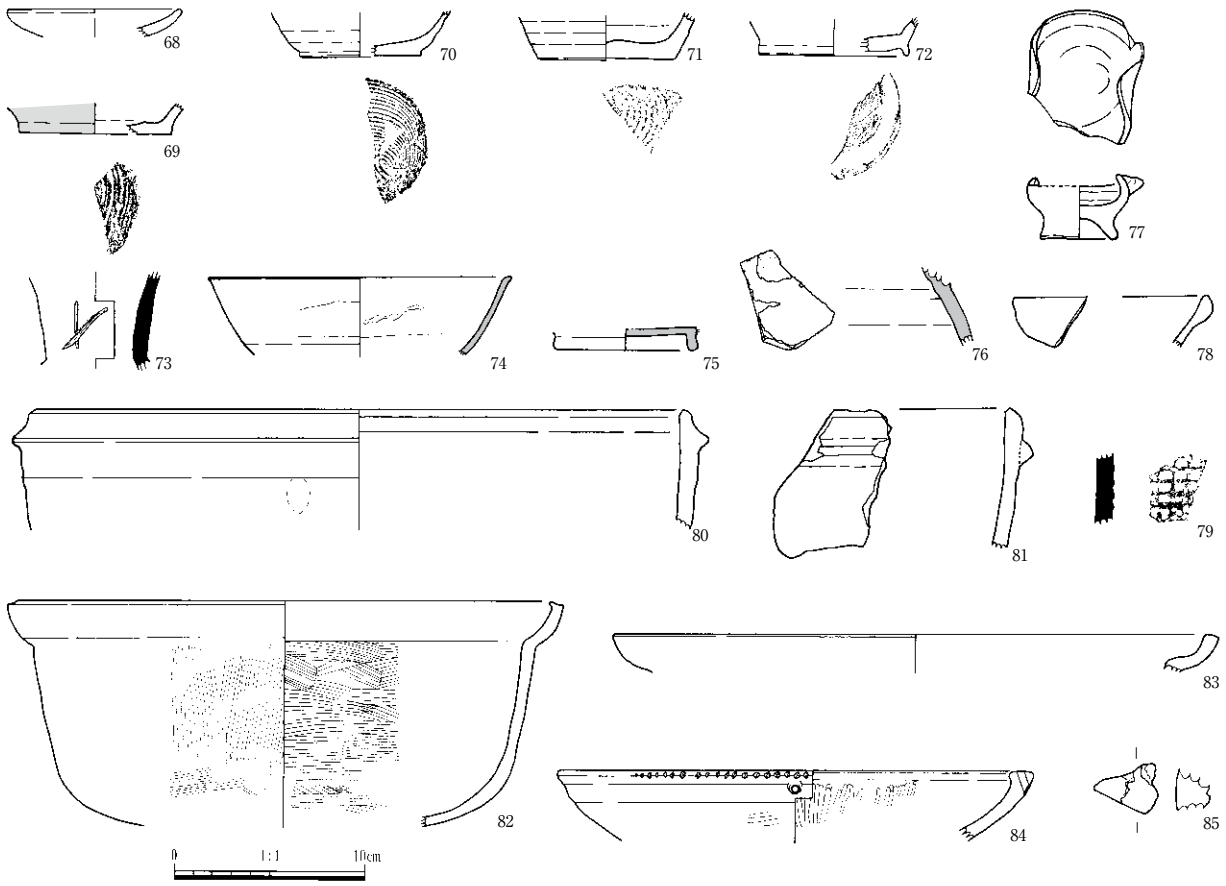
第43図　近世耕作痕出土遺物

Ｇ２グリッドに展開する一部の耕作痕に関しては、ほぼ地形の高まりに沿って弧状に認められるものの、他の耕作痕と走向を異にし、他の耕作痕に比べ灰色味が強く、酸化鉄の含まれる量が少ないなど、埋土に若干の差を有することから、時期が異なるものであったと思われる。

以上、本耕作痕であるが、如何なる要因で残されたものだろうか。耕作痕の成因としては、天地返し痕、根菜類用畝床痕、桑植栽痕、畝間痕の可能性が指摘される（日本考古学協会：2000）。詳細には触れないが、これによると天地返し痕、根菜類用畝床痕、桑植栽痕は、意図的に基盤層を掘り上げた溝状の痕跡で、基盤層では明瞭に残存するようである。それに対し畝間痕は、畝立や土寄せの際、常時より深く耕された痕跡で、幅も狭く、浅いため、耕作土が残されている条件下でなければ、残存の可能性は薄いようである。とするならば、幅狭で、浅く、上層に耕作痕埋土と同一の耕作土が堆積する本耕作痕は、畝間痕であった可能性が考えられる。また、畠で畝を作る場合、降雨による土壌浸食を防ぐため、その方向を等高線と平行させて作ることが通例とされる（藤原:1997）が、耕作痕の主軸が、確認面の等高線と方向を一にすることも、畝間痕の可能性を高くする。（野口）

日本考古学協会　2000「はたけの考古学」『日本考古学協会 2000 年度鹿児島大会資料　第１集』
藤原宏志　1997「鳥取：長瀬高浜遺跡における畠稲作遺構について」『長瀬高浜遺跡Ⅶ』財団法人鳥取県教育文化財団

第44図　近世耕作痕



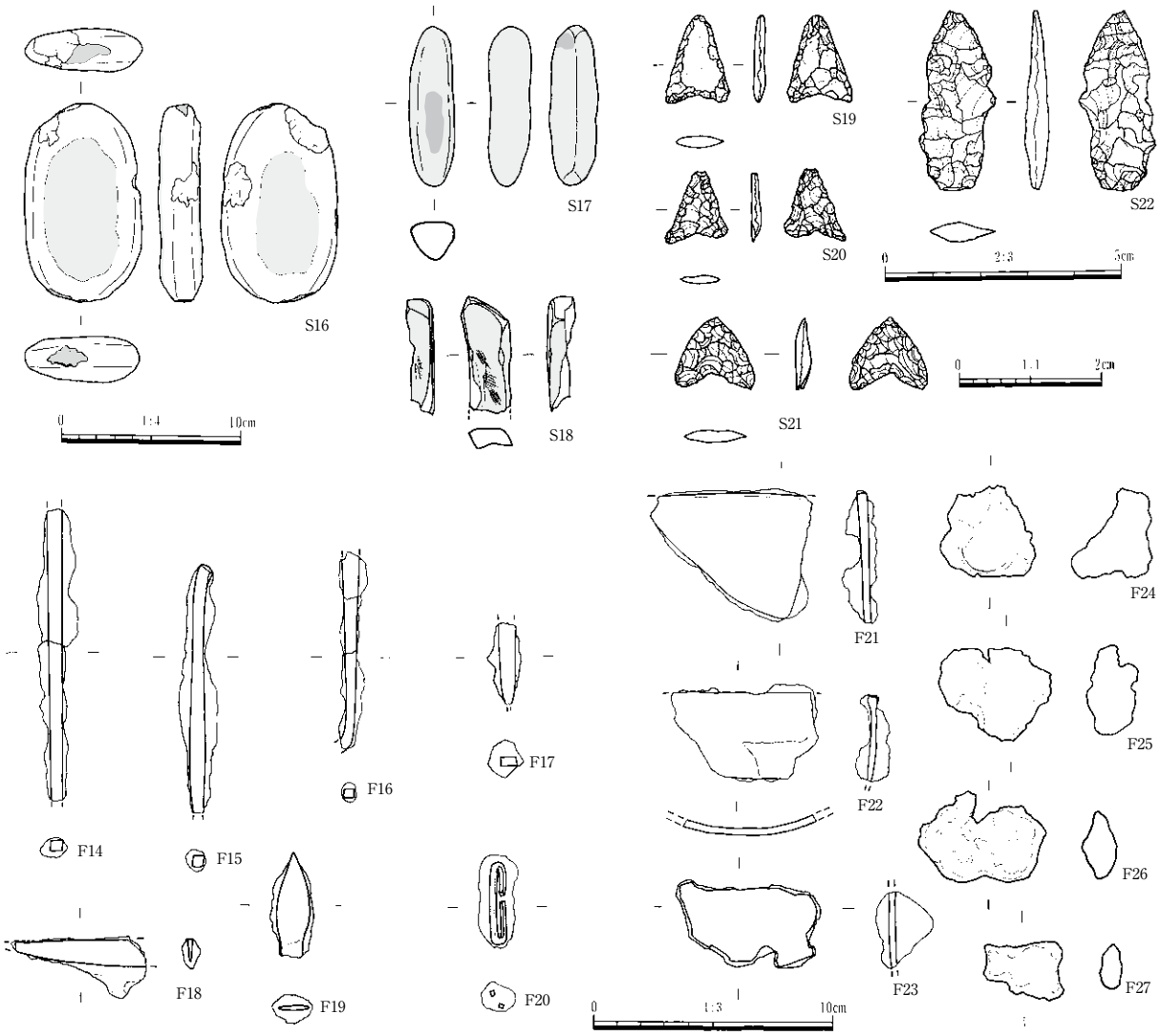
第45図　遺構外出土遺物

遺構外出土遺物（第 45・46 図）

本遺構面を形成するⅢ層中には古代・中世の遺物が中心に包蔵されるが、隣接する５区で、15 世紀後半から 16 世紀ころのものと思われる青磁が出土することから、室町時代後半ころを下限にすると思われる。

68 ～ 72 は土師器の皿、坏で、体部を回転ナデによって仕上げる。また、底部が残る資料は、いずれも回転糸切り痕が確認される。73 は須恵器長頸壺の頸部の資料で、外面には「レ」状のヘラ記号が認められる。74 ～ 76 は灰釉陶器の破片で、74、75 は碗、75 はその高台部である。76 は壺肩部の資料と思われる。77 は高台付きの土師器耳皿で、回転ナデによる整形後、坏部の２ヶ所を内側に折り曲げる。一般に箸台としての用途が考えられている。78 は玉縁の口縁部をもつ白磁碗で、13 世紀ころのものと思われる。79 は外面に格子タタキを施した須恵器甕、80、81 は土師器羽釜、82、83 は土師器鍋である。このほか 84 は口縁部を穿孔した弥生土器の高坏で、下層遺物が巻き上げられたものである。85 は羽口の破片である。

Ｓ 16 は扁平な安山岩を利用した磨石と敲石の複合石器。表裏に研磨痕が、上下両端部に敲打痕が見られる。Ｓ 17 は棒状の安山岩を用いた磨石で、全面に研磨による平滑面が形成されている。Ｓ 18 は片岩製の砥石で、全面が砥面となり、部分的に細かい線条痕が観察できる。砥石目は極細である。Ｓ 19 ～ Ｓ 21 は石鏃。Ｓ 19 は安山岩製で、表裏に素材面が残り、周縁に細かい二次調整が見られる。Ｓ 20・Ｓ 21 は黒曜石製のもので、いずれも表裏全面に細かい二次調整が入る。Ｓ 22 は黒曜石製の尖頭器。両面に押圧剥離による二次調整が施されている。長さ 3.6cmと小型で、サイズ的には石鏃と大差ない。

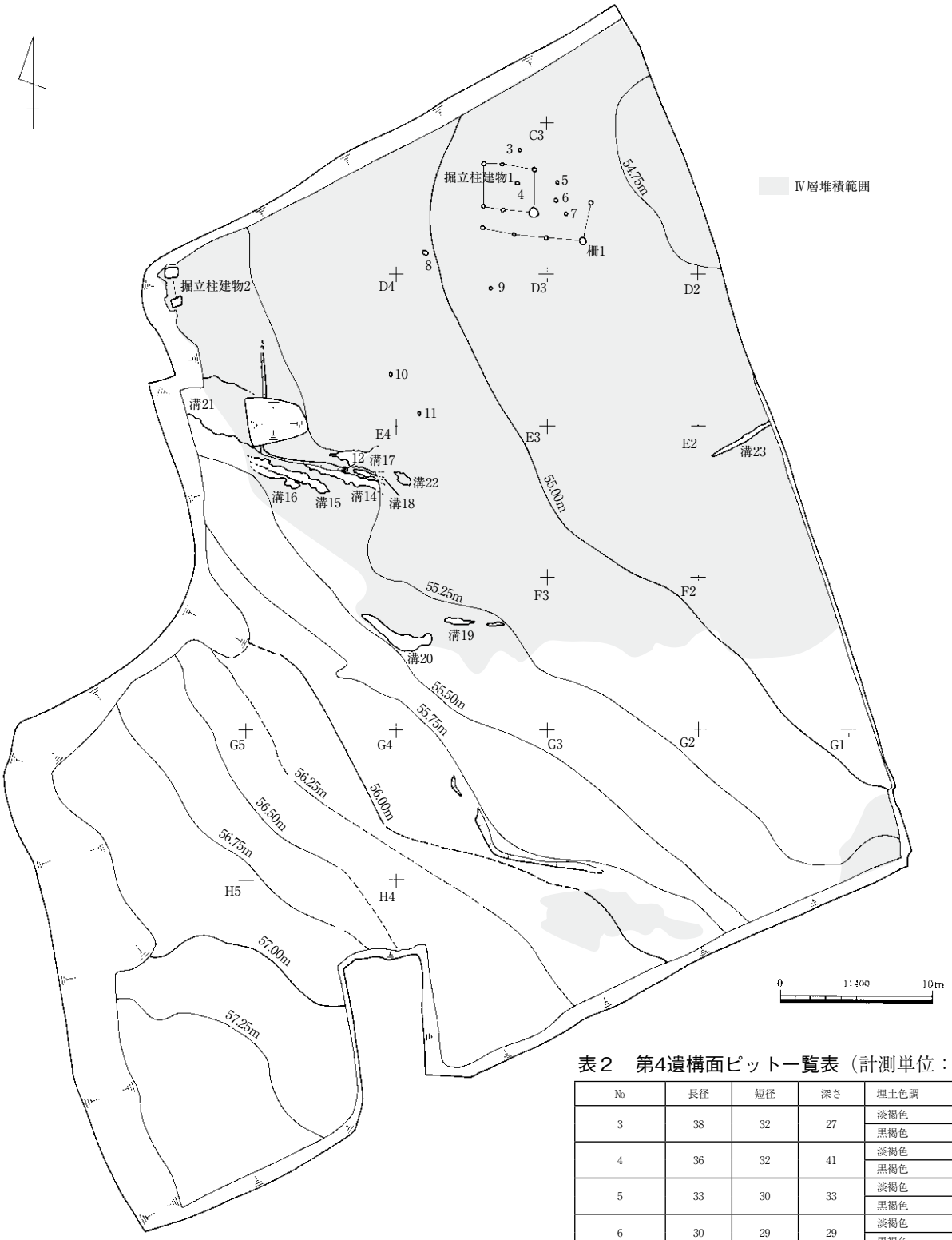


第46図　遺構外出土遺物

Ｆ 14 ～Ｆ 20 は鍛造鉄製品である。Ｆ 14 ～Ｆ 16 は棒状鉄製品で、いずれも両端が欠損している。断面方形の細長い形態を呈しており、Ｆ 15･Ｆ 16 は一端が屈曲している。Ｆ 17 も両端とも欠損するが、下端に向かって細くなるため釘と思われる。Ｆ 18 は刀子の刃部片、Ｆ 19 は鉈の刃部片である。Ｆ 20 は断面方形の細い棒を折り曲げて細長い環状にしたもの。Ｆ 21 ～Ｆ 23 は鋳造鉄製品で、Ｆ 21・Ｆ 22 は鉄鍋の口縁部片、Ｆ 23 は鉄鍋の体部片と考えられる。Ｆ 24 ～Ｆ 27 は鉄滓で、いずれも鍛冶滓と考えられる。（野口）

第５節　第４遺構面の調査

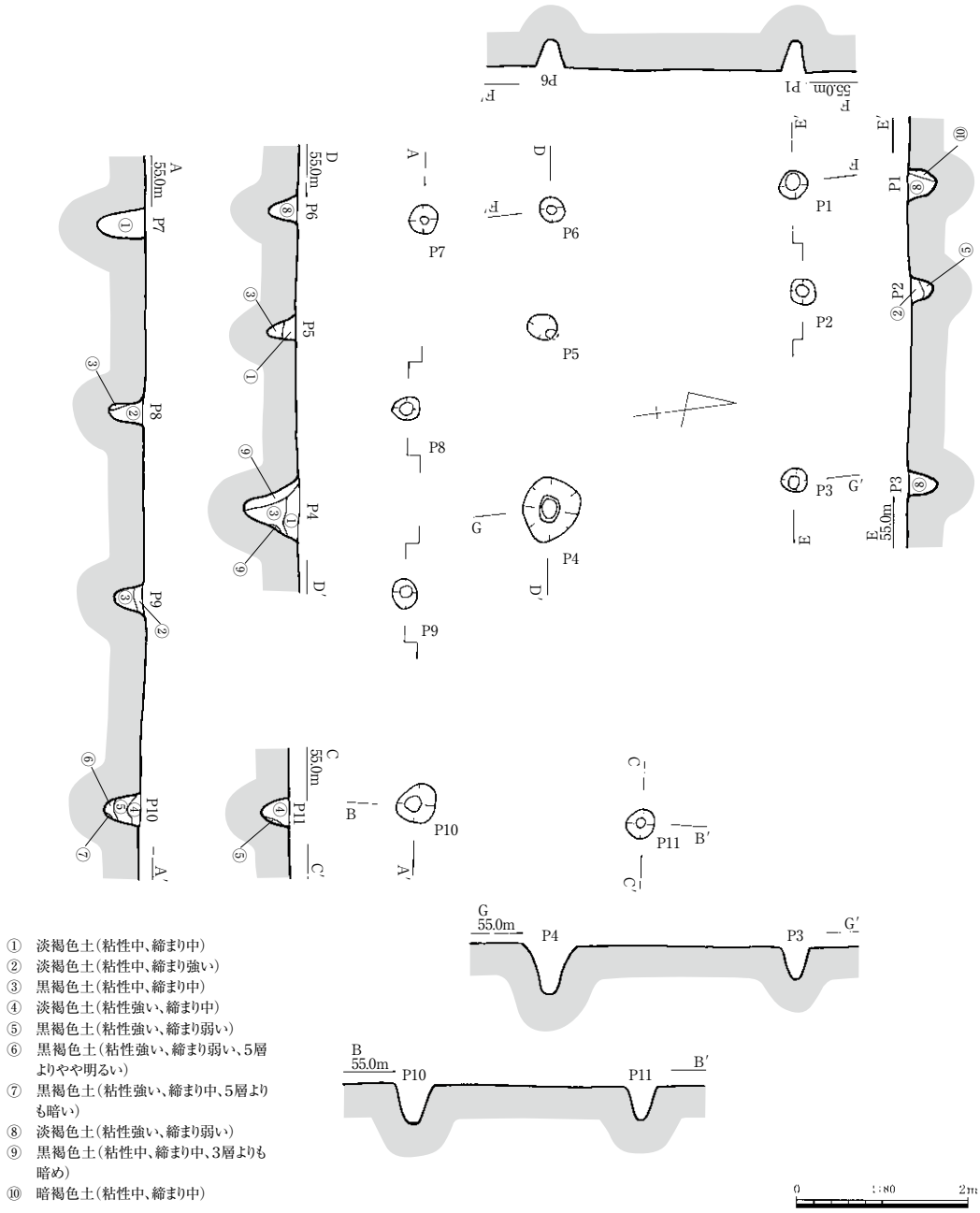
調査区北東側に堆積する黒色土（Ⅳ層）上面を検出面とする。現況範囲での高低差は、東西でおよそ 75cm と西から東に向かい、なだらかに傾斜した地形である。本土層上面では掘立柱建物、溝等の



第47図　４区第４遺構面遺構配置図

表２　第4遺構面ピット一覧表（計測単位：cm）

No.	長径	短径	深さ	埋土色調
3	38	32	27	淡褐色
				黒褐色
4	36	32	41	淡褐色
				黒褐色
5	33	30	33	淡褐色
				黒褐色
6	30	29	29	淡褐色
				黒褐色
7	49	42	34	淡褐色
8	43	35	11	淡褐色
9	22	20	5	淡褐色
10	27	23	28	淡褐色
11	28	26	67	淡褐色
12	28	27	18	灰褐色



第48図　掘立柱建物１・柵１

表３　掘立柱建物１柱間距離（心々）

ピット	距離（m）
P１－P２	1.28
P２－P３	2.2
P３－P４	2.74
P４－P５	2.0
P５－P６	1.44
P６－P1	2.74
P７－P８	2.2
P８－P９	2.12
P９－P10	2.48
P10－P11	2.68

遺構が確認されるほか、本土層上面を主に上層に位置する暗褐色土（Ⅲ層）を埋土にもつ耕作痕が認められた。　（野口）

掘立柱建物1・柵1（第 48 図、表3、図版5）

調査区北東側、Ｃ３グリッドに位置する桁行２間、梁行１間の掘立柱建物で、主軸をＮ－ 80°－Ｗにする。規模は、桁行 3.5 m、梁行 2.88 mである。桁行、梁行の柱穴間は表３のとおりで、桁側の中央の柱穴は西側に寄る。柱穴掘り方の形状は、平面円形で、30cm程度の大きさであるが、Ｐ 10 は 50 cm程度と他に比べ大きい。深さは柱穴底面の標高を 54.5 m程

度に揃えるものが多いが、Ｐ７のみ 54.3 ｍと深く掘られる。埋土は粘性や締り具合に違いは見られるものの、主に淡褐色土・黒褐色土が堆積する。

また、本遺構の南側及び東側には柵列と思われるピットが並ぶ。柱間の距離は表３のとおりである。

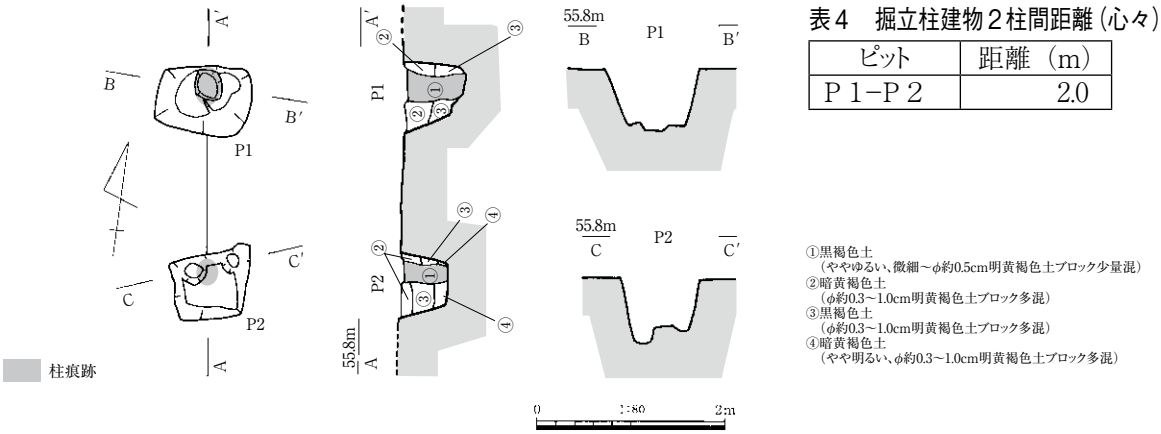
本遺構からは遺物の出土はみられなかった。時期は確認されるⅣ層の年代が 11 ～ 12 世紀ころと考えられること、本遺構を覆うⅢ層が室町時代後半の時期であることから、平安時代後半から室町時代後半までの時期が考えられる。（野口）

掘立柱建物2（第 49 ～ 51 図、表4、図版5）

Ｃ・Ｄ５グリッド、調査区西壁際に位置する。Ⅲ層除去後、Ⅳ層上面において平面方形の柱穴２基を検出した。両柱穴は近接した位置関係にあり、規模、埋土が近似する。また、調査区内の同一面に検出した柱穴には、本遺構と同規模かつ、同様の埋土をもつものはみつかっていない。このことから、両ピットは同一の遺構であると想定している。柵列、掘立柱建物などの一部である可能性が考えられるが、ピットの規模から判断し掘立柱建物の可能性が高いと思われる。Ｐ１－２の主軸は７°西偏し、柱間寸法は 2.0 ｍである。Ｐ２から南に 4.5 ｍには、同一面に検出した溝 14 が存在する。

Ｐ１の検出面での規模は長軸約 1.0 ｍ、短軸 72㎝を測る。検出面からの深さは 67㎝を測り、底面の標高は 54.69 ｍである。土層断面には径 27㎝の柱痕跡が認められ、底面には柱のあたりが存在する。柱のあたりの底面は、長軸 29㎝、短軸 20㎝を測る。底面の平面形は不整な楕円形を呈し、東側はテラス状にわずかに窪む。Ｐ２の検出面での規模は長軸 79㎝、短軸 68㎝を測る。検出面からの深さは 51㎝を測り、底面の標高は 54.88 ｍである。土層断面には径 20㎝の柱痕跡が認められる。両ピットとも柱掘り方埋土には明黄褐色土ブロックが多量に混入する。

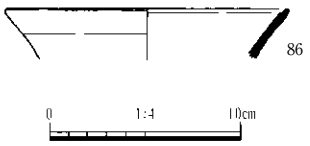
なお、Ｐ２底面北東隅と北西隅にピットを検出した。Ｐ２が重複し建替えが行われた可能性、Ｐ２より先行する遺構を切り込んだ可能性が考えられるが、土層断面の観察からは判断できなかった。



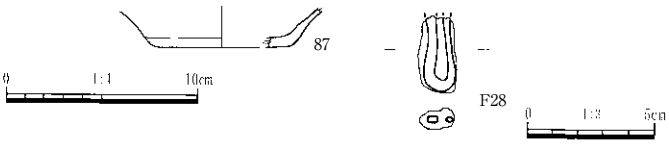
第49図　掘立柱建物２

表４　掘立柱建物２柱間距離（心々）

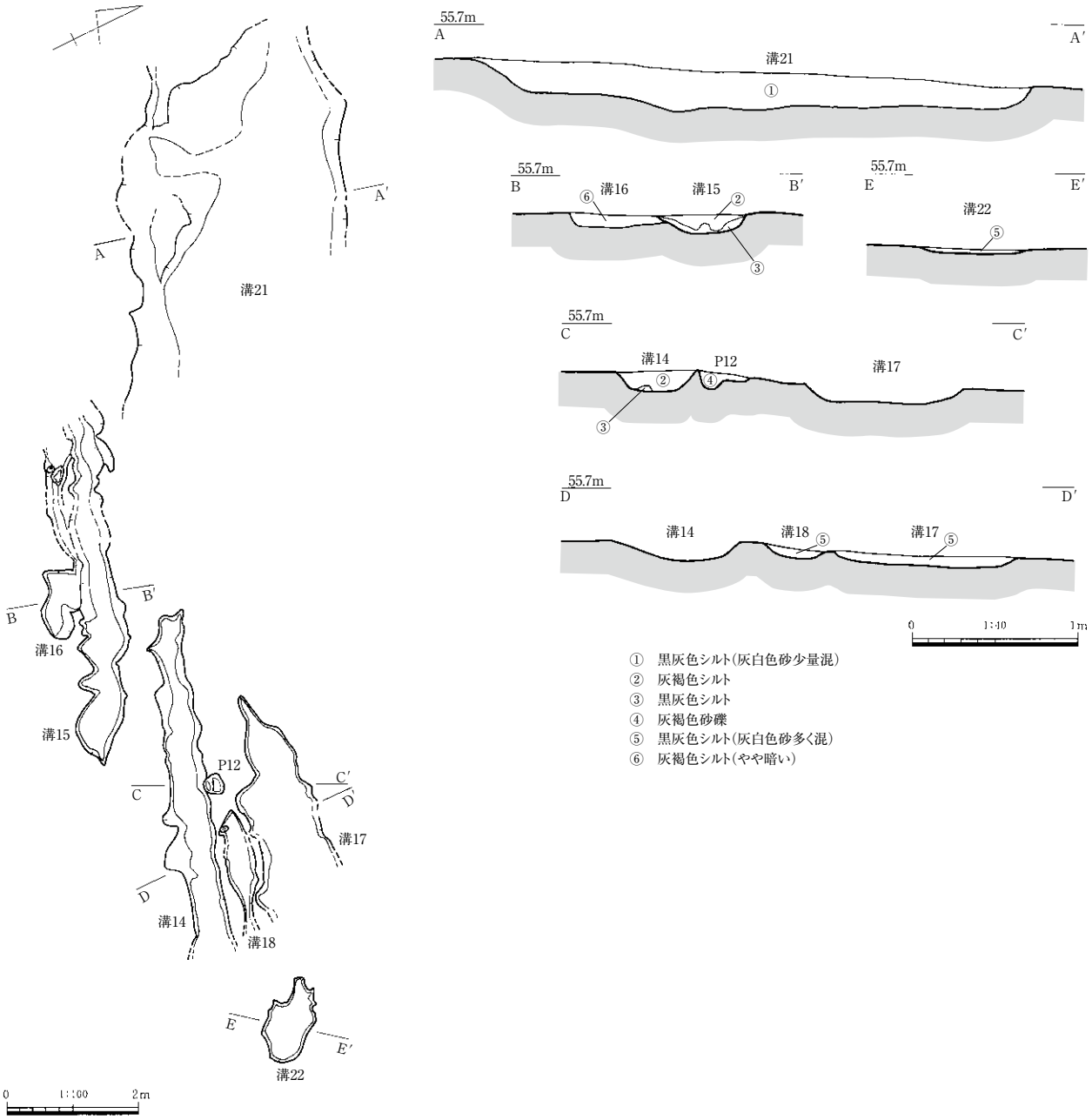
ピット	距離（m）
Ｐ1−Ｐ2	2.0



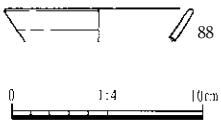
第50図　掘立柱建物２Ｐ２柱痕跡出土遺物



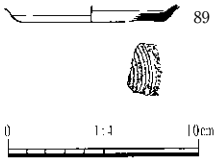
第51図　掘立柱建物２出土遺物



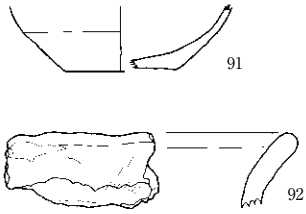
第52図　溝14～18・21・22・P12

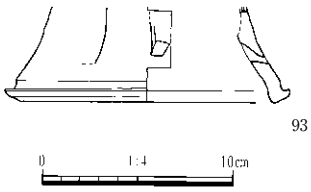


第53図　溝15出土遺物



第54図　溝17出土遺物





第55図　溝21出土遺物

出土遺物は土器及び鉄器が出土している。86は須恵器坏であり、Ｐ２柱痕跡(①層)より出土している。土師器坏87はＰ１出土、不明鉄製品Ｆ28はＰ２出土である。

本遺構の時期は出土遺物の年代観とは異なるものの、検出した遺構面より11世紀以降に掘削されたものと考えられる。

（森本）

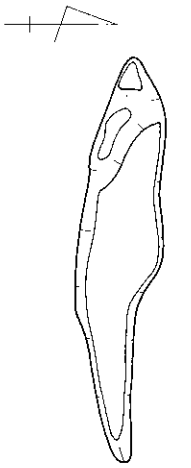
溝 14 ～ 18・21・22・P 12（第 52 ～ 55 図、図版5・6）

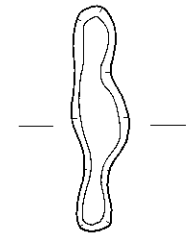
Ｄ５・Ｅ３～５グリッドに位置する。Ⅲ層除去後、Ⅳ層上面において６条の溝を検出した。いずれの溝も主軸は南東－北西方向にとり、検出面からの深さが浅く遺構の遺存状態は悪い。これらの溝は主軸がほぼ同じであり、埋土も近似することから、本来は同一遺構であったものが削平され部分的に残存したものと想定している。

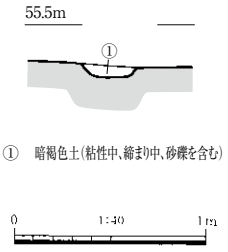
本遺構は西側が調査区外に延び全長は不明であるが、検出した長さは 15.6 ｍである。検出面での幅は 0.13 ～ 3.42 ｍ、検出面からの深さは西端 18㎝、東端４㎝である。底面の標高は西端 55.37 ｍ、東端 55.22 ｍであり、東西の比高差は 15㎝である。断面形は浅い皿状を呈す。埋土は黒褐色シルトが主体をなし、灰白色砂または小礫が多く混入する。埋土の堆積状況から判断して、溝内は流水の環境下におかれていた可能性が高い。

出土遺物には 88・89・91 ～ 93 がみられる。88 は青磁の碗で、溝 15 より出土している。須恵器坏 89 は溝 17 から出土し、底部外面には回転糸切りによる切り離し痕跡が認められる。91 ～ 93 は溝 21 からの出土遺物である。91 は土師器坏、92 は土師器甕である。弥生土器 93 は透しをもつ脚部片である。

本遺構の時期は出土遺物から判断し､13 世紀ころと思われる。　（森本）







第56図　溝19

溝 19（第 56 図、図版6）

Ｆ３グリッドで確認された東西方向に走向する溝状遺構である。溝 19 はその上部が室町時代後半の耕作による削平を受けるため、中央部分が途切れた状態で確認されるなど、遺存状況は良くない。確認できた範囲では、長さ 4.0 ｍ、幅 14 ～ 43㎝、深さは最深部で９㎝を測り、底面の高さは東西とも標高約 55.2 ｍと水平である。埋土には砂礫を含んだ暗褐色土が堆積する。

また、溝 19 を西側に延長させたＥ４・Ｆ４グリッドには溝 36 が存する。溝 36 の東側部分はⅣ層除去後に確認したこと、西側部分においても溝 19 とは確認される土層が異なることから、確認面を異にする遺構として扱った。しかし、埋土に暗褐色土が堆積していることや、砂礫が含まれるなどの共通性もあることを勘案すると、Ⅳ層上面での確認漏れで、本来は同一の遺構であった可能性が高い。

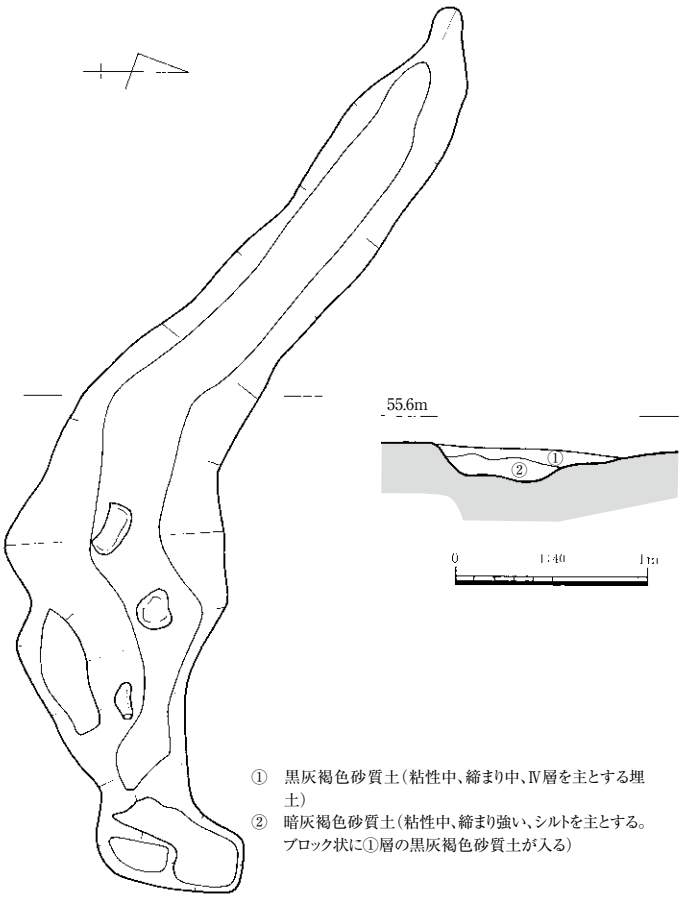
本遺構の時期は、確認される層位より、平安時代後半ころと考えられる。　（野口）

溝 20（第 57・58 図、図版6）

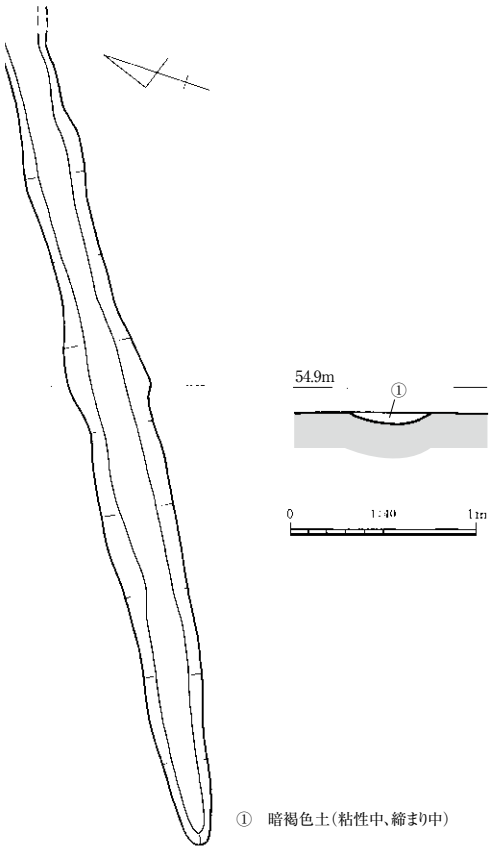
Ｆ３・４グリッドで確認された溝である。走向は西半部では北西－南東方向に伸び、東半部では東西方向に屈曲する。確認された範囲では、長さ約 4.9 ｍ、約最大幅 1.2 ｍ、深さ 10㎝を測り、底面の高さの標高は西側で約 55.4 ｍ、東側で約 55.3 ｍと西から東に向かいわずかに傾斜する。

埋土は２層に分けられ、下層にシルトを主体とする暗灰褐色砂質土、上層に確認面であるⅣ層が由来すると思われる黒灰褐色砂質土が堆積する。また、南側側面から底面にかけて S23 など礫が３点認められた。

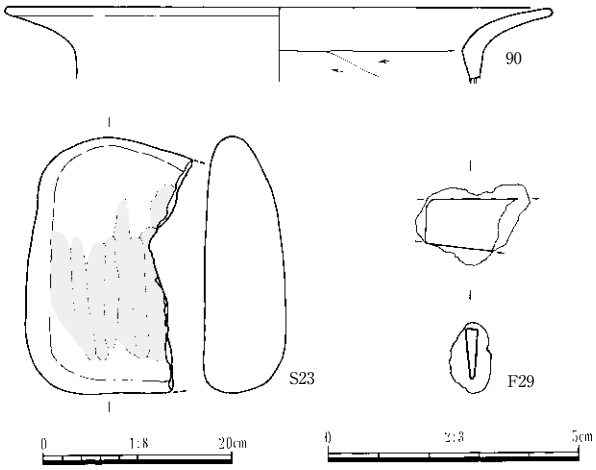
出土遺物には、土師器甕 90、台石Ｓ 23 のほか鉄製品の刀Ｆ 29 が見られる。



第57図　溝20



第59図　溝23



第58図　溝20出土遺物

本遺構の時期は、出土遺物からは詳らかにできないが、遺構が確認される層位から平安時代後半ころと考えられる。また溝 20 も先述の溝 19 同様、その延長上に溝 36 が位置するが、埋土の特徴からは別遺構と判断される。（野口）

溝 23（第 59 図、図版6）

調査区東側、Ｅ１グリッド北西隅で確認した溝で、東側では調査区外に展開する。走向は南西－北東方向である。規模は、長さ 4.5 m、幅 26 ～ 42cm、深さ６cmを測る。遺構底面両端の比高差は、標高が南西端で 54.76 m、北東端で 54.69 mとわずかに北東側に向かい傾斜する。埋土は暗褐色土が堆積する。

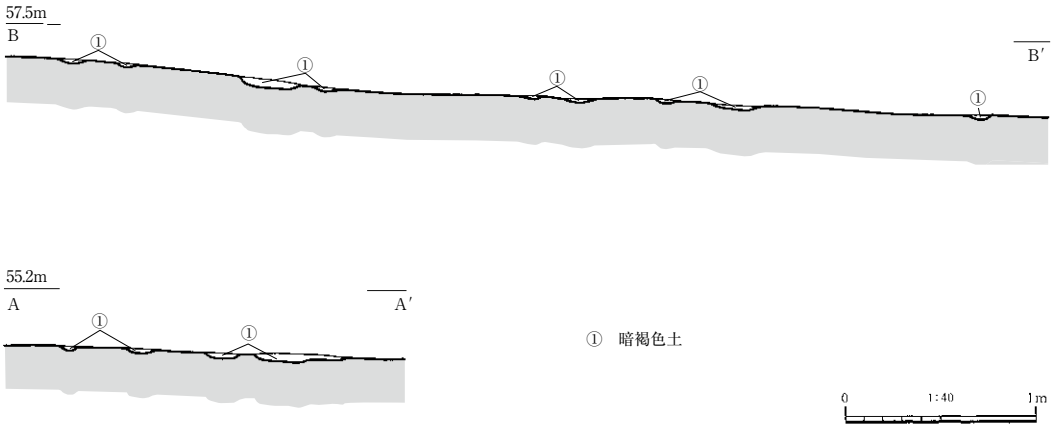
出土遺物は見られないが、遺構が確認面される層位から平安時代後半ころの時期が考えられる。

（野口）

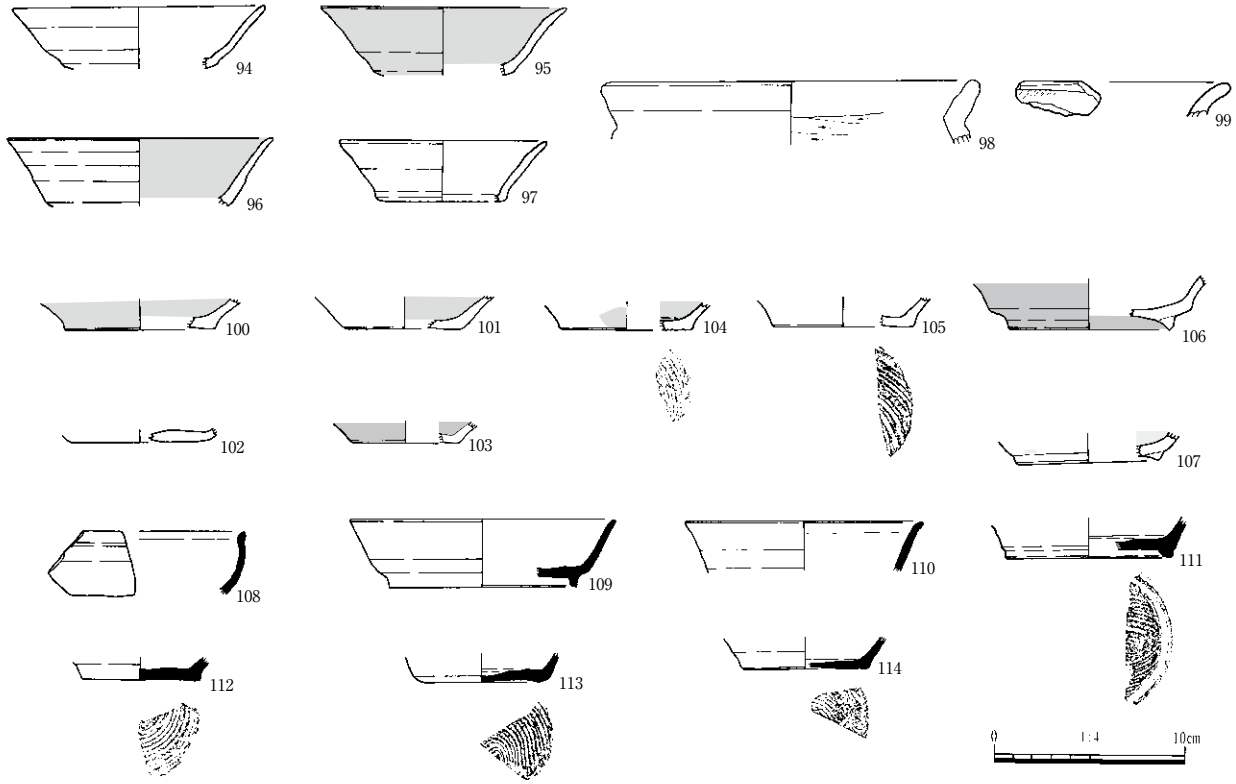
中世耕作痕（第 60 ～ 62 図、巻頭図版2）

４区では、近世耕作痕が確認されたⅢ層除去後にも耕作痕が確認された。近世耕作痕同様、調査区

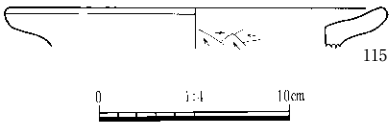
第60図　中世耕作痕



第61図　中世耕作痕土層断面図



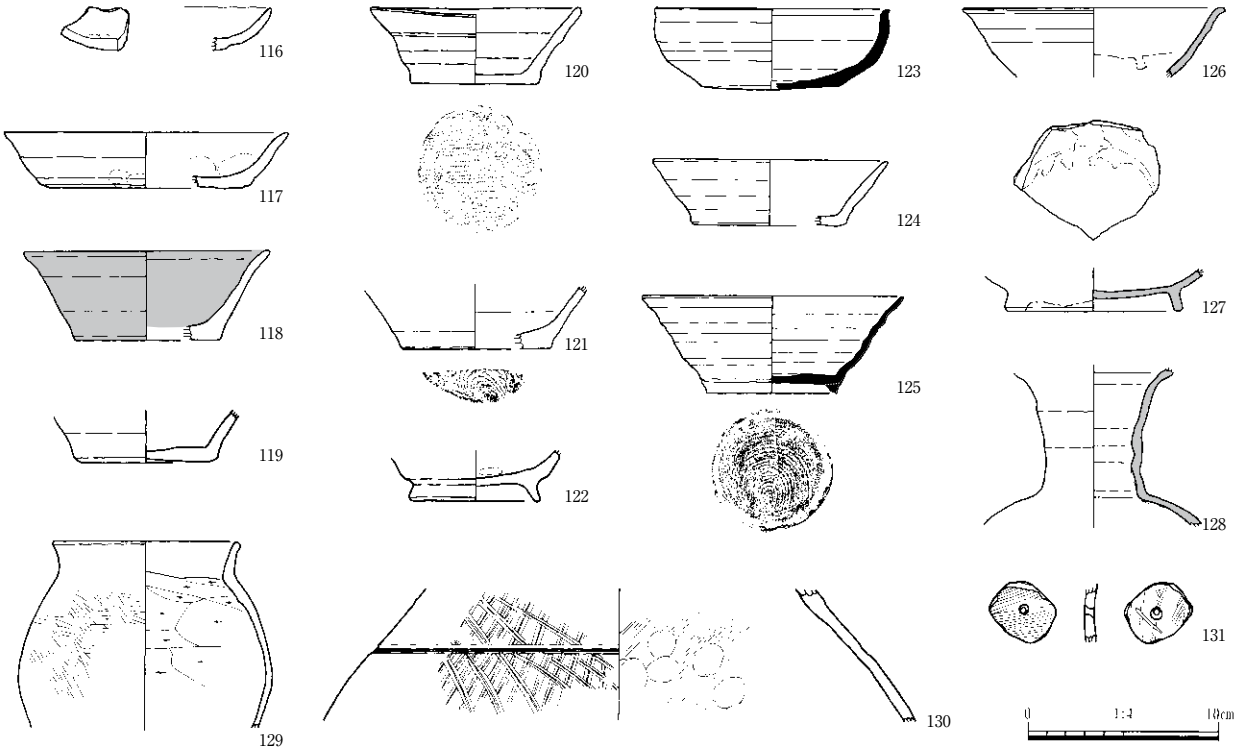
第62図　中世耕作痕出土遺物



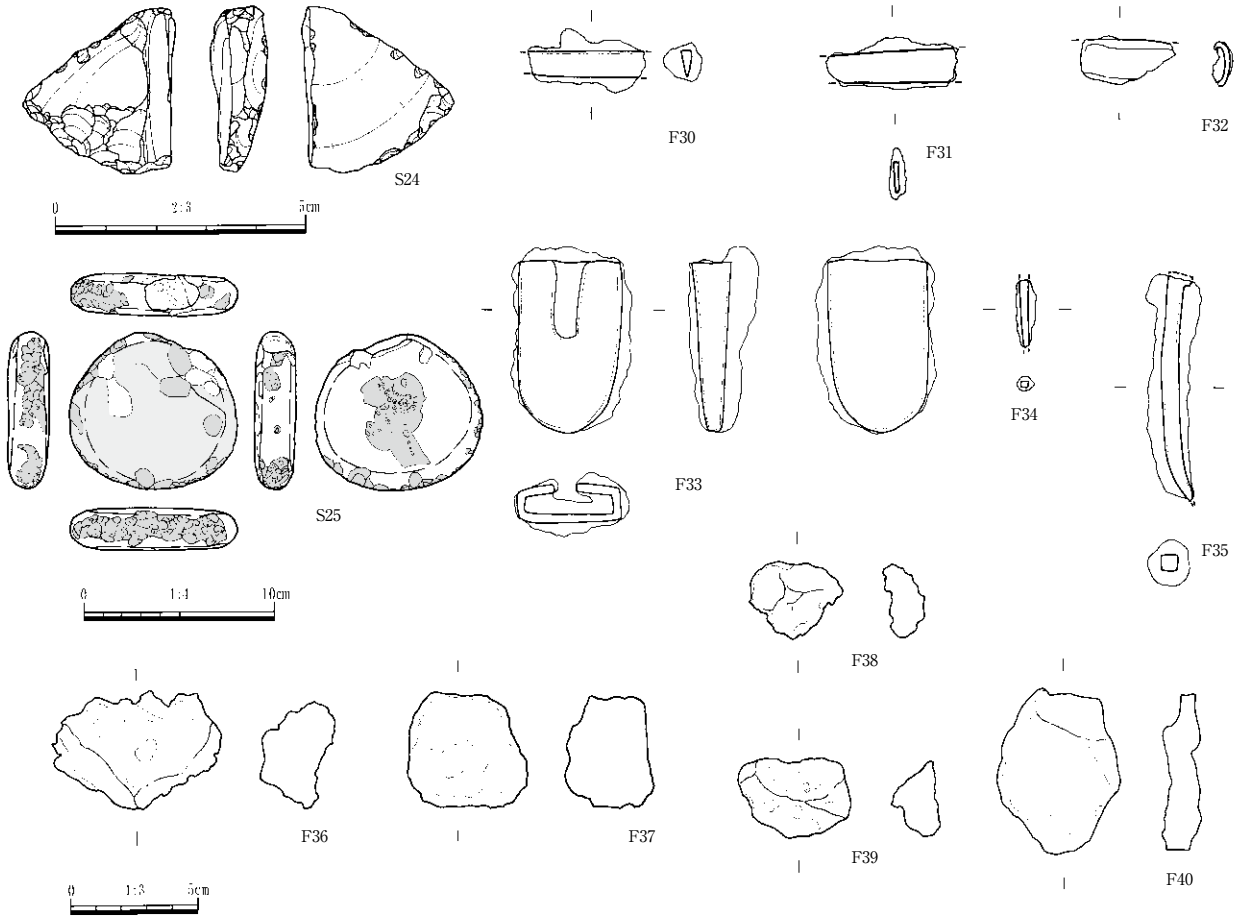
第63図　Ｐ３出土遺物

のほぼ全域に点在する。検出状況も近世耕作痕同様、平行した幾条もの細い溝として認められるが、そのほかに平面円形、楕円形、不整形などもみられる。また、幅 10 ～ 50cmのものが大半で、長さも 0.1 ～ 5.3 m、深さ１～ 19cmと浅いものであることも同様である。埋土は直上層である第３遺構面を形成する暗褐色土（Ⅲ層）を埋土とすることから、暗褐色土（Ⅲ層）が耕作土として形成された段階での耕作痕と考えられる。

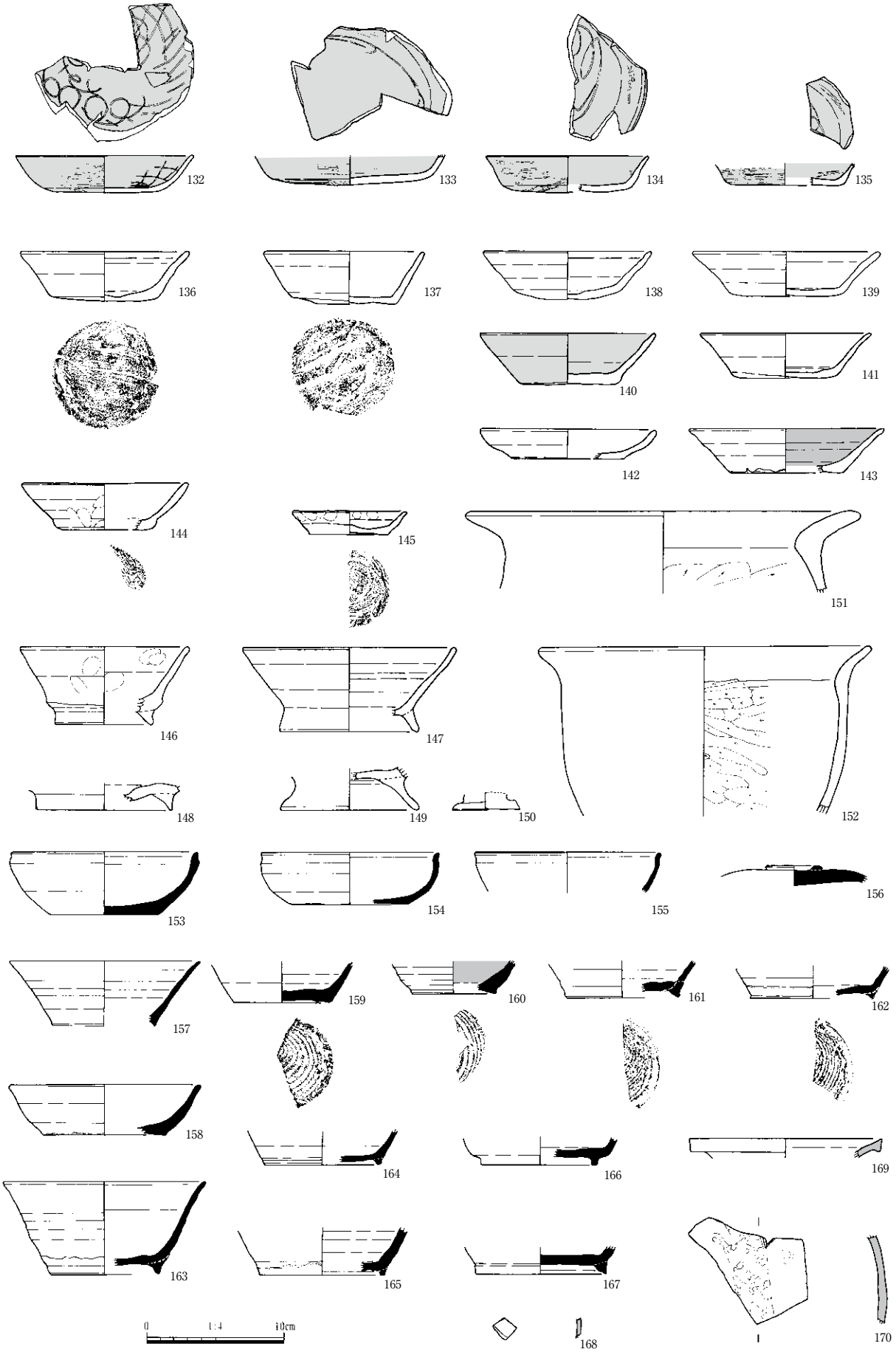
第４遺構面で確認された耕作痕の走向は、近世耕作痕同様、検出面の等高線にほぼ平行するものがみられるが、近世耕作痕に比べまとまりが無く、南東－北西方向を向くもの、東西方向を向くもの、弧状に展開するものなど認められ、耕作痕が直交する箇所もある。隣接する耕作痕の方向の違いが何に起因するかは、等高線を反映したもの以外では、切り合い関係も無く、埋土も同一であることから、



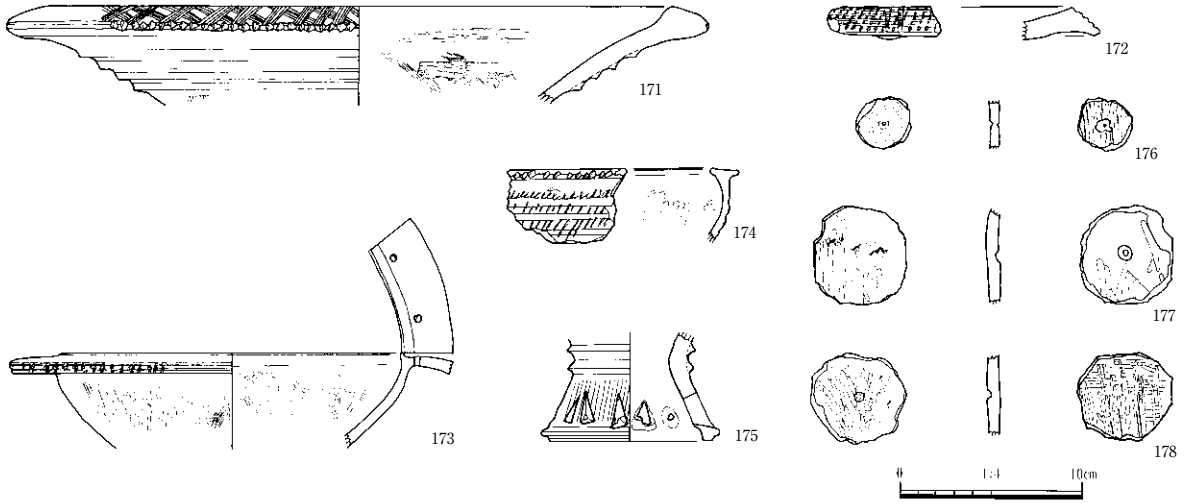
第64図　遺構外出土遺物



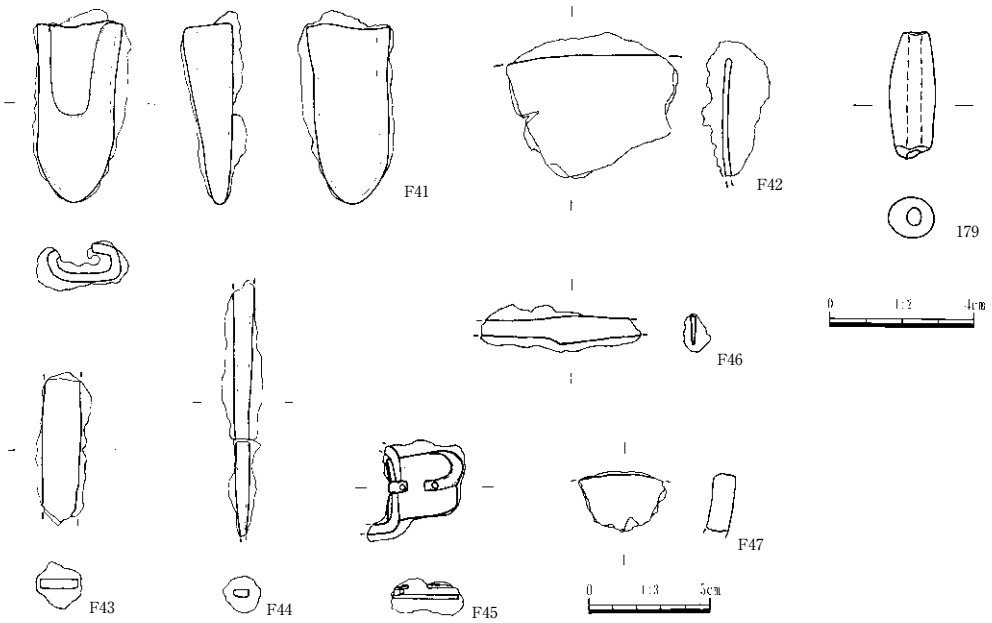
第65図　遺構外出土遺物



第66図　遺構外出土遺物



第67図　遺構外出土遺物



第68図　遺構外出土遺物

時期差等の他の要因を明らかにすることはできなかった。

中世耕作痕の成因であるが、耕作痕１の項で述べたように、幅狭で、浅く、上層に耕作痕埋土と同一の耕作土が上層に堆積する中世耕作痕も畝間痕であった可能性がある。

本耕作痕は、上層に堆積する耕作土内の包含遺物に隣接する５区で、15 世紀後半から 16 世紀ころのものと思われる青磁が出土することから、室町時代後半ころと思われる。

また茶畑六反田遺跡では、０・１区において同時代の耕作痕が確認されていることから、室町時代後半、茶畑六反田遺跡では、耕作地として畠が営まれていたようである。（野口）

遺構外出土遺物（第 64 ～ 68 図）

本遺構面を形成する黒色土の包含遺物には、第 64 図にみられるように奈良・平安時代を中心とした古代の土器が出土した。また本地層は 17 年度調査において、後述するⅤ層とその判別をつけられずに一部掘り下げていることから、ここではⅣ層、Ⅴ層合わせて掘り下げてしまった箇所から出土した遺物も別けて第66～68図に掲載した。（野口）

第６節　第５遺構面の調査

調査区北東側に堆積する黒色土（Ⅴ層）上面を検出面とする。本土層上面では掘立柱建物、土坑、溝、柵、波板状凹凸等の遺構が確認される。本遺構面は 17 年度調査において、その中途までその認識を

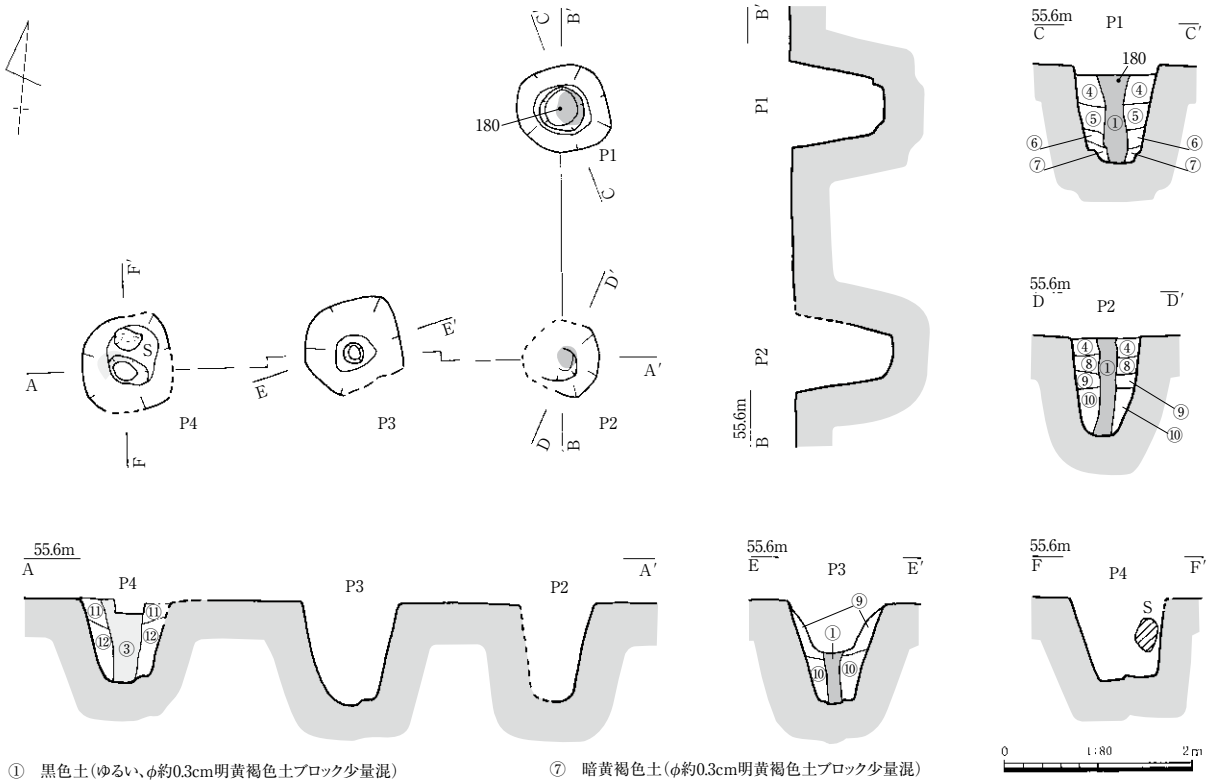
第69図　４区第５遺構面遺構配置図

することはできなかったが、調査区北側に位置する波板状凹凸を確認したことにより、調査を開始した。このためＣ２・３、Ｄ２・３グリッドではその大半を上層に位置するⅣ層と合わせて掘り下げており、上記グリッド内に関してはこの遺構面での遺構がさらに存在した可能性がある。

また本土層では、黄褐色土のブロックを含んだ整地層が調査区北側の一部で認められる。この整地層は包含する遺物から10世紀ころであると思われるが、本層上面では長軸100cmを超える大きな柱穴を持つ掘立柱建物や、柵などの遺構が確認された。（野口）

掘立柱建物3（第70～72図、表5、図版6）

Ｃ４・５グリッドに位置する。Ⅳ層除去後、整地層上面において検出した。北側は調査区外となる。南側は、同一面において検出した掘立柱建物４とほぼ接する。Ｐ１はＰ14・15を破壊し、Ｐ３南側上部は土坑６により破壊される。桁行１間以上（2.6ｍ以上）、梁行２間（4.6ｍ）の南北棟であり、主軸は1°東偏する。柱掘り方は平面形が隅丸方形状を呈し、検出面での規模は長軸が96～105cm、短軸90～94cmを測る。深さは87～109cmを測り、Ｐ１～４の底面の標高は54.06～54.30ｍである。Ｐ１・３・４には柱のあたりと思われる痕跡が認められる。柱間寸法は桁行が2.6ｍ、梁行が2.2～2.4ｍである。Ｐ１～３の土層断面では径20cm程度の柱痕跡が観察される。Ｐ４③層は柱抜取り痕跡と思われる。Ｐ４柱掘り方埋土からは、長軸39cm、短軸29cm、厚さ20cmの礫が出土している。礫の外面の一部には僅かな窪みが数カ所みられる。工具痕跡の可能性も考えられるが、表面の風化が著



① 黒色土（ゆるい、φ約0.3cm明黄褐色土ブロック少量混）
② 黒色土（ゆるい、微細な明黄褐色土ブロック・微細な焼土ブロック少量混）
③ 黒色土（ゆるい、φ約0.3～1.5cm明黄褐色土ブロック・φ約0.5cm炭化物混）
④ にぶい黒黄褐色土（φ約0.3～0.5cm明黄褐色土ブロック・φ約0.5cm炭化物混）
⑤ にぶい黒黄褐色土（やや暗い、φ約0.3～0.5cm明黄褐色土ブロック・φ約0.5cm炭化物混）
⑥ 黒色土（φ約0.3cm明黄褐色土ブロック・φ約0.3cm炭化物少量混）
⑦ 暗黄褐色土（φ約0.3cm明黄褐色土ブロック少量混）
⑧ 黒色土（やや淡い、φ約0.3～1.0cm明黄褐色土ブロック多混）
⑨ にぶい黒黄褐色土（φ約0.3～1.0cm明黄褐色土ブロック多混）
⑩ 黒色土（φ約0.3～1.0cm明黄褐色土ブロック多混）
⑪ にぶい黒黄褐色土（φ約0.5cm明黄褐色土ブロック多混・φ約0.5cm炭化物混）
⑫ 黒色土（φ約0.5～1.0cm明黄褐色土ブロック多混・φ約0.5cm炭化物混）

柱痕跡
柱抜取り痕跡

第70図　掘立柱建物３

しく判断できない。なお、柱穴の土層断面を観察した結果、建替えの痕跡は認められない。

表５　掘立柱建物３柱間距離（心々）

ピット	距離（m）
Ｐ１－Ｐ２	2.6
Ｐ２－Ｐ３	2.2
Ｐ３－Ｐ４	2.4

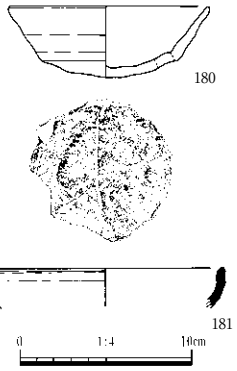
柱穴内より 180 ～ 192、Ｆ 48・49 の土器と鉄関連遺物が出土している。土師器坏 180 はＰ１柱痕跡（①層）、須恵器坏 181 はＰ４抜取り痕跡（③層）出土である。180 は底部が押圧され、内外面ともに黒斑がみとめられる。土師器坏 183 はＰ４柱掘り方埋土より出土し、底部外面に回転糸切りによる切り離し痕跡がみられる。Ｐ４出土 189 は須恵器坏、Ｐ２出土 190 は灰釉陶器の高台坏である。土師器坏 186 はＰ１柱掘り方埋土より出土し、内外面ミガキの痕跡が著しく、赤色塗彩が施されている。Ｆ 48 は雁又鏃である。鏃身先端は二股に分かれ、内側に刃がついている。

本遺構の時期は出土遺物から判断して、10 世紀後半以降と思われる。（森本）

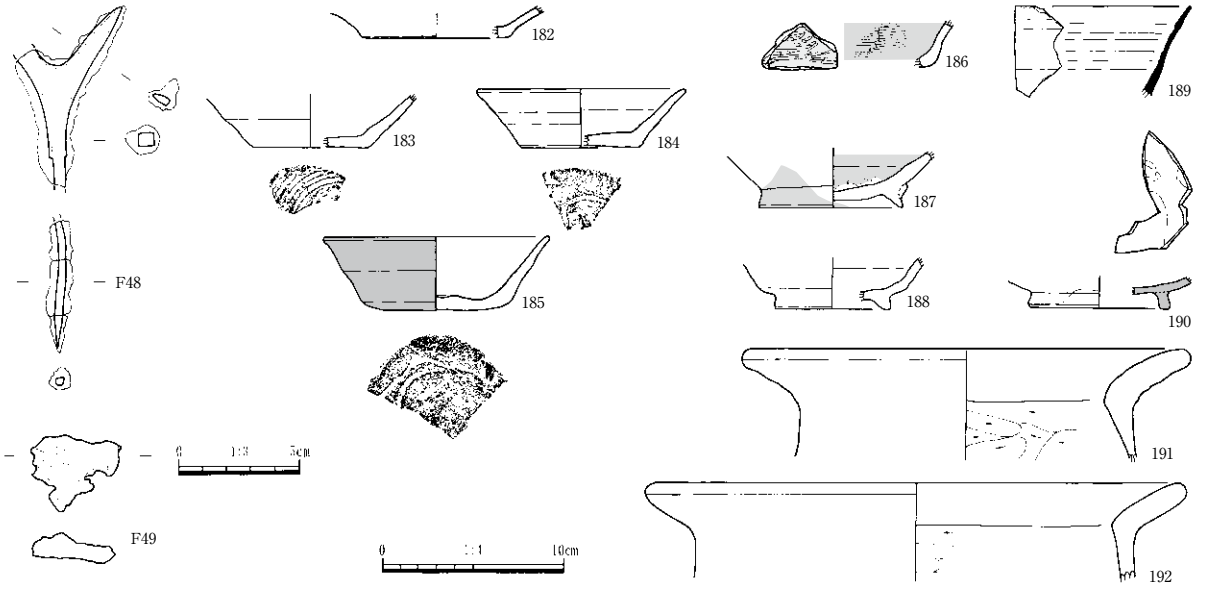
掘立柱建物4（第 73・74 図、表6）

Ｄ４・５グリッドに位置する。Ⅳ層除去後、Ｐ７・８は整地層上面、Ｐ１・２はⅤ層、Ｐ３～６はⅥ層において検出した。西側は調査区外となり未検出である。北側は、同一面において検出した掘立柱建物３とほぼ接する。桁行４間（11.2 m）以上、梁行１間以上（5.0 m以上）の東西棟であり、主軸は５°西偏する。柱掘り方は平面円形を呈し、検出面での規模は長軸が 46 ～ 70cm、短軸 49 ～ 61cm を測る。深さは 27 ～ 56cmを測り、Ｐ２～８の底面の標高は 54.49 ～ 54.77 mである。桁筋の柱間寸法は建物中央部が概ね 2.6 ～ 2.7 mであるのに対し、Ｐ１－２は 2.9 m、Ｐ５－６は 3.0 mでありやや長い。Ｐ２～４、７の土層断面では径 13 ～ 20cm程度の柱痕跡が観察される。なお、柱穴の土層断面を観察した結果、建替えの痕跡は認められない。

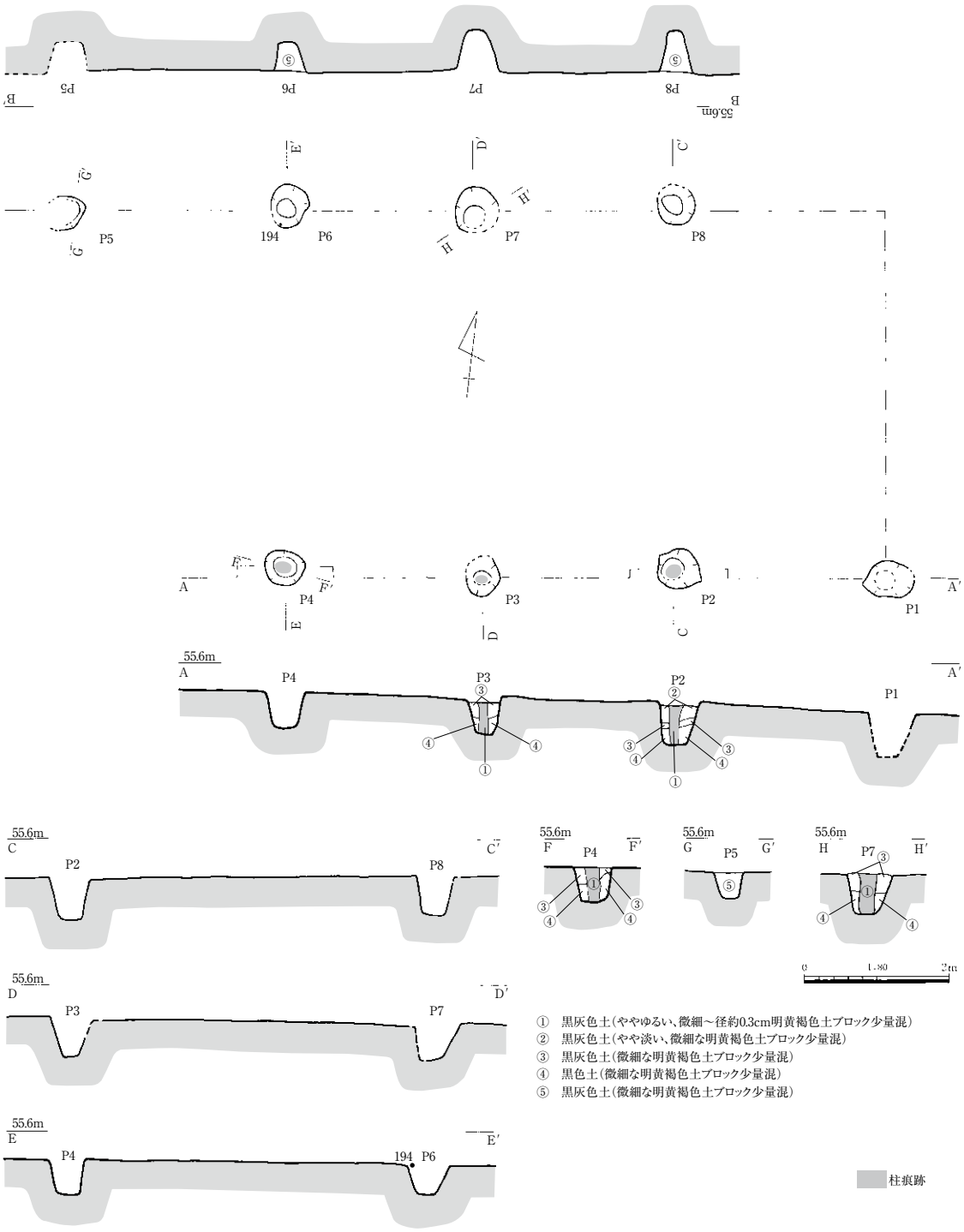
出土遺物には土師器 193 ～ 196、刀子Ｆ 50 がみられる。高台坏 194 はＰ６上面より出土し、底部押圧技法により調整されている。Ｆ 50 はＰ３より出土した。細身の刀子刃部片と思われる。本遺構の時期は出土遺物から判断して、10 世紀後半以降と思われる。（森本）



第71図
掘立柱建物３出土遺物



第72図　掘立柱建物３出土遺物



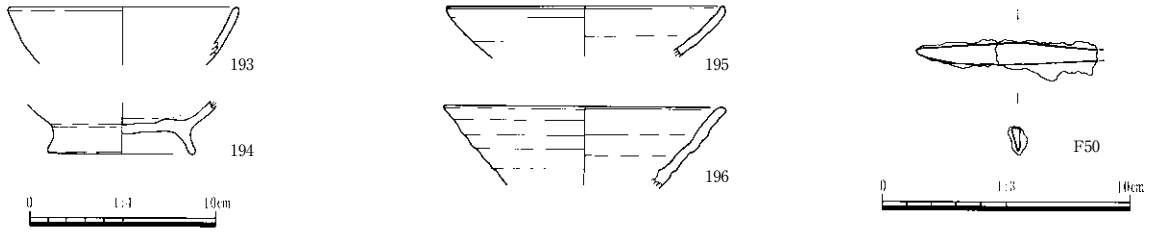
第73図　掘立柱建物４

表６　掘立柱建物４柱間距離（心々）

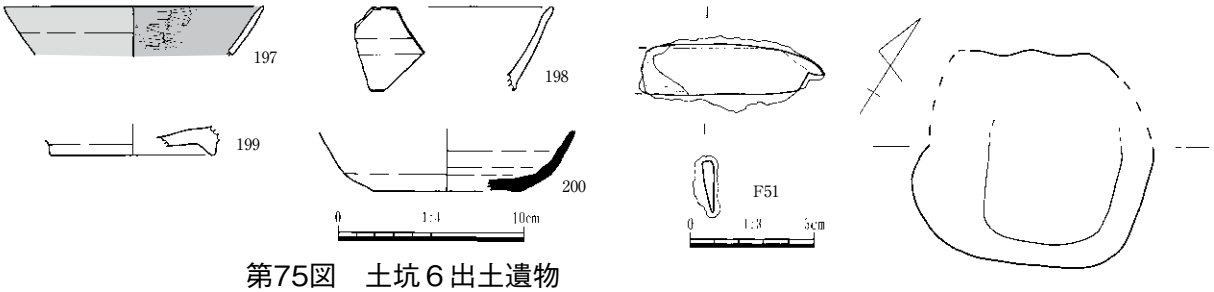
ピット	距離（m）
Ｐ１－Ｐ２	2.9
Ｐ２－Ｐ３	2.6
Ｐ３－Ｐ４	2.7
Ｐ５－Ｐ６	3.0
Ｐ６－Ｐ７	2.6
Ｐ７－Ｐ８	2.7
Ｐ２－Ｐ８	5.0
Ｐ３－Ｐ７	5.0
Ｐ４－Ｐ６	5.0

土坑6（第 75・76 図、図版7）

Ｃ４グリッドに位置する。Ⅳ層除去後、整地層上面において検出した。同一面に検出した掘立柱建物３Ｐ３南側上部を破壊する。検出面の平面形は不整な隅丸方形状を呈す。検出面での規模は長軸 1.2 m、短軸残存 1.1 m、検出面からの深さは 34cmを測る。断面形は逆台形状を呈し、



第74図　掘立柱建物４出土遺物



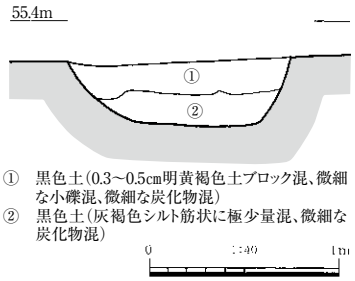
第75図　土坑６出土遺物

底面の規模は長軸 71cm、短軸残存 51cmである。埋土は２層に分層でき、黒色土が主体をなす。

埋土中より、197 ～ 200、Ｆ 51 の土器及び鉄器が出土している。土師器坏 197 は外面に赤色塗彩を施し、内面は黒色処理を施しミガキ調整の痕跡が著しい。199 は土師器高台坏、200 は須恵器坏である。Ｆ 51 は鎌の破片と思われる。一部に木質が付着している。

本遺構の時期は出土遺物から判断して、10 世紀後半以降と思われる。

（森本）



第76図　土坑６

Ｐ 20（第 77 図）

Ｃ４グリッドに位置する。Ⅳ層除去後、整地層上面において検出した。平面円形を呈し、検出面での規模は長軸 56cmを測る。検出面からの深さは 58cmを測り、底面の標高は 54.54 ｍである。断面形は逆台形状を呈す。土層断面を観察した結果、14cm程度の柱痕跡が認められる。

土師器坏 201 は柱痕跡（①層）より出土した。内外面とも回転ナデ調整されている。

本本遺構の時期は出土遺物から判断して、10 世紀後半以降と思われる。（森本）

Ｐ 24（第 78 図）

Ｄ４グリッドに位置する。Ⅳ層除去後、整地層上面において検出した。平面楕円形を呈し、検出面での規模は長軸 59cm、短軸 50cmを測る。検出面からの深さは 49cmを測り、底面の標高は 54.61 ｍである。断面形は逆台形状を呈す。土層断面を観察した結果、20cm程度の柱痕跡が認められる。

土師器坏 203 は柱掘り方埋土より出土した。内外面とも回転ナデ調整されている。

本遺構の時期は出土遺物から判断して、10 世紀後半以降と思われる。（森本）

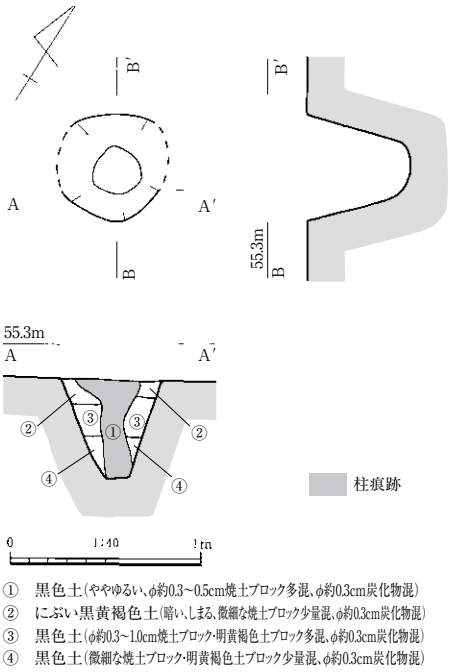
整地層上面検出ピット出土遺物（第 79 図）

土師器坏 202 はＰ 13、土師器高台坏 204 はＰ 18 より出土した。202 は内外面ナデ調整され、外面に黒色処理が施されている可能性がある。土師器坏 205 はＰ 13 と 19 出土遺物の接合資料である。内

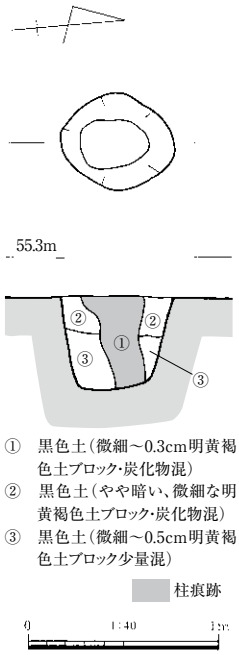
外面ともナデ調整される。須恵器 206 は重複関係がある P 22・23 から出土している。底部外面には、回転糸切りによる底部切り離し痕跡がみられる。（森本）

整地層出土遺物（第 80 図）

Ｃ４グリッドを中心に堆積する整地層中より、土器及び鉄関連遺物が出土している。207 ～ 210、F 52 ～ 54 を図化した。207・208 は土師器坏で、内外面とも赤色塗彩が施される。高台坏 209 は、外面に赤色塗彩を施し、内面には黒色処理を施している可能性がある。須恵器坏 210 内面には、「×」状のヘラ記号が認められる。F 52 は鋳鉄製鍋体部から底部にかけての破片と思われる。器壁は厚く、やや湾曲する。F 53 は鎌の破片であろうか。F 54 は碗形鍛冶滓である。（森本）



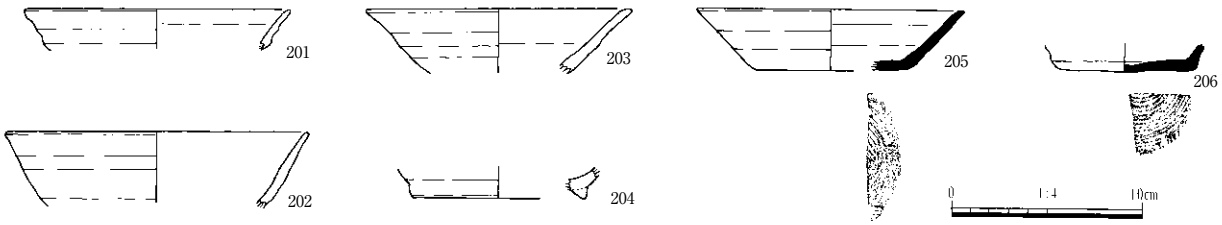
第77図　P20



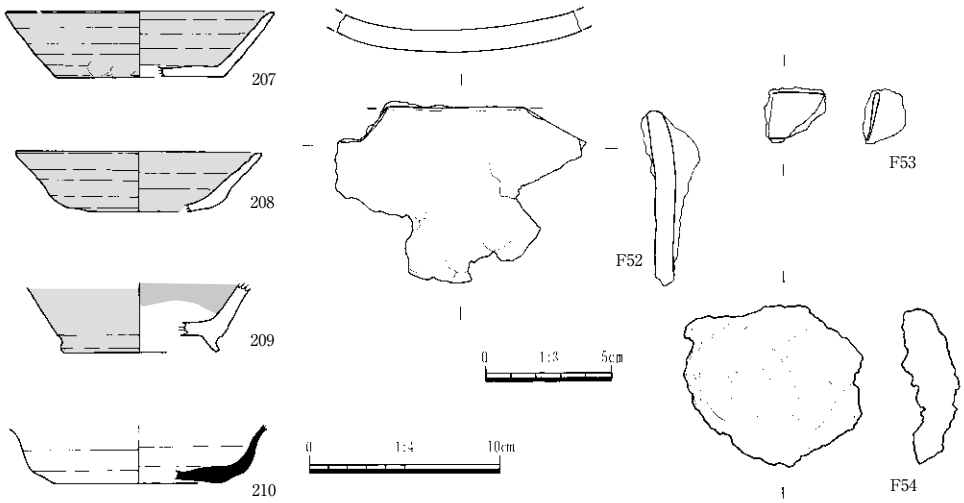
第78図　P24

掘立柱建物5（第 81 ～ 83 図、図版7）

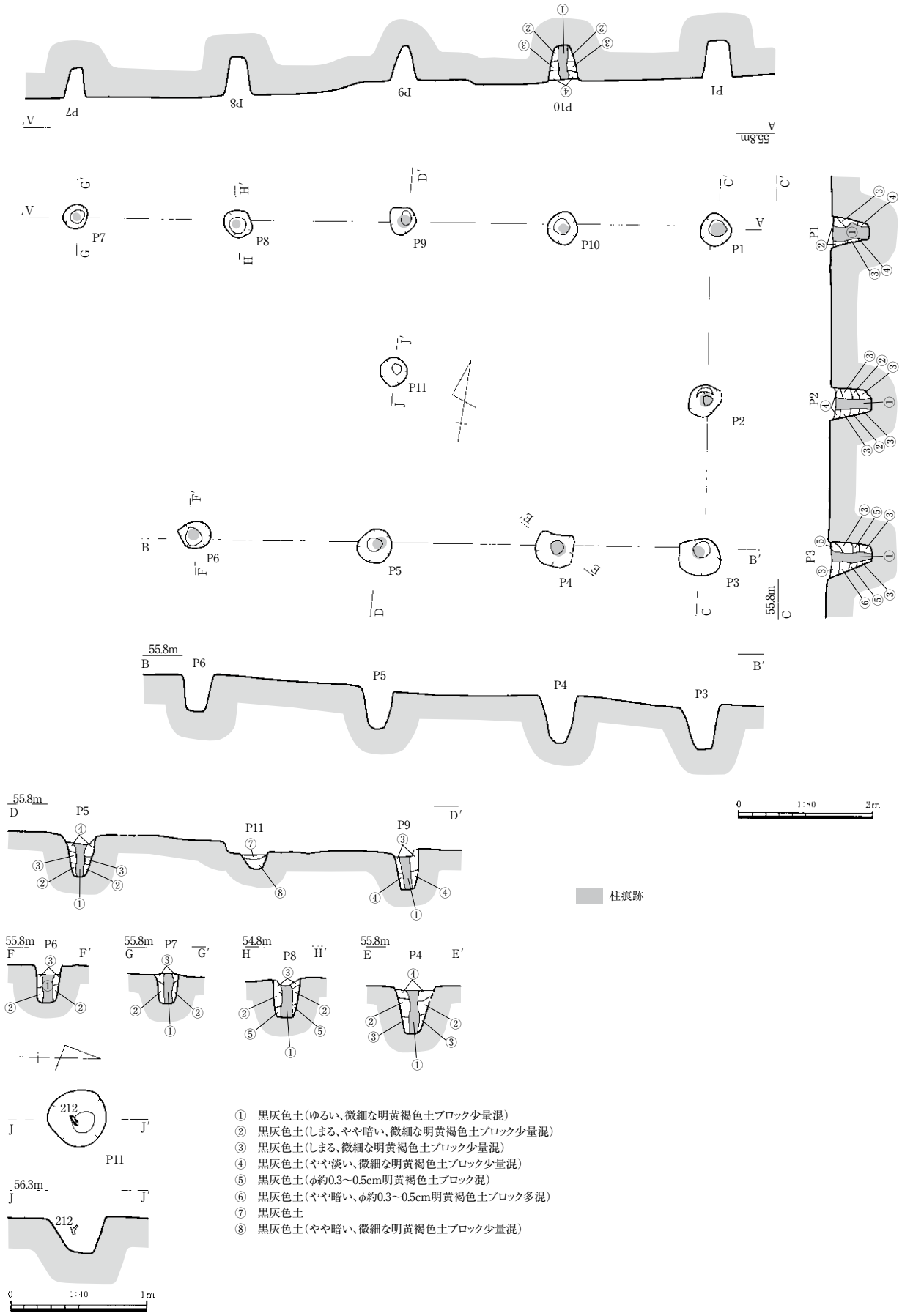
Ｄ・Ｅ４・５グリッドに位置する。Ⅳ層除去後、Ｐ１～３はⅤ層、Ｐ４～ 11 はⅥ層において検出した。西側は調査区外となり未検出である。北側は、同一面において検出した柵３と近接する。桁行４間（9.5 m）



第79図　整地層上面検出ピット出土遺物



第80図　整地層出土遺物



第81図　掘立柱建物５・Ｐ11遺物出土状況図

以上、梁行２間（4.8 m以上）の東西棟であり、主軸は８°西偏する。柱掘り方は平面円形を呈し、Ｐ１～10の検出面での規模は長軸が39～61㎝、短軸37～54㎝を測る。深さは27～70㎝を測り、底面の標高は54.40～54.99 mである。桁筋の柱間寸法は2.1～2.7 m、梁筋は2.2及び2.5 mである。Ｐ１～10の土層断面では径12～17㎝程度の柱痕跡が観察される。柱穴の土層断面を観察した結果、建替えの痕跡は認められない。

出土遺物は、Ｐ10より須恵器坏211が出土している。底部外面には回転糸切りによる切り離し痕跡がみられる。

なお、本遺構中央部にＰ11を検出した。Ｐ11はＰ５－９と筋が通り、平面規模も近似することから、本遺構に伴うものと判断した。土層断面を観察した結果、柱痕跡は認められない。⑨層上面には須恵器高台坏片212が出土している。

遺構の時期は出土遺物、及び検出した遺構面より判断し、９世紀後半以降と思われる。　（森本）

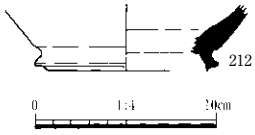
表７　掘立柱建物５柱間距離（心々）

ピット	距離（m）
Ｐ１－Ｐ２	2.5
Ｐ２－Ｐ３	2.2
Ｐ３－Ｐ４	2.1
Ｐ４－Ｐ５	2.7
Ｐ５－Ｐ６	2.7
Ｐ７－Ｐ８	2.4
Ｐ８－Ｐ９	2.5
Ｐ９－Ｐ10	2.3
Ｐ10－Ｐ１	2.3
Ｐ４－Ｐ10	4.7
Ｐ５－Ｐ９	4.9
Ｐ６－Ｐ８	4.7
Ｐ５－Ｐ11	2.6
Ｐ11－Ｐ９	2.3

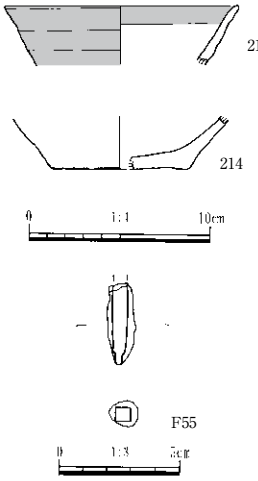
柵２（第84・85図）

Ｄ４・５グリッドに位置する。整地層除去後、直線的に並ぶ４基のピット（Ｐ１～４）を検出した。本遺構は柵列として扱ったが、遺構が調査区外に延び、本来は掘立柱建物等の遺構である可能性も考えられる。主軸は82°東偏し、Ｐ１・２はⅤ層、Ｐ３・４はⅥ層上面において検出した。柱掘り方の平面形はややいびつな隅丸方形を呈す。Ｐ１～４の検出面での規模は長軸70㎝前後である。深さは41～59㎝を測り、底面の標高は54.42～54.57 mである。柱間寸法は心々で2.1～2.5 mとなる。Ｐ１①層、Ｐ３・４②層は柱を抜き取った痕跡と思われる。

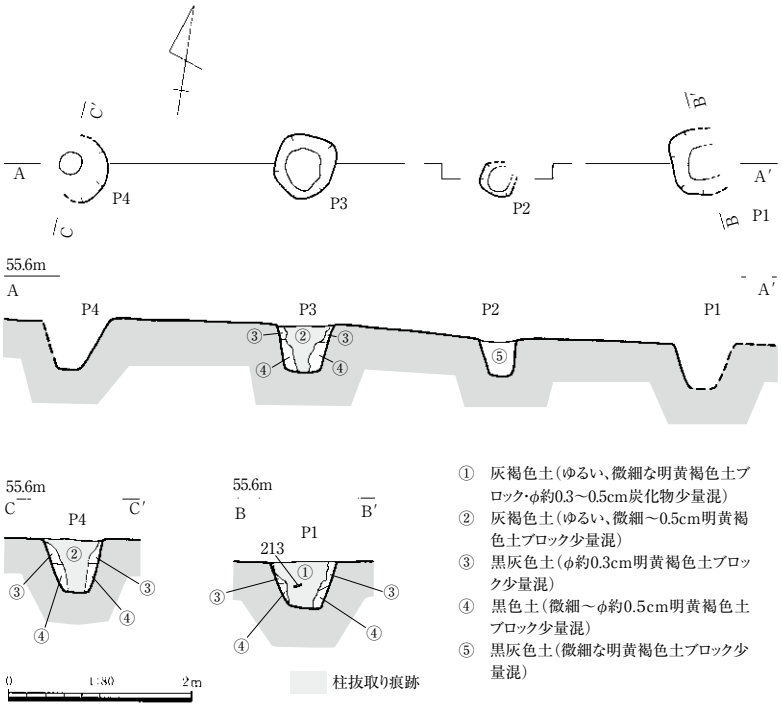
第82図　掘立柱建物５Ｐ10出土遺物



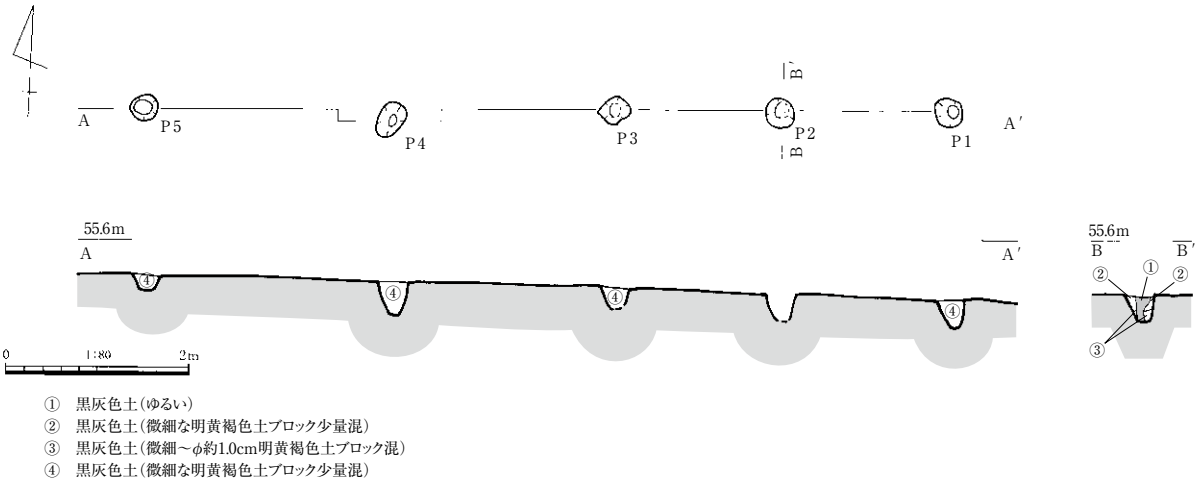
第83図　掘立柱建物５Ｐ11出土遺物



第84図　柵２出土遺物



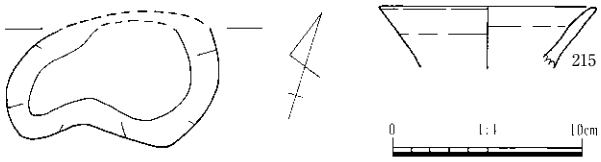
第85図　柵２



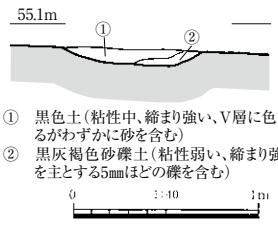
第86図　柵３

出土遺物は213・214、Ｆ55を図化した。213・214は土師器坏で、213は外面が黒色処理されている。Ｆ55は棒状の不明鉄製品である。

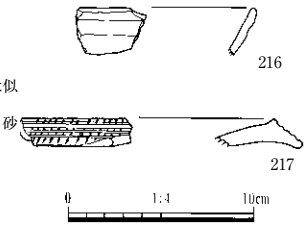
本遺構の時期は出土遺物より判断し、10世紀後半以降と思われる。（森本）



第88図　柵３出土遺物



第87図　土坑７



第89図　土坑７出土遺物

柵3（第86・88図）

Ｄ４・５グリッドに位置する。Ⅳ層除去後、直線的に並ぶ５基のピット（Ｐ１～５）を検出した。主軸は87°東偏し、Ｐ１・２はⅤ層、Ｐ３～５はⅥ層上面において検出した。柱掘り方の平面形は円形を呈す。Ｐ１～５長軸29～40cm、短軸26～32cmを測る。深さは17～38cmを測り、底面の標高は54.61～55.09ｍである。柱間寸法は心々で1.8～2.7ｍとなる。Ｐ２の土層断面を観察した結果、径７cm程度の柱痕跡が認められた。Ｐ４より土師器坏215が出土している。内外面とも回転ナデ調整されている。

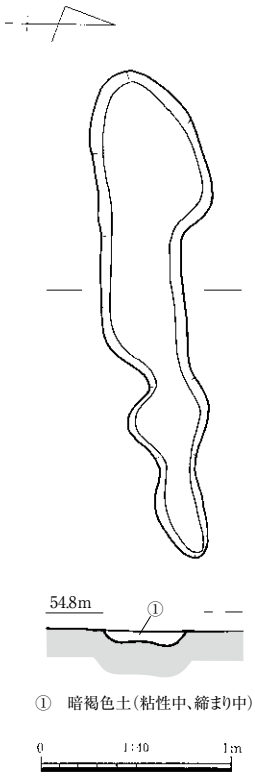
本遺構の時期は出土遺物より判断し、10世紀後半以降と思われる。（森本）

土坑7（第87・89図）

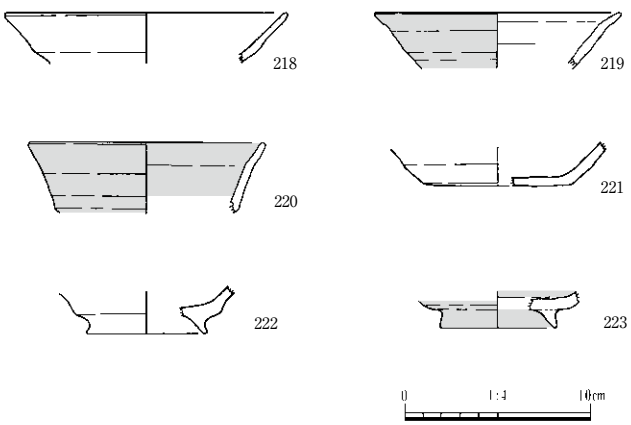
Ｆ１グリッド南東側で確認した平面不整形の土坑である。規模は長軸約1.1ｍ、短軸72cm、深さ８cmを測る。埋土は２層見られるが、下層には砂礫を主体とする黒灰褐色土が堆積する。本遺構は確認面の形状から土坑として扱うが、埋土に砂礫を主体とする層が認められることから判断すると、本来溝としての機能を有していたと思われる。周辺には西７ｍの位置に、遺存状況は良くないものの、同様の埋土の状況を見せる溝32が存在し、本来は一連の溝状遺構であった可能性もある。

出土遺物には土師器坏216、弥生土器壺217が見られる。217は後世の混入であるが、216は回転ナデによって調整される口縁部の形態から伯耆国庁編年２様式ころのものと思われる。

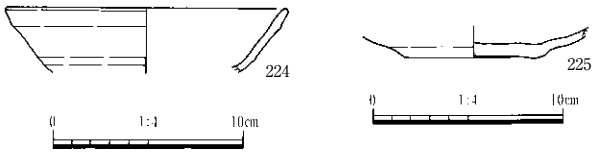
本遺構の時期であるが、出土遺物、確認面、関連した可能性もある溝32の状況から平安時代前半、９世紀代であったと考えられる。（野口）



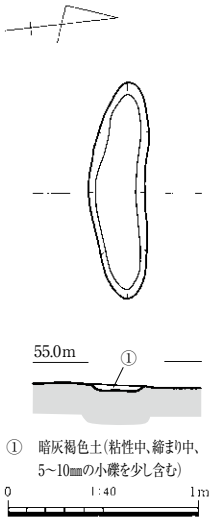
第90図　溝24



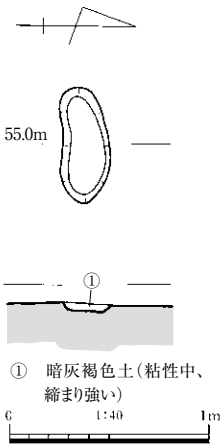
第91図　溝24出土遺物



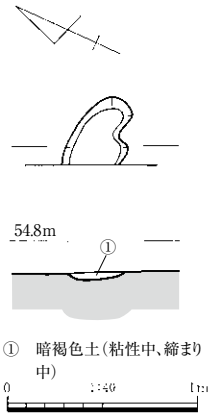
第92図　溝25出土遺物　第93図　溝27出土遺物



第94図　溝25



第95図　溝26



第96図　溝27

溝 24（第 90･91 図、図版8）

Ｃ２グリッド北西隅に位置する。東西方向に走向する溝状遺構で、規模は長さ2.6ｍ、幅19～61㎝、深さ８㎝を測る。埋土には小礫を含んだ暗褐色土が堆積する。遺構底面は、東西両端の標高西端で54.61ｍ、東端で54.66ｍと西側が若干低い。

出土遺物には土師器坏218～223が見られる。222、223は高台坏の破片である。調整はいずれも回転台によるナデが施される。また、219、223は外面、220は内外面を赤彩する。

本遺構の時期は、上記の出土遺物が、伯耆国庁編年の２様式に相当し、底部資料に糸切り痕を残す３様式を含まないことから、９世紀代の時期が考えられる。また、本遺構東側には、後述する溝27が位置し、一連の遺構の可能性がある。（野口）

溝 25（第 92・94 図）

調査区北側、Ｃ２グリッドに位置する。東西方向に走向する溝状遺構で、長さ約1.1ｍ、幅30㎝、深さ４㎝を測る。埋土は小礫を含んだ暗褐色土が堆積し、付近に位置する波板状凹凸遺構や溝26とその色調を同じくするが、波板状凹凸遺構等に比べ締りはない。出土遺物には、回転台によるナデ調整が施される土師器坏224が見られる。

本遺構の時期は、出土土器224が細片のため詳らかでないものの、本遺跡出土の伯耆国庁編年２様式のものと色調や形態が近いことから当該期に相当するものと考えられることや、遺構が確認される層位から９世紀ころの時期と考えられる。（野口）